

# 奈良国立文化財研究所年報

1984

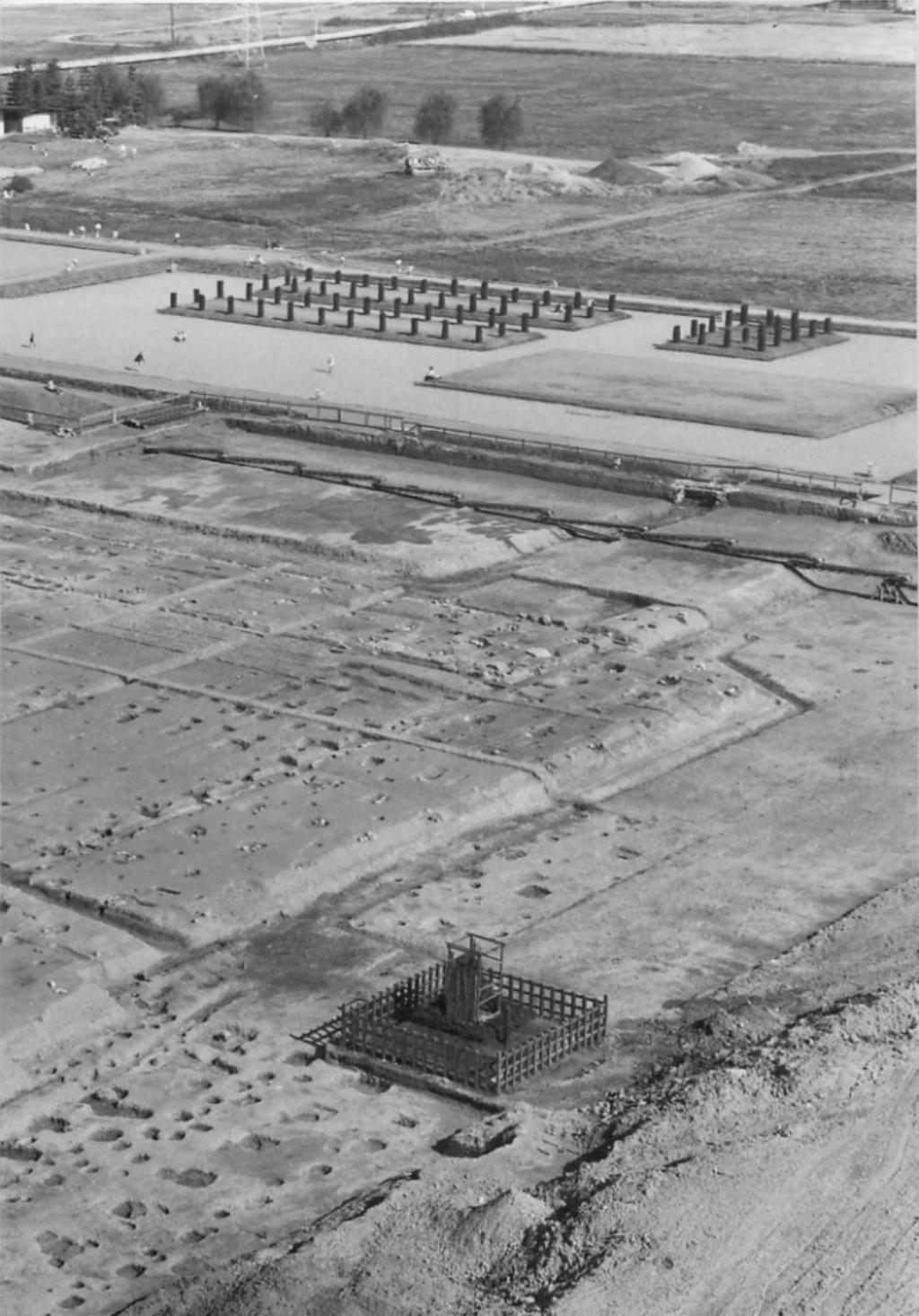


奈良国立文化財研究所

撮影 井上直夫

1. 山田寺東回廊





撮影 館 幹雄

2. 平城宮跡第二次大極殿院閻門・東面回廊・南面東回廊(南西から)



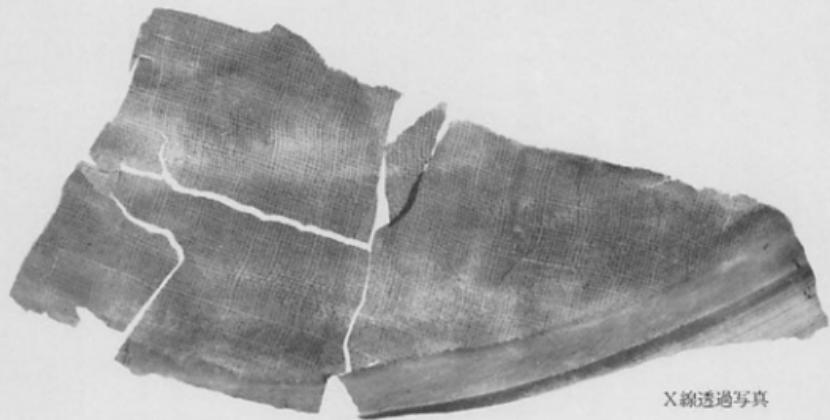
3. 上 開門下層の門(東から) 撮影 八幡扶桑

4. 下 東大溝と橋脚(西南から) 撮影 佃 幹雄



撮影 井上直夫

5. 上 石神遺跡東西廻(東から) 6. 下 藤原宮跡西面中門(北から)



X線透過写真



7. 上 平城京左京二条二坊十三坪出土漆器 摄影 佃 幹雄 8. 下 山田寺出土斗拱 摄影 井上直夫



(題 簿)



10. 上 日高山1号墳の埴輪 撮影 井上直夫

11. 下 平城宮跡の整備と復原大垣 撮影 佃 幹雄

## 目 次

口絵	1. 山田寺東回廊 2. 平城宮跡第二次大極殿院間門 3. 閣門下層の門 4. 平城宮跡東大構と橋脚 5. 石神遺跡東西解	6. 藤原宮跡西面中門 7. 平城京左京二条二坊十三坪出土漆器 8. 山田寺出土斗拱 9. 平城宮跡出土木簡 10. 日高山1号墳の埴輪 11. 平城宮跡の整備と復原大垣
はじめに		1
山田寺東回廊の調査		2
飛鳥地域の調査		6
藤原宮跡・京跡の調査		11
飛鳥寺旧本尊台座の調査		18
定林寺石造露盤の調査		20
平城宮跡・京跡の調査		21
京内社寺の調査		32
平城宮跡・京跡出土の木簡		34
法隆寺の調査		37
興福寺所蔵「論義草」等の紙背文書		38
滋賀県近世社寺建築の調査		42
旧奈良町の町並調査(II)		44
奈良市農村集落・農家悉皆調査		46
日本の農家の系統的研究		47
法隆寺百萬塔の調査		48
飛鳥資料館の特別展示		49
年輪年代学(4)		50
一般カメラによる写真測量		52
遺跡探査法の開発(2)		53
情報機器活用システムの開発研究		54
条里制研究会(第3回)		56
平城宮跡・藤原宮跡の整備		57
在外研修報告		61
公開講演会発表要旨		62
平城宮出土金属製人形		63
調査研究彙報		64
奈良国立文化財研究所要綱		66

## 目 次

口絵	1. 山田寺東回廊	6. 藤原宮跡西面中門
	2. 平城宮跡第二次大極殿院間門 東面回廊・南面東回廊	7. 平城京左京二条二坊十三坪出土漆器
	3. 門門下層の門	8. 山田寺出土斗拱
	4. 平城宮跡東大溝と橋脚	9. 平城宮跡出土木簡
	5. 石神遺跡東西扉	10. 日高山1号墳の埴輪
		11. 平城宮跡の整備と復原大垣

はじめに	1
山田寺東回廊の調査	2
飛鳥地域の調査	6
藤原宮跡・京跡の調査	11
飛鳥寺旧本尊台座の調査	18
定林寺石造露盤の調査	20
平城宮跡・京跡の調査	21
京内社寺の調査	32
平城宮跡・京跡出土の木簡	34
法隆寺の調査	37
興福寺所蔵「論義草」等の紙背文書	38
滋賀県近世社寺建築の調査	42
旧奈良町の町並調査(II)	44
奈良市農村集落・農家悉皆調査	46
日本の農家の系統的研究	47
法隆寺百萬塔の調査	48
飛鳥資料館の特別展示	49
年輪年代学(4)	50
一般カメラによる写真測量	52
遺跡探査法の開発(2)	53
情報機器活用システムの開発研究	54
条里制研究会(第3回)	56
平城宮跡・藤原宮跡の整備	57
在外研修報告	61
公開講演会発表要旨	62
平城宮出土金属製人形	63
調査研究彙報	64
奈良国立文化財研究所要項	66

## はじめに

昭和58年度の研究所の活動をふりかえると、第一に、平城宮跡第二次大極殿地区の発掘成果が注目される。第二次大極殿地区では、これまでに大極殿基壇および後殿などの発掘を実施してきた。58年度は、大極殿前庭部や南門・回廊部分の発掘をおこない、4期にわたる棟敷や軒を仮設した遺構、闇門、回廊などを検出した。これによって、宮殿々舎の配置の変遷が知られるようになっただけでなく、今まで文献から推定するのみであった8世紀後半の宫廷儀礼の実態を、実地の遺構から考察できる可能性が生れた。平城宮跡発掘調査の一つの時期を劃する成果というべきであろう。

第二は山田寺東回廊の発掘成果である。57年度に、予想だにしなかった創建時回廊が倒壊したままの状態で検出された。58年度には、そこから回廊東南隅までを発掘し、又首以外の回廊の部材全てを検出できた。法隆寺西院伽藍に加え、新たに7世紀半頃の木造建築の実態を明らかにできたことは、わが国古代建築史上稀有のことと評価される。目下、検出した部材の保存処理体制および機器の充実が急務となっている。

第三は石神遺跡の発掘成果であろう。平城京、藤原京、飛鳥地域においても着々と成果を挙げつつあるが、なかでも、須弥山石・石人像出土の西隣で、二回にわたる堅固な間障遺構が検出されたことは、飛鳥寺・水落遺跡との関連もさることながら、発掘区以北の7世紀後半の遺構の理解に大きな示唆を与えるものと考えられる。

第四に、埋蔵文化財センターで実施している年輪年代学研究は、わが国の年輪年代学の確立に今一步のところまでせまったものと自負しており、また、古代史データ活用システムも実用の域に達し、情報機器の活用という永年の夢が実現しつつある。

その他、多岐にわたる研究が、研究員の努力により着々と進行している一端を、本年報によって御理解いただければ何よりと考えている。とはいって、日進月歩の学問の世界で、現状への安住は許されない。近年の人員と予算における厳しい事情に如何に対処すべきか、きびしい御批判とさらなる御鞭撻のほどを乞い願うものである。

昭和59年12月25日

奈良国立文化財研究所長

坪井清足

## 山田寺東回廊の調査

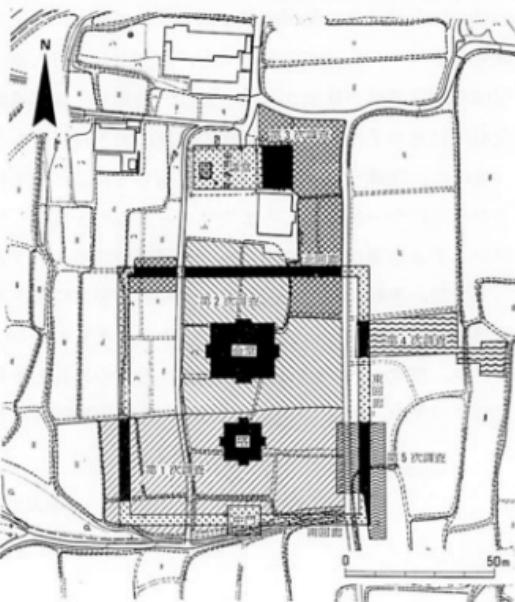
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

昨年度の調査では、東回廊の建物が倒壊した状態でみつかり、大きな話題となった。大量の建築部材は、遺存状況も良く、回廊建物の上部構造を知る上で大きな手掛りとなった。今回は回廊建物のより詳細な復原資料を得ること、東回廊南北規模を確定することなどを目的として調査を実施した。調査地区は、第4次調査地の一部（東回廊北から15・16間目）を北端に含めた南北40m、東西15mの範囲である。調査の結果、第4次調査につづいてさらに南に、倒壊した状態の東回廊建物そのものを検出するとともに、東南隅の礎石の発見によって、回廊の南北規模を決定することができた。

**回廊** 検出した部分は、東回廊の北端から15～23間目計9間分にある。南北規模についてはこれまで22間あるいは23間と推定されてきたが、東南隅の礎石が確認でき、23間であることが判明した。

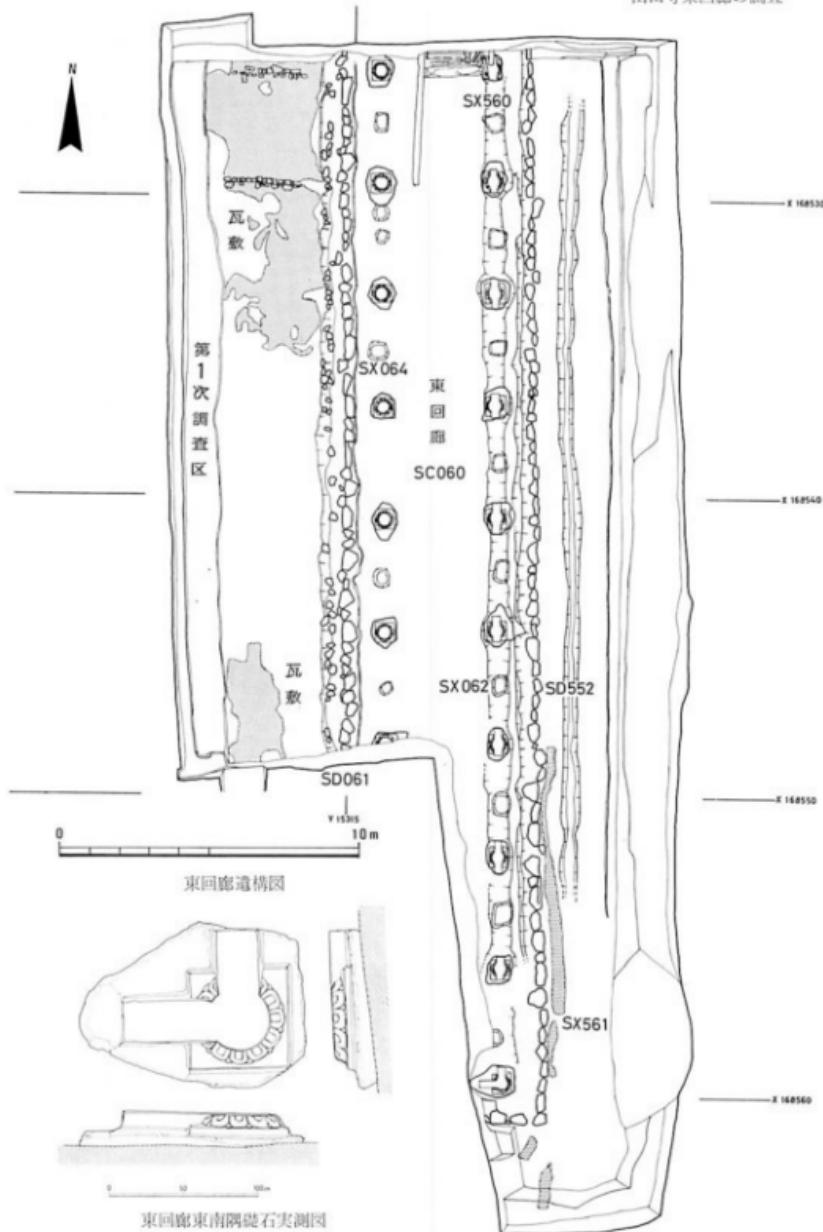
調査地の土層は、上層から耕土・床土・灰褐色砂混り粘質土・灰色砂混り粘質土・暗青灰色砂混り粘質土・暗茶褐色粘質土・暗青灰色粘質土・回廊基壇土の順序である。暗茶褐色粘質土中には、多量の瓦と回廊部材が含まれていた。また、その上層の暗青灰色砂混り粘質土層から床土直下にかけては砂と粘質土が複雑に入り混り、土砂の流入・堆積が繰り返された状況がみられた。

回廊は土間床の单廊である。古墳時代の遺物を含む層および花崗岩風化土を平坦に整地した後、版築をおこなって基壇を築成している。基壇縁には回廊内外とも花崗岩自然石を一段立て並べて化粧としており、西（内）側にのみ雨落溝を設ける。基壇幅は6.4m、礎石上面までの基壇高は東（外）側で約60cm、西側で約45cmである。基壇西側にはバラス敷とその下層の瓦敷がみられる。このバラス敷は、10世紀代に回廊内全体にわたって敷



山田寺調査位置図

山田寺東回廊の調査



きつめられたものと一連のもので、その下層の瓦敷は8世紀中～後半頃のものである。

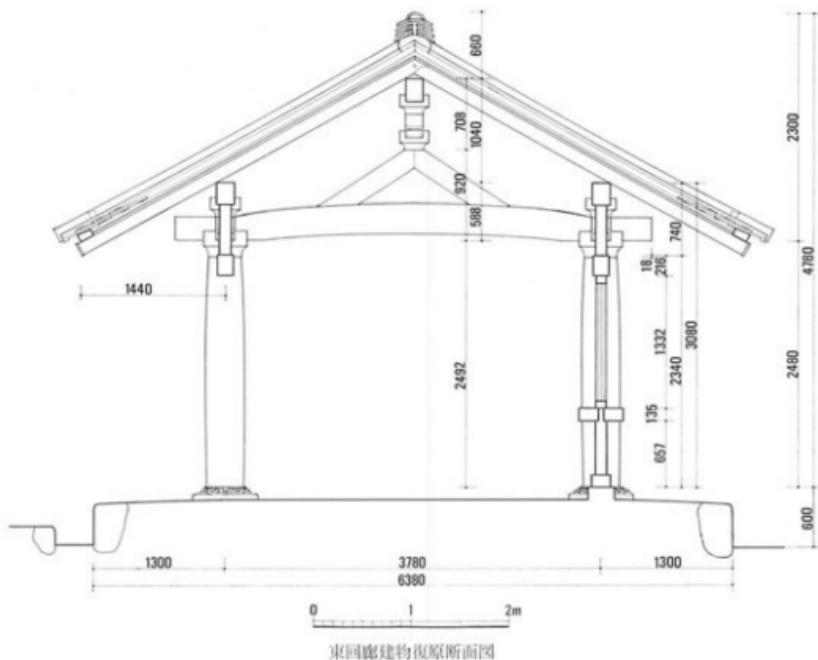
礎石はすべて花崗岩製で、一边約65cm、高さ約5cmの方座の上に、上面径約42cm、高さ約7cmの円形蓮華座が造り出されている。東側礎石には、連子窓が連なるため、それぞれ南北に地覆座が造り出している。これに対して西側には、各柱間が開放になるので地覆座はない。また、東南隅の礎石は北と西の矩折れに地覆座をともなう。柱間は桁行・梁間とも礎石心々で3.78m（1尺=36cmの高麗尺で10.5尺）の等間である。

**建築部材と屋根瓦**　回廊基壇上には多量の瓦が全面に覆い被さり、基壇西端から約3m西側にまで拡がっていた。屋根にのっていた瓦が落下して堆積したもので、こうした状況から回廊は東から西に向って倒壊したものと思われる。瓦堆積の下から出土した建築部材も東から西に倒れた状態を示し、このことを裏付けている。

瓦の堆積は基壇上面で厚さ20cmにも及ぶが、回廊基壇17～20間目にかけては、屋根瓦が20数列屋根からそのままずり落ちた状態で出土している。このことから回廊の屋根の本瓦葺は平瓦二枚重ねで葺かれ、葺き足が長いことが判明した。一方、軒瓦の落下状況をみると、東側柱筋の基壇上面と西側雨落溝の西1～3mの範囲に軒平瓦が集中するのに対して、軒丸瓦や垂木先瓦は基壇のすぐ外側に多くみられる。このことから、軒丸瓦や垂木先瓦は、回廊倒壊以前にすでにかなりの数量が軒先から落下していたものと思われ、倒壊以前に回廊の荒廃が進んでいたことが知られる。

瓦堆積を取り除いた基壇面直上および雨落溝西側のパラス敷上面で建築部材を検出した。部材は、北方3間分が比較的原位置に近い状態で倒れているのに対して、それ以南は広範囲にわたって散乱している。

部材には、柱や頭貫・連子窓などのほか、今回新たに出土したものに大斗・虹梁・肘木・巻斗・桁・垂木・垂木込栓・茅負・屋根板などがある。大斗は全体幅43.5cm、斗尻幅31.5cm、全体成25cmである。法隆寺金堂・回廊等にみられる皿盤はない。大斗の上には虹梁、その上に肘木が組み合う。虹梁は中央に向ってのびのある曲線で反り上がる。上面中央から70cmほどのところに腐朽した雀みがあり、この位置に又首が立っていたものと思われる。肘木は完全な形ではなかったが柱通りと棟通りの各1本がみつかった。木口は垂直、下端の曲線は比較的ゆるやかで、舌がつくりだされ、上面には箆縄りがつけられている。巻斗は全体幅30cm、斗尻幅18.5cm、全体成19cmで、木口斗となる。柱上の三ツ斗は肘木と丸太柄で、棟通り肘木下の斗は又首交点の柄で組み合わされる。桁は角材で、一本だけ発見した。垂木は直径12.5cmの円垂木で、棟位置で相対する垂木と合わせて、円形の込栓を打つ。茅負はほぼL字型の断面を持ち、上面に直接瓦縁りをほどこす。屋根板は垂木の上に敷き並べて屋根下地としたもので、軒先部分ではさらにこの上に木舞を編んで瓦下地をつくったようである。壁は、木を割り裂いた木舞に荒壁をつけ、その上を直接白土で仕上げている。なお、使用木材の大半はヒノキ材であるが、柱はクス材（1本のみヒノキ）である。一部にケヤキ材の大斗や巻斗もみられる。



**まとめ** 昨年の第4次調査で出土した東回廊の建築部材に加え、今回の調査でも大量の部材がみつかった。特に第4次調査で出土しなかった組物や小屋架構材、軒廻り材が新たにみつかり、さらに屋根瓦の葺き方までわかったことは大きな成果であった。これらの資料をもとに上図のような復原断面図を作成することができたが、飛鳥時代の様式を現在に伝える法隆寺西院回廊と比較すると、柱の高さを含めて立ちあがりが低く、構成部材の断面も大きく、どっしりとしていて、細部ばかりでなく全体の意匠にも大きな差異がある。このように飛鳥時代建築を考える上で新しい一例を加えたことの意義は大きい。

また、第4・5次調査を通じて、東回廊の歴史的沿革をほぼ明らかにすることができた。まず、造営年代は金堂と余り隔たらない7世紀中頃と考えられ、塔や講堂はやや遅れて7世紀後半頃完成する。その後、9世紀前半～中頃に地覆石の一部が抜き取られるなど回廊は改修を受けた様子がみられるが、10世紀代には屋根の軒部分を中心に荒廃もかなり進み、10世紀末～11世紀前半頃に至って倒壊する。このように多くの事実が明らかになったが、東回廊については、東北隅の確定や中央部分に予想される出入口の確認など、究明すべき問題が今後に残されている。山田寺全体についても、南門や寺域の確認、僧房等の諸施設を明らかにすることが重要な課題である。

(村上謙一)

# 飛鳥地域の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

## 1. 石神遺跡第3次調査

飛鳥寺の北西に接する石神遺跡は、1902年に須弥山石・石人像が出土した遺跡として知られている。当調査部では1981年に石造物出土地点の再確認も含めて、第1次調査を開始して以来周辺の調査を継続しておこなってきた。今調査区は、第1次調査区に西接し、「瀬戸」で有名な水落遺跡の東北に接した水田にあたり、石神・水落両遺跡の関連をとらえるうえでも絶好の調査地であった。

第1・2次調査では、複雑に曲折する石組溝、掘立柱建物、塀等7世紀中葉の遺構と、これらの遺構を埋め立て整地した後に造営した掘立柱建物、屏、石敷等7世紀後半の遺構との2時期の遺構を検出している。今回検出した主な遺構も同様の2時期に大別できる。とくに7世紀後半の遺構は、前2回の調査結果と同様、7世紀中葉の遺構を施設した後に、大規模な整地をして造営していることが確認され、遺跡の性格が一変したことが一層明らかになった。

7世紀中葉の遺構　塀・掘立柱建物・石敷等を検出した。調査区の中央には東西溝S A 600が19間分(約46m)ある。柱掘形は一辺約1.8m、深さ2m、柱痕跡径約0.35mの大規模なものである。

S A 600の基壇は柱を立てた後に版築で築かれている。柱心から南約1.9mの距離に化粧石を立て並べ、基壇南縁としている。発掘区東北には3間(7.8m)×2間(4.2m)の南北棟の龜柱建物S B 620が建つ。発掘区東端には南北石組溝S D 332(幅約0.7m、深さ約0.6m)がある。S D 332は第1次調査区で検出した東西溝S D 331の延長部で、S D 331の屈曲部の7m西で北に折れ、北流する。北半部は間層を挟んで底石が二重に敷かれ、一部の側石とともに改修をうけている。S D 332は S A 600・S B 620の造

營に次いで掘削され、S A600の東から2間目を貫通する。S A600の北側には上記の遺構以外に、石敷・礫敷が存在する。S X700は人頭大の河原石を敷きつめた石敷で、発掘区西北部で東西13m、南北13mを確認した。周辺の自然地形に沿って西北方向へ傾斜しており、調査区外へ続いている。東端には南北方向に見切石S X660を並べており、その東にはS X600と上面を掘えた礫敷が広がる。S A600の南側には、11間(30.6m)×2間(4.8m)の長大な獨立柱東西棟S B530が建つ。この南側柱に接するようにして東西石組溝S D333がある。S D333はS B530の雨落溝をもかねている。S D333は自然地形とは逆に東流し、第1次調査区南隅で石組溝S D330に合流する。今調査区ではS D333の側石はすべて抜き取られ、底石だけが残存していた。S D333の南には石敷S X526が広がる。S B530とS A600の基壇の間に南北棟S X555が広がり、S B530の西妻付近から西は人頭大の石敷S X550となる。S X550は西南方の台地状緩斜面S X551を覆っている。

7世紀後半の遺構　塀・獨立柱建物・方形石組遺構等を検出した。東西塀S A560は7世紀中葉の塀S A600の南1.2mに位置する。柱間は両者一致している。S A560の基壇は、S A600の基壇上にさらに約20cm版築をして造成されている。基壇南縁は柱心の約1m南にあり、河原石で化粧されている。柱振形は一辺約1m・深さ1mで、S A600に比して規模は小さくなっている。S A560は東へのびて、第1次調査区のS B325の南側柱にとりつくものと考えられる。S A560の南には5間(9.9m)×3間(4.0m)の北庇をもつ東西棟S B520および、東庇をもつ南北棟S B510が建つ。S B510・520と第1次調査区で検出した南北棟建物S B301の3棟は柱筋が揃っており、一連の造営による建物と考えられる。S B520の西には、内法3m×3.2m、深さ0.6mの方形石組遺構S X540が構築される。幅0.4m～0.9mの自然石を2～3段積んで側

石とし、底面には拳大の礫が敷かれる。側石の裏込めには黄色粘土が使用され、底面の礎石もこの粘土上に敷かれている。S X 540 は貯水施設とも考えられるが、これに直接とりつく取水・排水施設はない。S A 560 の北側では、この時期の造構は確認されていない。

まとめ 今回の調査でとくに注目すべきものは、7世紀中葉・後半両時期の二条の東西壁 S A 600・560 である。7世紀中葉の S A 600 は東・西への延長部が未確認であり、その性格を確定できない。

しかし、西南に接する水落遺跡に

石神遺跡・水落遺跡主要造構配置図

は同時期に造営された漏刻建物と付属建物が存在しており、長大な建物 S B 530 もこれらの建物群と一連の施設と考えられるため、S A 600 は水落遺跡の北側を画する施設である可能性が高い。また、第1次調査で検出した須弥山石の倒壊位置は S A 600 の北側にあたり、S A 600 の北側に広がる石敷・礎敷は、須弥山石・石人像を含めた饗宴の場に関連した施設に相当するものであろう。このように飛鳥寺の西の地域は、用途に応じていくつかの区画に分けられていたことが推定できる。

7世紀後半の S A 560 は第1次調査区の S B 325 にとりつき、さらに東にのびる S A 305 へと続く。その総延長は 80m に達し、さらに東西に延びているので、この辺は飛鳥盆地の中央を東西に横断していた可能性がきわめて強い。とすれば、S A 560 は、この北方に存在する重要な施設の南を張る大垣にあたる施設と考えられる。この S A 560 と飛鳥寺北面大垣との間隔は約 10m である。この東西に長い空間地は、『日本書紀』の「壬申の乱」の記事にみえる「飛鳥寺北路」との関連も考えられる。

## 2. 飛鳥寺周辺の調査

石神遺跡南方の調査 石神遺跡の南約 70m の地点で農小屋建設にともなう事前調査を実施した。幅 1m の東西トレンチ 2 本のうち東トレンチでは、30cm 大の河原石を平坦に敷きつめた石敷 S X 506 を検出した。石敷の隙間は広く、平瓦片が混入していた。石敷面は、周辺の自然地形とは逆に東に向かって緩やかに下降し、東西 6m の間での比高差は約 10cm である。西トレンチは東トレンチと 5.5m の間隔をおいて設定した。西トレンチでは石敷は認められず黄色粘質土の造構面で土塙 S K 507 を検出したのみである。黄色粘質土層の厚さは約 60cm で、その上面は石

## 石敷遺跡南方遺構図

敷面より約20cm高い。西トレンチと東トレンチとでは遺構の状況が異なるが、両トレンチ間の調査はできなかった。しかし、石敷面が自然地形に反して東方に下降する事実を考えあわすと、黄色粘質土が建物の基壇であり、石敷 S X 506 が基壇まわりの舗装であった可能性もある。

東トレンチで検出した石敷の東端と、飛鳥寺の西面大垣想定線との間隔は約20mである。飛鳥寺西方では、大垣の西約25mに南北溝がある。この溝は今調査区の南約40mまで北流していることがこれまでの調査で確認されている。西トレンチはその溝の北への延長線上にあたっているが、南北溝がこの地点までは延びていないことがあきらかとなった。また、飛鳥寺に西接する位置で検出した石敷遺構は、「西根広場」とも関連し、近接する水落・石神丙遺跡ともども、飛鳥寺西方の地の性格を考える上で重要な資料となろう。

**飛鳥寺南方の調査** 1956・57年の3次にわたる飛鳥寺の発掘調査で、南門の南方に幅2mの石敷の参道が約25mにわたって延びていることが確認され、石敷参道の南側には「石敷広場」と称された石敷遺構が参道を横切るように構築されていることがあきらかになった。参道は、石敷遺構と交差する地点から南が、石敷遺構より一段(約15cm)下がり、幅約3.7mの未舗装の参道として南へのびる。したがって、石敷遺構は未舗装の参道によって東西に分かたれている。この参道と石敷遺構との境いには、河原石を南北方向に並べて見切石としていた。石敷遺構は参道に対して、西で北へ7~8°振れており、この性格については種々の論議がなされてきた。

1982年には、石敷遺構を確認した地点から東約40mの位置で、石敷遺構の南を画すると考えられる施設を検出した。この調査の結果、石敷遺構は南北両端を緑石で区切る低い基壇状の石敷であり、その南にはさらに石組溝をともなうことがあきらかになった。また、その構築年代は石敷遺構の下層から出土した瓦によって、7世紀中頃以降であると考えられるようになった。

今回の調査は、参道の南延長線上における農小屋建設にともなうものである。南と北に2ヵ所のトレンチを設定した。検出した主な遺構は、石敷、石組溝、参道、土管を使用した暗渠等である。北トレンチの北部で検出した石敷 S X 01は30cm大の河原石を敷きつめたもので、その南縁には一回り大きい河原石を南に面をそろえて立てて南緑石とする。緑石の南沿いには、一段(約20cm)下ったところに犬走状の石敷 S X 661(幅約0.75m)が東西方向に設けられている。このS X 661にはS X 01に比して小ぶりの河原石が使用されている。この犬走状石敷の南には、幅約0.7m、深さ約0.2mの西流する石組み溝 S D 662が構築されている。溝の南北両岸には0.5m大の河原石を立て並べて側石とし、溝底には河原石を敷きつめている。石敷は、東側が未舗

装の参道 S F02に面し、前回の調査同様に河原石を見切石として、石敷の南縁に達なることがあきらかとなった。しかし、S X661とS D662は東西にびて、未舗装の参道を南北で区切るようになっており、S F02が南北約18mの規模でおわることが確認できた。

南調査区では、石敷道構の南約15mの位置に、暗渠1条を検出した。瓦製土管を東西方向に4.2mにわたって13本つなぎあわせたものである。瓦製土管は行基瓦丸瓦と同じ製作技法で作られている。この暗渠は調査区内での高低差はほとんどないが、瓦製土管の連結方式からみると、水は付近の自然地形とは逆に西から東へ流れていたものと考えられる。この暗渠の構築時期は、瓦製土管の形状・製作技法からみて、7世紀後半頃と考えられる。

今回の調査の結果、「石敷広場」と称されてきた石敷道構は、飛鳥寺の伽藍中軸線に対して7~8°の振れをもつ幅約20.5mの道路状道構と考えることができよう。また、飛鳥寺南門から南へのびる参道も、埴装・未舗装あわせて45mの規模となり、石敷道構の南縁までのびることが確認できたことにより、飛鳥寺の南限もここにもとめることができよう。また、今回の調査で新たに、飛鳥寺の南限以南に暗渠が検出されたことは、飛鳥寺寺域外の土地利用がいかになされていたか、という問題を考えるうえでも貴重な手がかりになると言えよう。(立木 伸)

飛鳥寺南方瓦製暗渠

飛鳥寺南方道構図

## 藤原宮跡・京跡の調査

### 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1983年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、藤原宮・京城において、西面中門・東方官衙・日高山など23件におよぶ発掘調査を実施した。以下に主要な調査の概要を報告する。

#### 1. 藤原宮跡

藤原宮西面中門（第37次）の調査 本調査は藤原宮の四至および宮城門の確認調査のひとつとして実施したものである。西面の宮城門のうち、中門を中心とした地域を対象に選び、中門の位置・規模および西面大垣と外濠の確認を目的として調査地域を設定した。検出した主な遺構には藤原宮の西面大垣 S A258、同外濠 S D260、藤原宮廃絶以後の井戸・土壙などがある。

西面大垣 S A258は宮の西面を画する据立柱の大垣で、発掘区東南端で4間分（延長10.64m）を検出した。柱間は2.66m(9尺)等間で、これまでの調査で確認されている大垣の柱間と等しい。この大垣の北側が西面中門の位置にあるが、門の遺構は後世の著しい削平のためその痕跡をとどめていなかった。しかし、宮の東西中軸線が想定される位置は、大垣がとぎれる北端の柱穴から北15.2mのところにある。この距離を北に折り返すと南北30.4mとなり、これまでに明らかにされてきた宮城門と同じ桁行5間（延長25.2m）、梁間2間（延長10.1m）の平面規模を持つ門がこの間に存在したと考えることができる。また、原位置からは離れていたが、門

にかつて使用されていた礎石と唐居敷を各1個発見した。礎石は長さ133cm、幅138cm、厚さ87cmの花崗岩製で、平坦に加工した上面の一端に唐居敷との組合せ仕口と軸摺り穴の半分をほりくぼめてある。唐居敷は長さ145cm、幅128cm、厚さ40cmの花崗岩を加工したもので、上面を平坦にし、片面に寄せて蹴放し(地覆兼用)を造り出してある。蹴放しの一端は突出しており、その上面に方立の穴がうがたれ、その脇下面に軸摺り穴の半分をほりくぼめてある。今回出土した礎石と唐居敷は、その軸摺り穴の位置関係から見て直接には組み合うものではないが、同様の仕口をもつ他の唐居敷や礎石と組み合わされて、一对のものとして使用されていたことは明らかである。このように原位置を動いているといえ、藤原宮宮城門の礎石と唐居敷が発見されたのは今回がはじめてであり、宮城門の建築構造の復原に貴重な資料を加えることができた。

西面外濠S D260は、西面大垣SA258の西を北流する素振りの南北大溝で、25m分を検出した。この大溝は、宮の廃絶後も10世紀末頃まで用水路として機能している。東岸が著しく侵蝕されて当初の溝幅よりかなり広くなっている。現状で幅12m、深さ1.5mである。

井戸は3基(S E3440・3441・3442)を検出した。いずれも藤原宮の廃絶以後のもので、外濠に近接した位置に掘られている。S E3440は発掘区北端、外濠の東岸にあり、長さ82cmの厚板3段を井籠に組みあげた構造で、底には碇が敷きつめている。井戸の中からは9世紀末の土器や銭貨2点(降平永宝・貞觀永宝)が出土した。S E3441はS E3440の西であり、直径約35cmの曲物を3段に積み重ね、その上に底部を抜いた土釜を据えている。井戸の中からは10世紀後半の黒色土器の完形品が1点出土した。S E3442は外濠の南端西肩部にあり、曲物を2段に積みあげたものである。

出土遺物は外濠から発見されたものが多く、土器・瓦類のほかに木・金属・土製品、銭貨、木簡等がある。土器は8世紀前半のものが大部分で、9~10世紀のものもある。墨書き土器は49点出土したが奈良時代の土器の墨書に「宮」「三合」「藏」などがある。瓦には藤原宮所用瓦が多いが、奈良時代のものも少量ある。木製品には人形、多足机。土製品にはミニチュアの竈、土馬がある。木簡は2点出土したが、1点は「見奴久万昌」と読める。

今回の調査では西面中門の遺構は検出できなかったが、大垣の位置から門の存在が明らかとなり、さらに門に使用されていた礎石と唐居敷がみつかり、宮城門の姿を知るうえで貴重な資料を得ることができた。

## 東方官衙地域造構配置図

**藤原宮東方官衙地域（第38次）の調査**　藤原宮東方官衙地域では、これまで第30・35次調査によって官衙建物群を確認している。本調査もこれらの調査と一連のもので、官衙の規模や性格、建物群の基本的な配置を明らかにする目的で実施した。調査地は第35次調査区に西接している。検出した主な造構には掘立柱建物、掘立柱屏、溝、土塁、道路などがある。

掘立柱建物C（S B3300）は、第35次調査でその東半部がみつかっている。今回の調査では、西半部4間分を検出し、この建物が桁行9間（棟長26.37m、各柱間2.93m等間）、梁間3間（棟長8.18m、中央部3.50m、両端部2.34m）の規模で、柱筋のすべてに柱の建つ独立柱の建物となることが確定した。この結果、東方官衙地域では、東から桁行12間、梁間2間の掘立柱建物A、桁行11間、梁間2間で東東にある掘立柱建物B、掘立柱建物Cといずれも東西に長大な建物が、南側柱筋をほぼ揃えて建ち並ぶという特徴のある建物配置をとり、しかもそれぞれの建物が床の有無を含めて異なる平面をもっていることが判明した。掘立柱建物Dは、桁行2間以上、梁間3間の身舎の東・南に庇がつく南北棟の建物である。同棟は建物Cの西にあり、南妻柱列を建物Cの南側柱列に揃えて建ち、東方官衙の一連の建物群の西端に位置することがわかった。掘立柱屏Eは建物Dの西約16mにある南北屏で、9間分を確認した。柱間は約2.70m等間で、東方官衙地域の西を限る施設である。屏Eの西約1mと16mの位置には、素掘りの溝が南北に走り、想定東一坊大路先行条坊の両側溝と考えられる。これらの溝は、藤原宮期にも流路として機能していたと思われ、両溝間の空間は宮内道路Fとして使用されていた可能性がある。

そのほか、建物Cの南に接して桁行5間、梁間2間（各柱間2.25m等間）の東西棟建物、屏Eの西約5.6mの位置に南北屏1条を検出した。これらは藤原宮期より一時期古いものである。

このように本調査で東方官衙の東西規模と建物の配置状況の一部が明らかとなつたが、まだその全貌をつかむに至っておらず、今後の調査に期待するところが大きい。

## 2. 藤原京跡

### 日高山（第40次）の調査

櫛原市営住宅建設にともなう事前調査である。調査地は藤原宮の南約300mの日高山丘陵上で、藤原京条坊では右京七条一坊東南坪にあたる。丘陵の北裾には藤原宮所用瓦を焼いた日高山瓦窯が確認されている。丘陵上には古墳の痕跡すらみられないが、周辺地域の調査で、整地土等から4世紀末～6世紀前半の埴輪の出土例も多く、当該時期の古墳の存在が推定されていた。調査地ではすでに市営住宅・グランド造成の際に削平・盛土がなされており、盛土は厚いところでは4mにもおよんでいる。

調査面積は約870m<sup>2</sup>で調査区の北側では、盛土下で旧地形を確認するにとどまったが、南側では基底部一辺約18mの方墳（日高山1号墳）1基を検出した。主体部、墳丘の大半はグランド造成以前にすでに削平されており、地山を削り出した基底部を最高約1m残すだけであった。古墳は丘陵の東斜面に築造されている。墳丘を周辺から画するため、北・西・南側には巾4～5m・深さ1mの溝状の掘り込みがされている。この底面に墳丘裾から約1m離れて円筒埴輪がめぐる。12本分が原位置を保ち、各埴輪とも約30cmの掘方に対するえられていた。埴輪の間隔は3m弱とまばらである。原位置で確認した円筒埴輪のうち南側の1本は、ほぼ完全な形で立っていた。古墳以外の遺構には、古墳の溝状部の埋土を切り込む土礎がある。6世紀後半～7世紀前半に掘り込まれたものである。

埴輪列で検出した円筒埴輪には、すべての個体に黒斑があり、第1次調整のタテハケの後に第2次調整のB種ヨコハケがほどこされている。この特徴からみて、埴輪の年代は5世紀前半と考えられる。埴輪列周辺からは、原位置を保っていないが、蓋形埴輪（笠部・四方飾）・鶏形埴輪等の形象埴輪も出土している。胎土・焼成等からみて、これらも日高山1号墳にともなう

日高山1号墳出土円筒埴輪

日高山1号墳実測図（○印は円筒埴輪）

ものと考えられる。また、溝状部埋土中から6世紀前半の埴輪片も出土している。埴輪以外の主な遺物には、小釘を打ちつけた細い鉄板がある。倒壊した円筒埴輪と混在して出土したもので、形状からみても木心鉄張輪證の破片と考えられる。ほかには、1号墳削平後の整地土中から金銅製耳環1個体が出土している。

以上、今回の調査で、5世紀前半代の古墳が検出でき、さらに、6世紀代まで埋葬が引き続いたことがわかつたことは大きな成果といえよう。日高山は、藤原京造営に際して朱雀大路が貫通するため大規模な削平を受けており、丘陵上にかつて存在していた古墳もその造営工事によって破壊されたものと考えられてきた。日高山1号墳を削平した後の整地土から出土した遺物等も、上記の破壊が藤原京造営にあたってなされた可能性が強いことを示唆するものであり、従来の想定の蓋然性をうらざけるものといえよう。

日高山1号墳の墳丘は、大半が地山を削り出して造られたもので、これを基底部とし、原地形の低い東側に主に封土を積んで築成されたものと考えられる。また、上記のように、小規模古墳にもかかわらず、形象埴輪を含む埴輪列が周囲に存在していたことは、この地域の古墳時代の社会を考えるうえで興味深い資料となろう。

**藤原宮南面外周帶の調査**　児童公園建設にともなう事前調査である。対象地には宮南面外周帶・六条大路および宮城内先行条坊道路の西二坊坊間小路の存在が予想された。

藤原宮跡の遺構には、調査区の東部で検出した南北溝SD01および、西部で検出した井戸SE02がある。SD01は幅5~6m・深さ1.4mの規模で、溝埋土から弥生土器片、7世紀末の土師器・須恵器片、藤原宮所用の丸・平瓦片、削り掛けが出土している。SE02は井籠組の井戸である。0.95m×0.75mの規模で、深さは2.6mあり、底には拳大の円錐が數きつめられていた。調査区内に想定されていた六条大路北側溝および、先行条坊道路西二坊坊間小路西側溝は想定位置には存在せず。

後世の削平によって消失

したと考えられる。SD01は西一坊大路と西二坊大路のほぼ中央に位置する。出土遺物からみて、藤原宮の時期に機能していたことが確認できる。

藤原宮の宮外周帶に坊間小路が通っていたとは考えがたいので、SD01の性格については、先行条坊道路の東側溝を掘り出す

藤原宮西南地域遺構配置図

げたもので、六条大路周辺の排水を集め、宮南面外周帯を横断して宮の南外濠に流し落す基幹排水路として機能していたと考えるのが妥当であろう。

国道 165 号線バイパス（第39次）の調査 本調査は国道 165 号線橿原バイパス建設工事にともなう事前調査である。調査地は藤原京三条坊地割では、右京二条三坊東南坪・三条三坊東北坪に含まれ、宮に西接する西二坊大路から西へ約40mの位置にあたっている。調査は 2箇所にわけて行ない、北区には南北長99m、幅7m、南区には南北長70m、幅4mのトレンチを設定した。検出した主な遺構は古墳時代（5世紀）の堅穴住居 2、藤原宮期の建物 9、厨 4、道路 2、中世の建物 5、井戸 1 である。

道路遺構は、宮に北接する二条大路 S F 3200 の西延長部と三条々間小路 S F 07 である。二条大路は側溝心々間の距離が 16.2 m で、路面幅 15m を測る。三条々間小路については北側溝のみを検出した。北調査区の北端で検出した藤原宮期の建物は、二条三坊東南坪内にあり、柱穴の切り合い関係から 2 時期に分かれる。古い時期には、梁間 4 間（10 尺等間）以上の東西棟 S B 01 と梁間 2 間（9 尺等間）の東西棟 S B 02 の 2 棟が南北に並んで建てられている。両者は柱筋を描えており、隣棟間隔は 10 尺である。新しい時期の建物には、身舎の柱間が 9 尺等間で、東西両面に 11 尺の出の廊をもつ桁行 3 間以上の南北棟 S B 03 がある。S B 03 と併存すると考えられる 2 条の厨 S A 04・05 は、S B 03 の南妻からそれぞれ 30 尺、75 尺南に離れて存在する。これら 2 時期の建物は一坪の東西中軸線付近に立てられている。また、トレンチの西端から西へ約 15m の位置が坪の南北中軸線にあたるので、これらの建物は坪内の中心的な建物群の一部にあたるものと考えられる。

藤原京内の宅地の実態を解明する作業は、開発の進展とともにからんで急務である。しかし、坪内宅地を大規模に発掘調査した例はまだ少なく、宅地内の様子についてはまだ不明なところが多い。今回の調査で検出した 2 時期にわたる大規模な建物は、今後、藤原京内の宅地のあり方を考えるうえで重要な資料となると考えられる。

（村上謙一・立木 修）

第39次調査北半部遺構図

## 1983年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部調査一覧

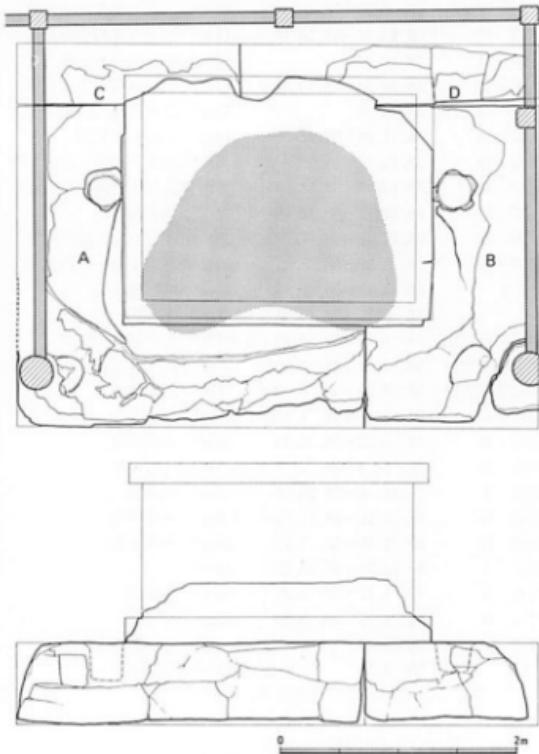
調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6 A J K - F	藤原宮 37	58. 8. 1~58. 12. 3	1,008m <sup>2</sup>	西面中門
6 A J F - B	藤原宮 38	58. 12. 1~59. 3. 28	1,350m <sup>2</sup>	東方官衙
6 A J J - A ~ C	藤原宮 39	59. 1. 23~59. 4. 10	1,405m <sup>2</sup>	右京二条三坊東南坪, 三条三坊東北坪
6 A W K - H	藤原宮 40	59. 3. 1~59. 4. 19	870m <sup>2</sup>	右京七条一坊東南坪 (日高山)
6 A W R - F	藤原宮 37-1	58. 4. 2~58. 4. 14	45m <sup>2</sup>	右京八条三坊
6 A J G - U · T	藤原宮 37-2	58. 4. 18~58. 5. 7	350m <sup>2</sup>	宮西南地域
6 A J H - S	藤原宮 37-3	58. 4. 27~58. 4. 28	16.5m <sup>2</sup>	右京七条二坊
6 A M F - A	藤原宮 37-4	58. 6. 6	13m <sup>2</sup>	左京八条四坊
6 A J F - T	藤原宮 37-5	58. 8. 1~58. 8. 2	21m <sup>2</sup>	宮西方官衙地域
6 A J M - C	藤原宮 37-6	58. 8. 5~58. 9. 13	630m <sup>2</sup>	南面外周帶
6 A J C - N	藤原宮 37-7	58. 9. 13~58. 9. 17	42m <sup>2</sup>	左京六条三坊西北坪
6 A W G - L	藤原宮 37-8	58. 9. 19~58. 9. 21	30m <sup>2</sup>	左京八条三坊
6 A J H - R	藤原宮 37-9	58. 9. 19~58. 10. 4	43m <sup>2</sup>	右京七条二坊東北坪
6 A W R - S	藤原宮 37-10	58. 10. 17~58. 10. 18	14m <sup>2</sup>	右京八条四坊西北坪
6 A J B - R	藤原宮 37-11	58. 10. 24	10m <sup>2</sup>	宮東方官衙地域
6 A W R - S	藤原宮 37-12	58. 10. 25~58. 10. 28	24m <sup>2</sup>	右京八条四坊東北坪
6 A M L - D	藤原宮 37-13	58. 11. 4	15m <sup>2</sup>	左京九条二坊東南坪
6 A M B - U	藤原宮 37-14	58. 11. 24~58. 11. 26	13m <sup>2</sup>	左京九条三坊
6 A M H - N	藤原宮 37-15	58. 12. 7	8m <sup>2</sup>	左京十二条三坊西北坪
6 A M H - N	藤原宮 37-16	58. 12. 7~58. 12. 8	9m <sup>2</sup>	左京十二条三坊西北坪
6 A J F - P	藤原宮 37-17	58. 12. 12~58. 12. 13	12m <sup>2</sup>	内裏西方
6 A J N - K	藤原宮 37-18	58. 12. 19~58. 12. 21	30m <sup>2</sup>	左京二条三坊西北坪
6 A M N - P	藤原宮 37-19	58. 5. 26~58. 5. 27	16m <sup>2</sup>	右京十条一坊西北坪
6 B M Y - B	本薬師寺 2	58. 5. 19~58. 6. 3	150m <sup>2</sup>	寺域東半部
5 BYD - L · M	山田寺 5	58. 5. 10~58. 10. 31	527m <sup>2</sup>	東廄廊
6 A M D - U	飛鳥靜御原宮推定地	58. 7. 18~59. 2. 20	1,405m <sup>2</sup>	石碑遺跡第3次
6 AMD - O · P · R · S	飛鳥靜御原宮推定地	58. 5. 9~58. 5. 10	190m <sup>2</sup>	石碑周辺A
6 A M D - W	飛鳥靜御原宮推定地	58. 8. 29~58. 9. 2	10m <sup>2</sup>	石碑周辺B
5 B A S - Q	飛鳥寺周辺 C	58. 4. 7~58. 4. 12	20m <sup>2</sup>	講堂北方
5 B A S - A · B	飛鳥寺周辺 D	58. 5. 12~58. 5. 13	14m <sup>2</sup>	寺域東部
5 B A S - B	飛鳥寺周辺 E	58. 7. 6~58. 7. 7	5.5m <sup>2</sup>	寺域東部
5 B A S - B	飛鳥寺周辺 F	58. 10. 6~58. 10. 7	5m <sup>2</sup>	北廄廊
5 B A S - J	飛鳥寺周辺 G	58. 11. 10~58. 11. 11	7.5m <sup>2</sup>	寺域西方
5 B A S - E	飛鳥寺周辺 H	59. 1. 10~59. 1. 11	45m <sup>2</sup>	寺域東北
5 B A S - E	飛鳥寺周辺 I	59. 12. 21~58. 12. 22	12m <sup>2</sup>	"
5 B A S - D	飛鳥寺周辺 J	59. 1. 17~59. 3. 27	52m <sup>2</sup>	寺域南
5 B A S - D	飛鳥寺周辺 K	59. 1. 17~59. 3. 30	135m <sup>2</sup>	"
6 A K H - H	川原寺周辺	58. 11. 18	4m <sup>2</sup>	寺域西方
6 A K J - C	定林寺	59. 2. 15	15m <sup>2</sup>	寺域東方

## 飛鳥寺旧本尊台座の調査

### 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥寺中金堂の旧本尊は建久7(1196)年の火災により頭部および右手の一部を残して造像時の大半を失い、現本尊の大部分は後世の補鋲によるものである。現在は凝灰岩を粘土で塗り固めた仮設の台座上に安置されているが、その下には巨大な切石を組み合わせた台座が所在することが知られていた。昭和31年の台座の調査では、本尊両側に袋罫が当たったとみられる痕跡や、光背を支えるためと考えられる台座背面の納、両脇侍を安置するためと思われる納穴の存在などが確認されている。

今回、安居院本堂の部分解体修理工事にともない、本尊の現仏壇も同時改修されることになり、前回調査し得なかった台座前面と仮設台座を中心に、簡単な実測調査と写真測量を実施する機会を得た。その結果、二・三の新知見を得たのでその概要を紹介する。



飛鳥寺旧本尊台座復原図

台座の調査 これまで仮設台座下の石造台座は花崗岩製とされてきたが、石棺などにも使用例の多い流紋岩質溶結凝灰岩(竜山石、兵庫県高砂市産出)の切石を組み合わせていることが判明した。切石は大中小の4箇(A~D)からなると推定され、各石とも上面は仮設台座の周間に当初の面をよくとどめている。しかし、周辺部には焼損による剥離や亀裂が著しく、また、現本堂に先行する再建建物の柱を据えた円形の柱穴や、現本堂の柱を立てる際の前面両隅の破壊などにより、四周の遺存状態は余り良好ではない。なお、台座上面の調査で

は、蓑裾が当たったとみられてきた本尊両側の痕跡も、亀裂や剥離であることが判明した。

台座を構成する各石の法量は周囲の壁によって必ずしも正確には計測しがたいが、最大の A が東西2.92m・南北2.69m、B が東西1.39m・南北2.66m、C と D については前回の調査結果と照合すると、東西1.88m・南北0.51m のほぼ同形同大の数値が得られる。したがって、台座全体の規模は、一応東西4.31m・南北3.2m・高さ0.67m に復原できる。なお、台座下の状況については、上面が削平されてはいるものの中金堂の基壇上に台座が直接据えられていることが前回の調査で判明しており、今回の調査でも、各石の配置や水平位置に乱れが認められず、台座は創建時の基壇上に旧位置を保つことを再確認した。

**須弥座の調査** 現本尊が安置されている仮設台座については、いわゆる練石(凝灰岩)を積み重ねていることが判明していたが、漆喰や粘土が上塗りされていることもあって、詳細な調査はなされていない。今回の調査では台座と同じ竜山石を用いており、破損してはいるが、両側面と背面に下框および腰部の立ち上がりが部分的に遺存していることなどを確認した。須弥座は台座の中央やや後方に寄せて据えられており、遺存状態の良好な箇所で計測すると、その下框の平面規模は東西2.58m・南北2.05m の長方形を呈する。下框の高さは約21cm・奥行は約14cm を測り、ほぼ垂直に立ち上る。この立ち上りを腰部へ連なるものとして腰部の平面規模を復原すると、東西約2.3m・南北約1.77m となる。ただし、この立ち上りが下框をもう一段重ねたとする見方もできるが、現状での確認はむずかしい。高さについては現本尊下で台座上約50cmまで遺存していることを確認した。本尊が安置されており、粘土の上塗りにさまたげられてこれ以上の調査は無理であるが、亀裂や剥離が著しいものの、おそらく一石からなるものと推定され、法隆寺釈迦如来坐像などの意匠からみて、須弥座の高さはさらに高く、かつ1段ないしは2段程度の上框を有する簡素な宣字形須弥座であった可能性も考えられる。なお、須弥座左右の柄穴(直径・深さとも約30cm)は下框に接して穿たれており、これを両脇侍の台座を固定するためのものとすると、脇侍が須弥座に接近しすぎるきらいがある。しかし、法隆寺釈迦三尊像やその他の小金銅仏にみられるように、捻転する蓮茎と蓮華座からなる台座上に脇侍が立つものとすれば、配置にも問題がなくなる。

今回旧位置を保つことを再確認した切石を組み合わせた台座は、中金堂の基壇上に据えられており、その意味では須弥壇の役割を兼ねているという見方もできる。しかし、通常の内陣全体の広さにくらべると、ほぼ中央間一間分相当の大きさしかなく、その意味ではやはり二重の台座を構成する下座とみるべきであろう。その場合、中金堂基壇上面が若干削平されているので、旧内陣一杯に下座の下半を覆う低い須弥壇が作られていた可能性も考えられる。とすれば、二重宣字形台座の下座上に脇侍が立ち、上座に本尊を安置するという法隆寺釈迦三尊像の構成の原形ともいえる意匠がうかがわれて興味深い。とはいっても、今回の調査結果だけではこれ以上の問題は解決しえず、台座全体の精査や、台座周囲の調査と併せ、将来的な本格的な総合調査にまたれる点も多い。

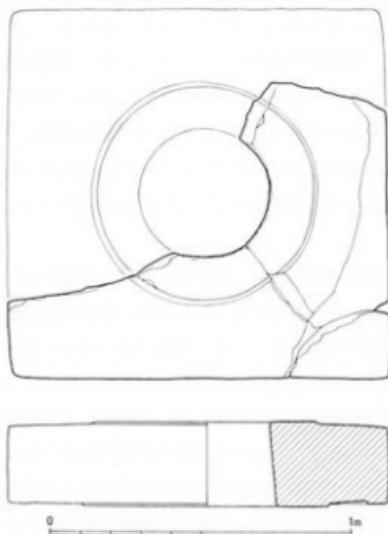
(木下正史・大脇 潔)

## 定林寺石造露盤の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・飛鳥資料館

明日村立部所在の定林寺については、1953年に石田茂作氏によって塔と回廊跡の調査がおこなわれ、1977年には当調査部が推定講堂跡西北隅と南面築地について小規模な調査を実施している。1984年2月、寺域の東に隣接する現定林寺の庫裡改築にもなう発掘調査をおこなうに当たり、庫裡の杏脱石として用いられている石材と、脇本政之氏宅所在の石造露盤断片をあわせて調査する機会を得た。その結果、両者が接合し、露盤の約2分の1を留めていることが判明したのでその概要を報告する。

杏脱石はこれまで塔上成基壇の一部とされてきたものであるが、埋没部に円孔の一部を残しており、露盤であることが判明した。また、脇本氏宅の断片とも接合し、旧形をほぼ復原することが可能である。露盤は、一辺126cm、中央部の最大厚28.4cmのほぼ正方形の流紋岩質熔結凝灰岩(竜山石)の切石を加工したものである。中央に心柱が貫通する円孔を穿つ。円孔の上面径42.6cm、下面径46.4cmで、上面・下面とも円孔の周囲に幅約16cm、高さ0.7cmの低い突帯を、下面四周に幅約7cm、高さ約1cmの突帯をめぐらす。上面はほぼ平坦に仕上げられているが、わずかに水垂れ勾配があり、下面四周の突帯は露盤受上に固定するための装置と考えられる。なお、上面の円孔周囲の突帯は、その外径からみて伏鉢の下端を固定するにふさわしいが、下面に同様の突帯を設ける理由は明らかでない。



定林寺石造露盤実測図

塔の石造露盤は全国的にみても10数例を数えるに過ぎないが、最近、法輪寺三重塔所用であったことを示す史料が発見された法隆寺西園院所在の例とともに、本例はその製作年代の上限を明らかにしうる貴重な存在といえる。また、石造露盤は、法輪寺例のように上部に框を設ける型式と、本例のように円孔の周囲に突帯をめぐらす型式、円孔のみを有する型式に大別できるが、本例は、露盤受上に固定するための突帯を下面に設けるなど、この型式の中でも最も古い様相を示している。また、兵庫県の竜山石を用いている点も注目されよう。なお、この石造露盤は、欠失部を竜山石に似た長石(兵庫県加西市産出)で補い、旧状に復原して飛鳥資料館に展示する予定である。

(大脇 深)

# 平城宮跡・京跡の調査

## 平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部は、1983年度の調査として、第150次から第154次まで総数41件におよぶ発掘調査を実施した。平城宮内では第一次東朝集殿推定地、第二次大極殿院門と南・東面回廊、内裏東方官衙地区など15件、平城京内では「称徳天皇御山荘伝承地」をはじめ右京で7件、左京で13件、京内社寺6件の調査をおこなった。以下に主要な調査の概要を報告する。

### 1. 平城宮跡の調査

**第一次東朝集殿推定地（第150次）の調査** 第一次東朝集殿推定地については、1972年に第146次調査を実施したが、該当する建物が存在しなかったため、今回さらにその南接地区の様相を追究した。調査の結果、(1)本調査区内にも東朝集殿が存在しないこと、(2)第一次朝堂院区画を築地に改作するにともない、東朝集殿推定地も築地によって区画されていること、(3)内郭には奈良時代を通じて建物の存在した形跡がないこと、(4)古墳時代集落が本調査区内にも及ぶこと、等が判明した。検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟、築地1条、石組暗渠1基、溝5条、井戸2基などで、奈良時代の遺構はA～Eの5期に分かれる。

**A期** 第一次朝堂院の建設前の時期。素掘りの南北溝SD3765が調査区の東端を貫流する。幅約1.0m、深さ約0.3mで、堆積層は3層に分かれ、最下層から木筒削屑が33点出土した。

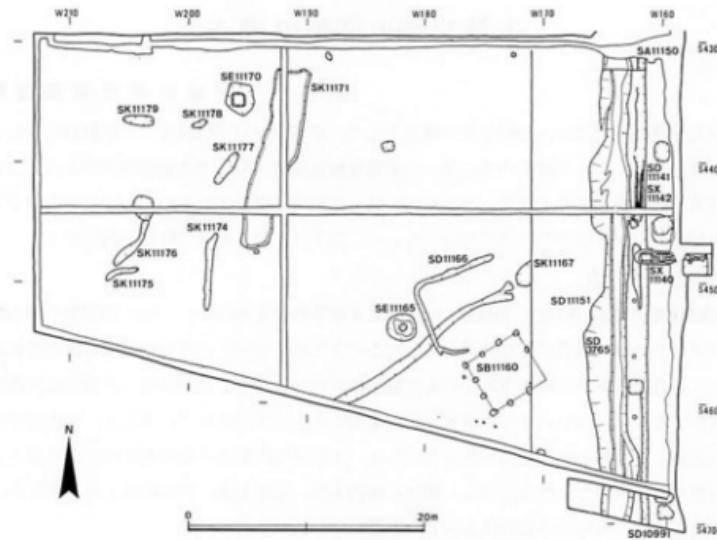
**B期** 第一次朝堂院の造営期。SD3765は機能を停止し、調査区内には井戸S E 11170が営まれる。掘形は、径2.4mの不整形で深さは1.2m。埋土上位より藤原宮式軒瓦が出土。

**C期** 第一次朝堂院の区画掘が掘立柱から築地に改作された時期。地盤の下降する調査区東半部を整地し、朝堂院の東面区画塀SA5550の南延長線上に築地SA11150を築く。築地の西側には雨落溝SD11141があり、溝底には木樋SX11142が遺存する。雨落溝に開口する石組暗渠SX11140は、築地の基底部を掘り込み、三笠山地獄谷産の凝灰岩切石を使用して構築されている。この石組暗渠は第136次調査で検出した石組暗渠SX10350の南118.4m(400尺)の位置にあり、両者の底石の大きさが一致することから、朝堂院と朝集殿推定地を区画する築地塀が一連の工程で構築された可能性を示唆している。

**D期** 奈良時代末。SD3765に重複する南北溝SD11151を掘削する。

**E期** 奈良時代末もしくは平城上皇期。築地SA11150を改修して軒出を縮め、西側雨落溝SD10991を2尺東に移動する。





第一次東朝集殿推定地発掘構造図

第二次大極殿院地区（第152・153次）の調査 第二次大極殿院地区については、これまでに回廊東南隅の第1次調査をはじめ、第73次の東棟の調査、第113次の大極殿の調査、第132次の大極殿後殿および北面回廊の調査等を実施してきた。今回の調査は、大極殿院の正面中央に開く間門とこれにとりつく南面・東面回廊および朝堂院北面築地などの検出を目的とした2次にわたる継続調査である。調査の結果、所期の目的の遺構を検出し、第二次大極殿院における上・下両層の建物配置と規模を明らかにするとともに、大極殿前庭でおこなわれた儀式関連遺構を検出することができた。検出した主な遺構は古墳時代（神明野古墳S X0249）から平安時代におよぶが、奈良時代の遺構は以下のように前半と後半の二時期に区分できる。

奈良時代前半の遺構 大極殿前庭部に広がる整地土の下面で検出した下層遺構である。間門下層の門SB11210、その東西にとりつく掘立柱塀SA11250・11251、さらにSA11250の東延長部にあたる東西塀SA11370A・B、これらの東西塀にとりつく南北塀SA110048、SA7593A・B、SA11320、掘立柱建物SB11340A・B、SB11350などがある。SB11210は大極殿下層の正殿SB9140の南正面に開く5間2間の掘立柱建物で、上層の間門心から北6m(20尺)に心をもつ。柱間は桁行の両端間のみ3m(10尺)で、他はすべて4.5m(15尺)等間、桁行総長は19.5m、梁行総長は9mである。前面は地山を削り出して基壇風に作り、階段を設ける。基壇の出は約1.5mを測り、凝灰岩による基壇化粧の痕跡が認められる。柱掘形は東西1m・南北1.5mの長方形で、すべて柱抜取穴をともなう。この抜取穴は上層間門と一連の版築によって埋められており、SB11210の解体と上層間門の建設が一連の工程として短期間のうちになさ

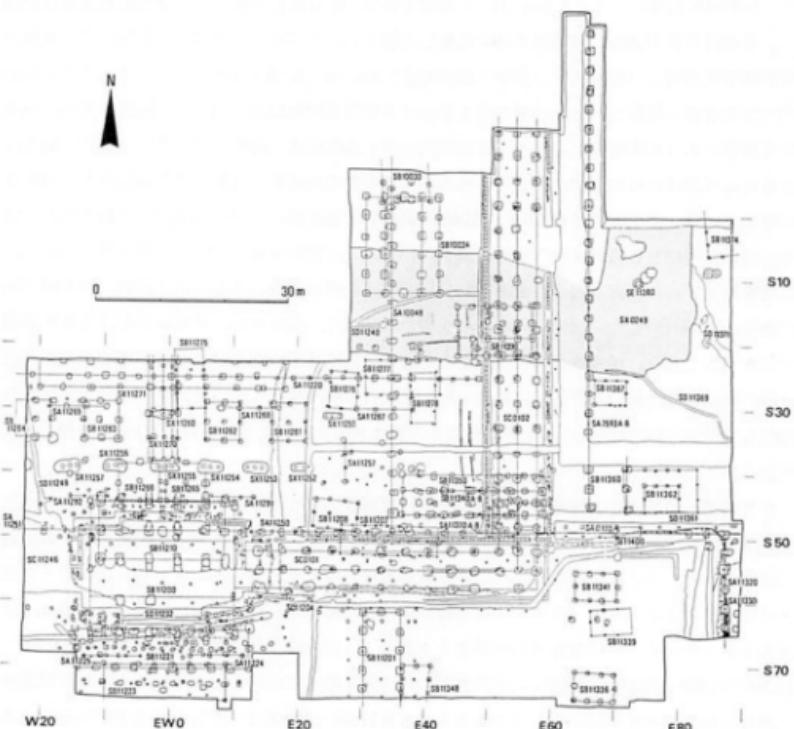
れたことを示している。このSB11210の東妻から東に延びるSA11250は、門から9間目で南北廊SA10048に接続し、正殿SB9140を区画する施設となる。この区画施設の規模は、第132次調査の成果から、南北80m(27間)、東西71m(240尺=200大尺)であることが判明する。SA11250からさらに東方に延びるSA11370は、18間目で南に折れる南北廊SA11320に接続するが、内裏下層の東西廊SA7592から分岐した南北廊SA7593は、SA11370とは接続せず、南端は開放されていたものと考えられる。

奈良時代後半の遺構 整地土上面で検出した遺構で、大極殿門SB11200、その東西にとりつく南面回廊SC0101・11246、東面回廊SC0102、朝堂院北面築地SA0103、北面築地に聞く門SB11400、朝堂院東面築地SA11330、大極殿東の掘立柱建物SB10034、大極殿前庭の儀式関連舞台状遺構SB11261～11266、廊状遺構SX11271、渡り状遺構SX11270、宝幢等の柱跡SX11252～11260などがある。閑門SB11200は5間2間の礎石基壇建物である。礎石はすべて抜き取られ、基壇上面は削平されているが、9カ所において礎石据え付け痕跡を検出した。柱間は桁行梁行ともに4.5m(15尺)等間であり、桁行総長は22.5m、梁行総長は9mを測る。基壇はSB11210の基壇南半部に重複して積土し、5～8cmの厚さに版築をする。基壇の外装は凝灰岩切石の壇上積で、基壇の出が南北2.4m(8尺)、東西1.8m(6尺)であることから、閑門は切妻造に復原される。基壇の南と北には中央間3間分13.5m(45尺)に階段があり、側面にも複廊におりる階段をともなう。また閑門の南・北面には二時期の廂があり、後述の儀式とともにあって設けられた土廂の跡とみられる。当初の廂の出は6m(20尺)で、後に5.1m(17尺)に縮めている。南面回廊SC0101・11246は閑門基壇築成後にその両端を切って築成されている。南面東回廊SC0101は閑門から東端まで13間あり、桁行3.9m(13尺)、梁行3m(10尺)、基壇幅約9.2mの複廊となる。東面回廊SC0102は今回の調査により、南北23間、総長84.9mであることが判明した。回廊の調査では従来の所見通り、側柱列から基壇縁にかけて凝灰岩舗装が施されており、棟通り柱列には壁を支える凝灰岩地覆石の据え付け痕跡が認められた。大極殿の東脇には大極殿南側柱筋に南妻を揃えた桁行5間、梁行4間の東西二面廂付南北棟SB10034、閑門の南には閑門に心を揃え南接して建つ9間2間の東西棟SB11221などの掘立柱建物がみられる。

SX11252～11258は大極殿の南24m(80尺)に東西等間隔で並ぶ7個の柱掘形である。いずれも平面形は南北1.5m、東西3.4m前後の不整梢円形を呈し、内部には各々3箇所の柱抜取痕跡が認められる。この7個の掘形は、その位置や數からみて元日朝賀等に立てられた鳥形・日像・月像の幢と朱雀・玄武・青竜・白虎の幡を掲げるための中心柱とそれを支持する両脇柱を立てたものと考える。この宝幢等の柱跡をとり囲むように並ぶ3間の掘立柱廊6条SA11257、11267～11269・11291・11292は、奈良末期の即位式に際して宝幢などの周囲に立てた萬歳旗や兜旗などの各種の旗に関わるものであろう。SB11261～11266はいすれも2間2間の総柱式の掘立柱建物で、21～24cmの角柱の柱痕跡がある。大極殿前庭中央に4棟が、閑門の北に2棟が

東西に並ぶ。同様の造構は平城宮第一次大極殿の東西にも認められ、節日の饗宴や外国使節の来日に際して、あるいは法会のあとにおこなわれた奏楽に関する舞台状施設と考えられる。S X 11270 は大極殿の中軸線に心を揃え、大極殿の中階から始まる南北 5 間、東西 2 間の渡り状造構である。文献史料によると、1月 7 日・16 日・17 日などの節日や即位後の大嘗祭のあとに天皇が閑門に出御しており、この時に通る渡り状施設とみられる。儀式関連造構としてはこの他に廊状造構 S X 11271 があるが、その性格は不詳である。

朝堂院北面築地 S A 0103 は、回廊東南隅の北 3 間目から東に延びる。回廊から東 5 間目には門 S B 11400 を開き、大極殿東外郭と結ぶ。築地棟通りに親柱礎石 2 個をもつ棟門形式で、門の桁行は 3.9 m (13 尺) である。門の南側には石階 S X 11403 がある。朝堂院東面築地 S A 11330 は、大極殿間門の中軸から東 88.3 m (300 尺・250 大尺) の位置にあり、下層の扉 S A 11320 の心に一致する。北面、東面築地はともに下層の扉の基壇上にさらに積土を行い、南面のみに凝灰岩切石による壇上積の外装を施す。



第二次大極殿院地区調査造構図

**まとめ** 今回の調査と数次にわたる過去の調査により、第二次大極殿院とその下層遺構の全容がほぼ明らかになった。上下両層の遺構の年代は、出土軒瓦によって以下のように推測される。すなわち、今回検出の下層遺構からは第II期に編年される軒丸瓦6311A・6304Aが出土した。6311Aは第II期の中でも養老～神龟年間に遡る瓦である。このことは下層遺構が聖武即位を目指した養老年間の造営に関わる可能性を示唆している。上層遺構の大極殿間門・南面回廊の所用瓦は、従来知られていた第二次大極殿・朝堂院所用瓦6225—6663の組み合せと異なり、6296A—6691Aの組み合せとなることが判明した。6691Aは第II期後半の天平10年代初頭を上限とする軒瓦であることが恭仁宮や法隆寺東院の造営年代から知られるが、平城宮大極殿および大極殿間門・東西回廊の所用瓦がいずれも第III期の瓦である点を考慮するならば、6691Aの平城への供給年代はやや遅れ、天平17年以降(第III期)に下る可能性がある。上層の仮設遺構は、出土遺物や重複関係から右図に示したようにa～dの4期に区分することができる。

**a期** 間門の南北に細殿的空间をもつ土廂を設け、大極殿の前面に廊状遺構S X11271を設ける。

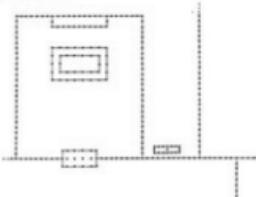
**b期** 大極殿前面に渡り状遺構S X11270を設ける。

**c期** 土廂の梁行規模を縮小し、大極殿前庭に6基の舞台状遺構S B11261～11266を設ける。

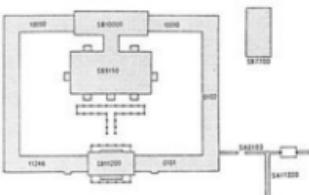
**d期** 間門の南に接して東西棟建物S B11221を、大極殿の東西に南北棟建物S B9141・10034を建てる。大極殿前庭には7基の幡轔を立て、それを囲むように萬歳旗などを立てる屏状施設8条を設ける。

以上のように、今回の調査では大極殿院でおこなわれた儀式を遺構によって具体的に復原することができた。今後に予定されている朝堂院地区の発掘調査の進展により、平城宮における儀式の実態がより一層明らかになると期待される。

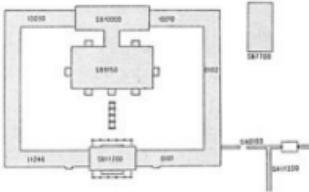
奈良時代前半



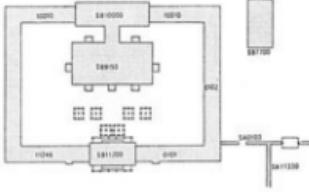
奈良時代後半 a



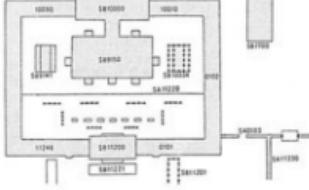
奈良時代後半 b



奈良時代後半 c



奈良時代後半 d



第二次大極殿院変遷図

## 第二次大極殿院・内裏東方官衙（第154次）の調査

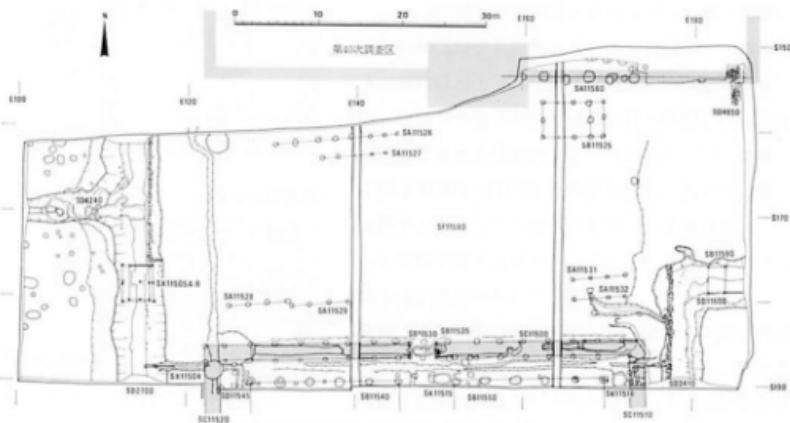
調査地は第二次大極殿院・内裏の東方低位面に位置し、北で第40次調査区と接する。調査の目的は、第40次調査で検出した内裏東方官衙の南方の状況を解明し、あわせて内裏東方を南北に貫流する東大溝を調査することである。調査の結果、(1)内裏東方官衙の南に幅30mの東西道路が存在すること、(2)東西道路の南には築地で区画された新たな官衙（大極殿院東方官衙）が存在すること、(3)平城宮東部における幹線排水路 S D3410が東西道路に沿って東折すること、などが明らかになった。

検出した主な遺構は掘立柱建物1棟、礎石建物2棟、築地3条、溝5条などである。

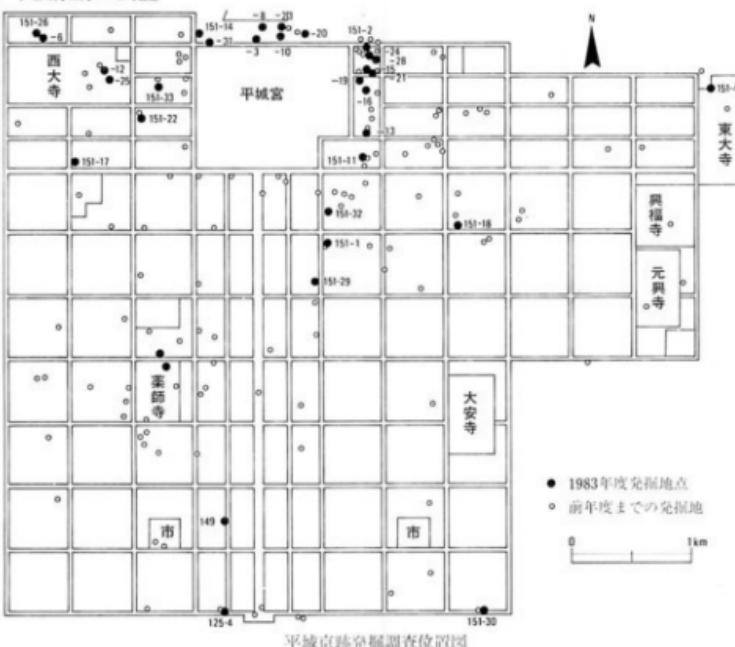
**東大溝 S D2700** 東大溝には、内裏内部から東流する排水施設 S D4240との合流点付近の東岸にのみ、三笠安山岩による玉石積が施され、ここで溝幅は6m前後に広がる。石積の南端には、大極殿東外郭の東門に心をあわせて橋が架けられており、新旧二時期の橋脚 S X 11505 A・Bが遺存する。木樋暗渠 S X 11504は大極殿院東方官衙からの排水施設である。

**大極殿院東方官衙 S C 11500** は添柱もしくは寄柱とみられる柱穴列を基底部裾にともなう全長170尺の東西築地である。東西両端に南北築地S C 11510・11520が接続し、大極殿院東方官衙を囲む。区内には2棟の礎石建物 S B 11540・11550があり、柱筋をそろえて東西に並ぶ。ともに北側柱列のみの検出にとどまるが、桁行5間(12尺等間)の東西棟建物に復原される。北面築地の中央には新旧二時期の門 S B 11530・11535が開く。

**遺物** S D2700を中心に多量の遺物が出土した。軒瓦は1024点を数え、埴積基壇建物の所用瓦6135A・B・E-6188Aの組み合せが中心を占める。他に墨書き2点、鬼瓦27点がある。木筒は2057点に及び、天平2年～延暦3年の紀年銘木筒を含む。木製品も多岐にわたり、中では「左目病作 今日 □日」と墨書きされた病氣治療用の人形、百萬塔屋蓋片、木トンボが注目される。またS D3410からは宮中の祓に用いたとみられる銅製の人形が出土した。（松村恵司）



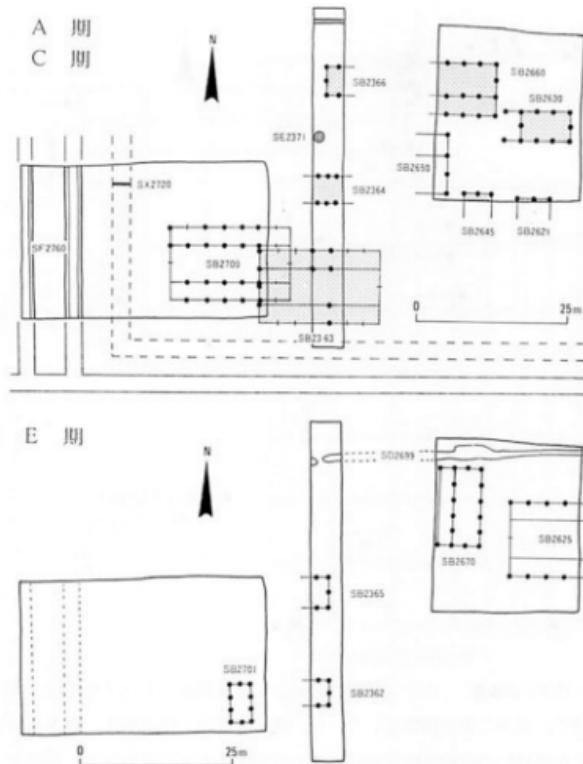
## 2. 平城京跡の調査



平城京跡発掘調査位置図

**左京二条二坊十三坪（第151—11次）の調査** ホテル建設にともなう事前調査。十三坪は、坪の西が十二・十三坪の坪境小路に、南が二条大路に面している。調査区は十三坪の南半、西寄りに位置し、1982年度に実施した第141—5次調査区を中にはさんで東西2ヶ所に分かれる。東区では掘立柱建物12棟、坪2条、溝1条を、西区では掘立柱建物5棟、溝5条、十二・十三坪間の坪境小路と、中世以降の土取りの土壠多数を検出した。

建物遺構は柱穴の重複関係、出土遺物からA～Fの6期に区分できる。A～C期は、奈良時代前半から末にかけての時期で、第141—5次調査で検出した東西溝によって十三坪内部を南北に二分して使用していることがわかっている。坪境小路に面する西面は、木樋暗渠S X2720などから築地塀で区画されていたことは疑いないが、二条大路に面する南面も、西側の十二坪の調査では築地塀の存在が確認されており、同様に築地塀を想定できる。二条大路に近接した位置に、主殿として南北二面廂の東西棟建物S B2700（A期）とS B2363（B・C期）が建てられる。後方には副屋として東西棟建物S B2650（A期）、S B2660・2630（B・C期）などがある。S B2660は南に廂をもつ建物である。D～F期は、平安時代の9世紀前半から10世紀中頃にかけての時期で、坪境小路の側溝は埋められ、S B2631（D期）、S B2625・2670（E期）等の主要建物が東区を中心に造営される。S B2625は南北二面廂の東西棟、S B2670は西に廂のある南北棟



左京二条二坊十三坪調査遺構配置図

する必要があろう。出土遺物中、坪境小路の路面を覆う包含層で検出した、鳥・唐草文の針描文をもつ漆器断片は、時期の限定が困難であるが、特に注目すべき遺品である（口絵写真）。

#### 左京三条二坊三坪（第151—32次）の調査

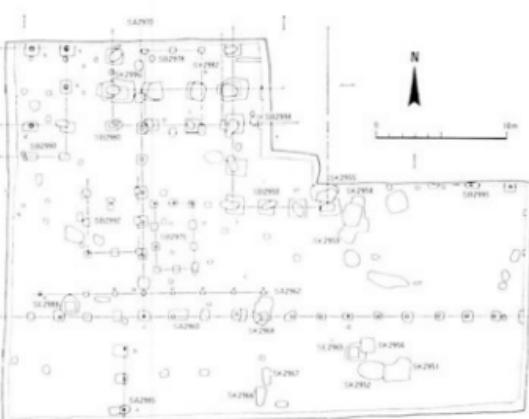
レストラン建設にともなう事前調査。三坪は、西が東一坊大路に面し、東は坪境小路をはさんで特別史跡宮跡庭園のある六坪に接する。調査区は、三坪中央南半部に位置している。検出した主な遺構は、奈良時代に属する掘立柱建物8棟、掘4条、井戸2基、土壇4、地鎮の施設1ヶ所、中世～近世の土壇5などである。

奈良時代の建物は柱穴の重複関係や出土遺物からA～Eの5期に区分できる。天平末年頃を下限とするC期は、整然とした建物配置の確認される時期である。坪内は縁によって区画されるが、まず東西に二分する位置には南北棟S A2970・2985があり、南北二分線の南88尺の位置には東西棟S A2960を置いて坪南半分を4区に区分している。西北区には東西棟のS B2990、東北区には南北棟のS B2950を東西に柱筋をそろえて整然と配置する。S B2990は梁間2間以

である。

出土遺物では、本調査区出土の軒瓦29型式のうち10型式が法華寺阿弥陀浄土院と同範囲にがあることが注目される。いずれも十二・十三坪坪境小路とその側溝近辺で出土したものであり、検出遺構との関係からも調査区内の建物に使用した瓦と直ちに考えることはできないが、十三坪と阿弥陀浄土院との密接な関連を示すものである。また、平安京遷都後の平安時代（D～F期）における十三坪の繁栄ぶりは、京内の他の宅地にその例をみないものであり、やはり阿弥陀浄土院との関連で理解

上、桁行2間以上で南廂をもっている。S B2950は、桁行4間以上、梁間3間で廂のない建物である。いずれも調査区外へ延びている。S A2970とS B2990の東妻柱列の間は20尺、S A2970とS B2950の西側柱列の距離はS B2950の梁間総長に一致する。このように堀で区画された各区の建物が、区画を越えて互に柱筋をそろえて造営されていること、



左京三条二坊三坪調査遺構図

堀からの距離や隣棟間隔を各区とも完数になるように配置していることなどから、堀 S A2960、2970などは坪内を複数の宅地に分割する施設ではなく、同一宅地内部の区画施設と考えられる。また、先行するB期の主要建物S B2980も坪の東西二分線をまたいで建てられており、D～E期にも建物規模の縮小は顕著になるが、やはり坪内を分割する施設はみられないでの、三坪は奈良時代を通して一町の宅地として利用されたとみることができる。調査面積が狭いため全体が解明されたとはいえないが、これによって一町を占める宅地の一つの利用形態が明らかになったことになろう。

調査区の東北隅、三坪のはば中央部で検出した地鎮の施設S X2982はD期の造営にともなうもので、小型の須恵器広口壺に和銅鏡2枚を納めて小土壇に埋納している。平城京内で確認された唯一確実な地鎮祭の資料として高い価値をもつものであろう。

**左京四条二坊一坪（第151-1次）の調査** 社屋の建設にともなう事前調査。一坪は、北を三条大路、西を東一坊大路、南と東をそれぞれ坪境小路に囲まれる範囲である。調査区は、坪の西南部、南北中軸線寄りに位置した場所である。検出した主な遺構は奈良時代に属する掘立柱建物5棟、堀6条、井戸1基、土壇6などである。その後1984年度にはホテル建設にともなって、一坪の東北部、南北中軸線に沿う部分を調査し一坪内の主殿にあたる建物をはじめとする関連遺構を検出しているので、その成果を合わせて報告する。

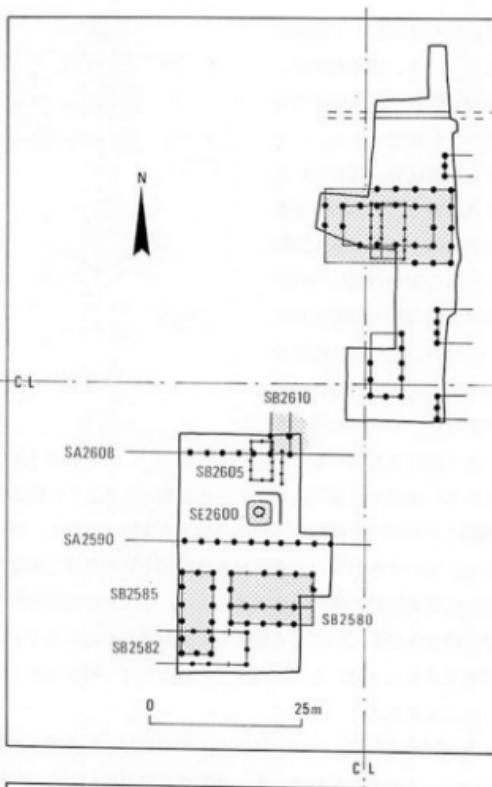
建物遺構は柱穴の重複関係や出土遺物からA～Cの3期に区分できる。奈良時代前半のA期には、東西堀S A2590によって南北に敷地が区分され、南区には東西棟S B2582、北区には南北棟S B2605などが建てられている。坪内部が複数の宅地に分割使用された状況がうかがえる。奈良時代中期のB期にはS A2590は取り払われ、坪の中央北半部に柱間11尺、四面廂の大規模な主殿が建てられる。南半部にも、2棟の大型建物S B2580・2585が柱筋をそろえて造営され

る。S B2580は南に廂をもつ東西棟、S B2585は南北棟である。調査区東北隅で検出した建物S B2610は、東西廂S A2608がとりつく建物であるが、全体の規模が不明である。東北区で検出した主殿と同規模の11尺の柱間をもつので、西脇殿に相当する建物であろうか。建物配置から、B期には一坪の全体が一つの宅地として使用されたことが明らかである。奈良時代後半のC期には建物群は廃絶し、数条の南北廂がみられるのみとなるが、東北区では主殿の改作がおこなわれており、引き続き一坪を占める宅地として使用されたようである。また、平面八角形の木枠をもつめずらしい井戸S E2600が造られた。直径1.5m、一辺59.5cm～64.5cm、深さ1mの井戸で、下から三段目まで完存し、四段目のおよそ半分が残っていた。木枠の基礎として八角にならべた埴のほかに、

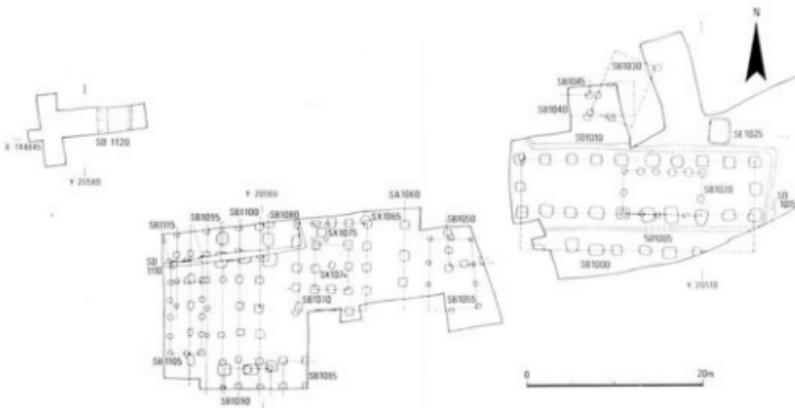
井戸の埋土中にも多量の埴が投棄されており、S E2600は当初その周囲方4.5mが埴敷であったと考えられる。一坪を占める宅地利用の形態にまた新たな一例を加えたことになる。

**右京一条北辺四坊六坪（第151～26次）の調査** 防衛庁の宿舎改築にともなう事前調査。調査地は六坪の中央西寄りに位置し、この東南には称徳天皇御山荘伝承地があり、奈良時代に造られた池と中島が現存している。調査区は東・中央・西の3区に分かれ。調査地は西から東へ延びる低い丘陵の南斜面にあたるため、奈良時代前半に大規模な整地をおこなっており、遺構は主にこの整地層上面から掘り込まれている。

検出した主な遺構は掘立柱建物14棟、塀1条、溝4条、井戸1基、火葬墓2基などである。これらの遺構は、層位、柱穴の重複関係、出土遺物からI～Vの5期に区分できる。I期の遺構としては、整地層の断ち割り調査で溝S D1015と土壙S X1065を検出したのみである。奈良時代中期のII期には、東区に大型の東西棟建物S B1000が、中央区にS B1080・0190の2棟の



左京四条二坊一坪調査遺構配置図（A期・B期）



右寫一條北認四坊六鄉調查遺稿圖

南北棟建物が建てられる。Ⅲ期にはS B1000は存続するが、S B1080・1090の2棟が廃絶し、S B1095が營まれる。Ⅲ期後半には、このS B1095はS B1105に建て替えられる。Ⅳ期はこの地区が最も整備される時期である。東区の主殿S B1000には南廊が設けられるとともに、中央区では、四面廊の付く建物S B1070を中心に、その東に南北廊S A1060、西には東廊をもつ南北棟建物S B1100、南にS B1085が建てられる。V期には大型の建物はなくなり、S B1020・1055・1155の小規模な建物が散在する。いずれの建物もⅣ期以前のような規格性を失い、この地区的性格が大きく変化する。V期後半には中央区は墓地になり、2基の火葬墓S X1074・1075が營まれる。S X1075は、一辺約1mの方形墓壇を掘り、底に木炭を敷き、灰釉陶器を木箱に入れて据え置いたもので、平安時代初頭の墓と考えられる。

この地区にみられる

奈良時代中頃から後半のⅡ～Ⅳ期にみられる建物群は京内の一般的な宅地の建物構成とは配置が大きく異なっており、建物群の存続時期、園池との位置関係からも、称徳天皇御山荘に関連する遺構の一部である可能性が高いと思われる。(西園池)



水標 63 S X 1075

### 3. 京内社寺の調査

薬師寺、法華寺、西大寺、春日大社の各境内で、建物建設とともになう事前調査を実施した。ここでは奈良時代の遺構を検出した薬師寺、法華寺での調査成果について報告する。

**薬師寺旧境内の調査(1)** 子院養徳院の移転にともなう調査で、調査地は薬師寺本坊の北側の空地である。検出遺構は、奈良時代の南北溝1条、掘立柱穴2のほか、近世初期の大溝などである。奈良時代の南北溝は幅0.2m、深さ0.4mの溝で、平城京条坊を薬師寺寺域内に延長した場合に、右京六条二坊の一・八坪坪境小路東側溝の位置にある。

**薬師寺旧境内の調査(2)** 三蔵院工事にともなう事前調査。調査地は薬師寺本坊の北方で、平城京右京六条二坊九・十坪にあたる。九坪は苑院、十坪は倉垣院と推定されている。検出遺構は、奈良時代の土壇、井戸、平安時代の井戸3基のほか、中近世の溝・井戸である。奈良時代の井戸は径1mの掘形に縦板の井戸枠を入れ、中に径0.7m、深さ0.5mの曲物をおく。井戸底から和銅開珎1枚、万年通宝3枚、神功開宝17枚が一括出土した。平安時代の井戸のうち1基は同じく縦板組の井戸で底に曲物をおく。井戸中に須恵器甕、瓦器皿・甕が大量に投棄され廃絶時期を示している。

**法華寺境内の調査** 茶室建設にともなう事前調査で、調査地は浴室北側の畑地である。検出遺構は奈良時代の掘立柱建物3棟などである。SB05は桁行2間以上、梁間2間以上の南北棟、SB10・25は、ともに東西・南北とも1間以上の建物である。三棟は共存せず、3時期に区分されるが、前後関係は不明である。柱間は、SB05・10は10尺等間、SB25は12尺である。奈良時代以降の遺構には、桁行2間以上、梁間2間の東西棟建物SB20がある。一辺0.6m前後の柱掘形の中央に人頭大の川原石を据えている。出土した軒瓦は40点あるが、そのうち約6割が奈良時代後半期のものである。

(上野邦一)



法華寺旧境内発掘位置図



法華寺旧境内発掘遺構図

1983年度 平城宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡	調査次数	調査期間	面積	備考
6 A BX	平城宮	第150次	83. 4. 25~ 8. 1	1,700m <sup>2</sup>	第一次東朝集殿推定地
6 A AR	平城宮	第152次	83. 7. 13~11. 15	3,200m <sup>2</sup>	第二次大極殿院闇門・南面回廊
6 A AR	平城宮	第153次	83. 10. 1~84. 3. 16	3,900m <sup>2</sup>	第二次大極殿院南面回廊
6 A AD	平城宮	第154次	84. 1. 9~4. 7	2,900m <sup>2</sup>	内裏東方官衙地区
6 A FM	平城京	第151—1次	84. 3. 30~ 5. 23	650m <sup>2</sup>	左京四条二坊一坪
6 A FC	平城京	第151—2次	83. 4. 18~ 4. 21	33m <sup>2</sup>	左京一条二坊十六坪
6 A FV	平城宮	第151—3次	83. 5. 6~ 5. 10	10.5m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 B TD	平城京	第151—4次	83. 6. 1~ 6. 2	18m <sup>2</sup>	東大寺北面大垣
6 A AN	平城宮	第151—5次	83. 6. 13~ 6. 14	6m <sup>2</sup>	内裏北方官衙地区
6 A GT	平城京	第151—6次	83. 6. 22~ 6. 23	23m <sup>2</sup>	右京一条北辺四坊三坪
6 A FV	平城宮	第151—7次	83. 7. 6~ 7. 8	60.5m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 A GU	平城宮	第151—8次	83. 7. 13~ 7. 14	38m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 A BN	平城宮	第151—9次	83. 8. 1~ 8. 2	42m <sup>2</sup>	推定大膳職地区
6 A FV	平城宮	第151—10次	83. 8. 5~ 8. 27	220m <sup>2</sup>	市庭古墳外濠
6 A FI	平城京	第151—11次	83. 8. 18~10. 21	1,800m <sup>2</sup>	左京二条二坊十三坪
6 B SD	平城京	第151—12次	83. 8. 17~ 8. 20	33m <sup>2</sup>	西大寺境内
6 A FF	平城京	第151—13次	83. 8. 24~ 8. 29	14m <sup>2</sup>	左京二条二坊十五坪
6 A GU	平城宮	第151—14次	83. 9. 7	4.5m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 A FC	平城京	第151—15次	83. 9. 10~ 9. 19	180m <sup>2</sup>	左京一条二坊
6 B FK	平城京	第151—16次	83. 10. 3~10. 14	80m <sup>2</sup>	法華寺境内
6 A GE	平城京	第151—17次	83. 10. 11~10. 19	50m <sup>2</sup>	右京二条三坊大路
6 A FG	平城京	第151—18次	83. 10. 19~10. 27	105m <sup>2</sup>	左京三条四坊四坪
6 A FC	平城京	第151—19次	83. 10. 27	10m <sup>2</sup>	左京一条二坊
6 A FV	平城宮	第151—20次	83. 10. 28~11. 2	84m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 A FC	平城京	第151—21次	83. 11. 4	6m <sup>2</sup>	左京一条二坊十四坪
6 A GC	平城京	第151—22次	83. 11. 9~12. 2	391m <sup>2</sup>	右京二条二坊十六坪
6 A FV	平城宮	第151—23次	83. 11. 11	48m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 A FC	平城京	第151—24次	83. 11. 21~11. 24	21m <sup>2</sup>	左京一条二坊十五坪
6 B SD	平城京	第151—25次	83. 11. 28~12. 1	54m <sup>2</sup>	西大寺境内
6 A GT	平城京	第151—26次	83. 12. 1~84. 3. 1	1,340m <sup>2</sup>	右京一条北辺四坊三坪
6 A BB	平城宮	第151—27次	83. 12. 19~12. 24	38m <sup>2</sup>	推定大膳職地区
6 A FC	平城京	第151—28次	84. 1. 9~ 1. 12	100m <sup>2</sup>	左京一条二・三坊
6 A FR	平城京	第151—29次	84. 1. 17~ 1. 18	30m <sup>2</sup>	左京四条一坊十四坪
6 A HM・Q	平城京	第151—30次	84. 2. 4~ 2. 16	134m <sup>2</sup>	左京九条四坊
6 A DA	平城宮	第151—31次	83. 12. 5	6m <sup>2</sup>	宮北方地域
6 A FI	平城京	第151—32次	84. 2. 27~ 3. 27	932m <sup>2</sup>	左京三条二坊三坪
6 A GA	平城京	第151—33次	84. 3. 12~ 3. 13	40m <sup>2</sup>	右京一条二坊六・十一坪
6 A II	平城京	第149次	83. 4. 11~ 6. 30	3,000m <sup>2</sup>	右京八条一坊十一坪
6 A IO	平城京	第125次補足(2)	83. 7. 7~ 7. 27	126m <sup>2</sup>	右京九条大路
6 B YS	次数外		83. 5. 24~ 6. 2	198m <sup>2</sup>	栗師寺境内
6 B YS	次数外		83. 12. 12~84. 2. 8	1,960m <sup>2</sup>	栗師寺境内
6 B HR	次数外		83. 5. 9~84. 3. 31	1,314m <sup>2</sup>	法隆寺境内

## 4. 平城宮跡・京跡出土の木簡

1983年度の調査では、

平城宮跡の2個所と平

城京跡の4個所の調査

区から総計2,117点の

木簡が出土した。主な

木簡の証文は既に『平

城宮発掘調査出土木簡

概報(17)』(1984年6月刊)

調査地区	次数	出土遺構	点数(削屑)	
平 城 宮	推定第一次東朝集殿	SD3765	33 (33)	
	第二次大極殿院	SD2700	1,894 (1206)	
	・内裏東方官衙	SD3410	70 (42)	
		SD4240	70 (40)	
		SD11600	8	
		SX11504	15 (10)	
平 城 京	九条大路	129 <sup>補足</sup> (2)	九条大路北側溝等	4
	右京八条一坊十一坪	149	西一坊坊間大路西側溝	18
	左京四条二坊一坪	151-1	八角形井戸	1
	左京二条二坊十三坪	151-11	十二・十三坪坪境小路東側溝等	4
計			2,117 (1331)	

に報告したので、ここ

1983年度出土木簡点数

では内容的に興味深いものを中心に紹介する。

推定第一次東朝集殿地区(第150次調査)出土木簡 調査区は平城宮推定第一次朝堂院地区南方で、1982年度の第146次調査区に南接する。平城宮造営時に開闢され宮中央部を南流する基幹排水溝SD3765(幅1.0m、深さ0.3m)の三層に分かれる堆積層の下層から木簡の削屑33点が出土した。「□少志佐伯」「□一人□使一人」と墨書の残るもの以外は墨点のみのものが多い。

第二次大極殿院・内裏東方官衙地区(第154次調査)出土木簡 調査区は第二次大極殿院・内裏外郭東方で、1967年度の第40次調査区に南接する。木簡は、内裏外郭の東側を南流する一部石組の南北溝SD2700(「東大溝」、幅6.0m、深さ1.4m)から1894点、内裏からSD2700に合流する素掘りの東西溝SD4240(幅6.0m、深さ2.2m)から70点、調査区南端で確認した官衙からSD2700に排水するための木樋暗渠SX11504から15点、宮の南北排水溝の一つで調査区東南隅で検出した一部石組の南北溝SD3410(幅4.5m、深さ1.0m)から70点、SD3410の北端に接続して東へ延びる素掘りの東西溝SD11600(幅5.8m、深さ1.0m)から8点、計2,057点が出土した。

SD2700は宮東部の基幹排水溝で既に第21・129・139次の各調査でも多数の木簡が出土している。今回の調査では、SD4240がSD2700と合流する地点、SD2700に架かる橋SX11505付近を中心に木簡が出土した。年紀を有する木簡は21点あり、堆積層の底から2層目より天平2~4(730~732)年、3層目より天平5~天平勝宝3(733~751)年、4層目より天平5~天平神護3(733~767)年、5・6層目からは延暦2~3(783~784)年の木簡が出土し、更に最上層からは隆平永宝(796年初鋤)とともに9世紀前半代の土器が出土した。従来の知見と同様にSD2700が奈良時代を通じて順次埋没していた状況が確認された。SD2700と同様の堆積状況を示すSD4240の4層目からも天平17年の紀年銘木簡が出土した。また、SD3410とSD11600は同じ堆積状況で上下二層に分かれるが、SD3410の下層からは天平16年、SD11600の下層からも宝龟7(776)年の紀年銘木簡が出土している。以下、SD2700出土の木簡を中心に文書・荷札・付札・その他の順にみていくこととする。

文書木簡にみえる官司・官職には天皇と深く関わる中務省(中官職・國書寮・鍵殿寮・陰陽寮・

侍従・内舎人・少監物・大舎人)・宮内省(大膳職・大炊寮・主殿寮・典薦寮・内膳司)・勅旨省・中衛府(少将・將監)・左兵衛府・内兵庫が多くを占め、その中には S D4240から流れ込んだものもあると思われ、この地域の性格を考える上で注目される。また、泉内親王(天智天皇異母姉、伊勢齋宮、天平6年2月薨)の宮の物品出納に関するもの、坂合部女王(光仁天皇異母姉、宝龟9年5月薨、なお史料には宝龟5年11月以降内親王として現れる)の賀人を申送したことを記すもの(6)、宿直や留守の官人名を列記したもの(3, 4)も出土した。造営工事に於ける丁匠の国毎の人数とその総計を書き上げた木簡6点の内には、工・匠丁の別を明記したものもあり(9, 10), 造営工事に於ける労働編成の一端をうかがわせる。これらの木簡は出土層位から2つのグループに大別でき(2層目と4層目), 少くとも時期を異にする二回の造営に関わると考えられる。律令国家の浮浪人対策の実行を示す木簡も出土した(1)。類々変更があった中で浮浪人を本貫へ通送した時期は2回あるが、出土層位(3層目)から養老5(721)年4月~天平8年2月の期間のものとみられる。その他、返抄(5)や官人の上日数を記録した多数の削屑も出土している。

貢進物荷札には伊豆国の調荷札7点がある(7, 8)。伊豆国調荷札の場合、調の品目の判明するものは全て荒堅魚である。堅魚を調として貢ずる国は他にもあるが(延喜主計上式), 荒堅魚を進めるのは伊豆国だけで、特産品とみられる。伊豆国調荷札には細長い材(完形品では長さは1尺を超える幅は約1寸)の上下両端に切り込みを入れた例が多い。今回出土した木簡は、天平5年のものが5点とまとまっており、出土地点がS D2700東岸に限られ、出土層位も4層目に集中しているので、S D2700の東方から一括投棄された可能性がある。

付札には東市での交易に用いられた銭の付札がある(2)。京職等で必要とする物品を西市司が市で購入したことを示す木簡がかつて宮内から出土しており(『平城宮木簡』1—487~489, 『平城京西市跡』), このことを示す文書も正倉院文書の中に残っている。今回出土した付札はこれらと異なり、市司を介さずに東市で直接に交易したこと示すかとも思われる。また、東市を構成する屋号が知られ、さらにそれを営む市人の具体的な名前のわかる点も興味深い。

その他には題籠6点が出土した。近江の大豆の出納に関するもの(11)は令制下の中央に於ける大豆の出納・保管の実態を知る上で注目される。

**平城京跡出土木簡** 九条大路の調査では、九条大路北側溝(幅2.5m, 深さ0.9m)から「勝賣二年九月□」とある紀年銘木簡1点、平城京造営時の土壙から般の付札(12)3点が出土。右京八条一坊十一坪の調査では、奈良時代後半期の西一坊坊間大路西側溝(幅5.5m~11.0m, 深さ1.75m)から、18点の木簡が多数の祭祀関係遺物、鑄造関係遺物、銅錢、多数の墨書き器等とともに出土した。左京四条二坊一坪の調査では、木枠外間に墨書きのある八角形井戸(天平末年に掘鑿)を検出した。左京二条二坊十三坪の調査では、十二・十三坪坪境小路東側溝(幅3.0m, 深さ0.7m)から、鎌の授受に関する文書木簡と、志摩國英虞郡の船越郷から貢進された海松に付けた保管・整理の為の物品付札(13)等3点、中世の土取りの際その土取り穴に混入したと思われる伊豆国賀茂郡某郷の荷札1点が出土した。

(橋本義則)

(＊印を付したものは口絵写真所掲)

## 法隆寺の調査

### 平城宮跡発掘調査部

1978年度から実施してきた法隆寺の防災工事にともなう発掘調査も、1983年度で終了した。今年度は、1983年5月から1984年3月にかけて、西院伽藍の西手部を中心として、26ヶ所にトレントを設定して、調査を進めた。発掘面積は1314m<sup>2</sup>である。

西面回廊の西側のトレントでは、旧西室の東雨落溝を検出した。これは、1980年度の調査で検出した部分の延長部にあたる。しかし、西室の南辺部については検出するに至らなかつた。

現西室の北側では2基の瓦窯跡(S Y5050・5060)を検出した。いずれも分焰炉をもつ半地下式の瓦窯である。S Y5060は遺存状況が良好で、焚口・燃焼室・分焰孔・焼成室がほぼ完全な形で残っていた。焚口の幅は約30cmで、西側に丸瓦を立てている。燃焼室は幅約80cm、長さ90cmで、奥壁に3ヶ所の分焰孔が設けられている。焼成室は長さ約1.4m、幅約1.1mで、東面から約1.1mの高さまで窯壁が残っている。分焰炉は幅約20cm、高さ約15cmで、2条ある。窯の周囲には幅約35cmの素掘溝をめぐらしている。この窯の焼成室埋土から鎌倉時代の軒平瓦が出土した。S Y5050は分焰炉をもつ半地下式の瓦窯であるが、焼成室が残るのみであった。規模はS Y5060に近い。西室が現位置に建てられたのは、棟木の銘から寛喜3(1231)年と考えられている。その際に背後の崖面を削って整地したため、瓦窯の一帯が破壊されたものとみられるしたがって、検出した2基の瓦窯の操業年代は、遅くとも13世紀前半のことになる。

大湯屋前の参道では、南北幅約2.4m、東西幅約2mの大石を据えた石組造構(S X5170)を検出した。石の上面は、現地表下約10cmの深さにあり、かつて地上に現われていたようである『古今一編集』に、三伏藏の一つが浴室の前にあると記されている。その伏藏がこれに相当するものと思われる。

この他、収納庫の新営予定地として選ばれた律学院北の空地においても、1983年10月から12月まで発掘調査を実施した。発掘面積は630m<sup>2</sup>である。発掘区の東辺と南辺において、若草伽藍跡や法隆寺東院下層造構(推定東院宮跡)の方位とほぼ一致する飛鳥時代の溝を検出した。また、ここでは近世の造構なども検出している。

法隆寺「法隆寺発掘調査概報Ⅲ」1984

瓦窯 S Y5050・5060

参照。

(森 邦夫)

## 興福寺所蔵「論義草」等の紙背文書

### 歴史研究室

昨年に引き続き、今年度も古文書・聖教箱の第69函から75函に収められている論義草の整理を進めた。ここでは、そのうちから二点を選び、その紙背文書7通を紹介する。これらの論義草は、昨年度も報告したように、いずれも巻子袋であるが、糊離れのものが多く、前後欠のもの、数紙のみの断簡がほとんどで、題名未詳のものが多い。今回とりあげた論義草二点は、いずれも鎌倉中期の写であるが、断簡で題名は未詳である。したがって、記述の便宜上、論義草(イ)と論義草(ロ)として区別することにする。論義草(イ)は第63函の60号、論義草(ロ)は同函の14号にあたる。以下に紹介する紙背文書のうち、最初の(1)～(5)は論義草(イ)の、(6)と(7)は論義草(ロ)の紙背文書にあたる。

論義草(イ)は全七紙からなる。前後を欠失しており、題名や書写の年月日等については未詳である。内容は、唯識論第四卷の難陀論に関連する部分の論義と思われる。紙背文書のうち、(1)は龍華院の御油の納メ状で、龍華院は興福寺の塔中、東地院も興福寺の塔中と思われるが未詳である。(2)は前欠で、良縁房、長賢房、深円房、長教房、信春房は、大和春日野植木請定(春日神社文書、鎌倉道文7296)にみえ、侍従已講、大夫已講も東大寺千僧請僧題請(春日神社文書、鎌倉道文6869)等にみえる。(3)の申状土代断簡は(5)の書状と内容的に関連して、同一の訴訟に関連する一具のものと思われる。(5)は紙背文書の第5紙と第6紙にあたり、第6紙・第5紙の順に内容上はつながっていて、この二紙分で完結している。

なお、(5)は下縁が欠損していて判読できないところがある。また日下の部分も虫損で現状では墨痕はないが、もともと差出人が記されていたかどうかは判定しにくい。(3)と(5)を通じてみられる内容上の注目すべき点は、次の三点である。第一は、承久の乱後の没官領の問題が、とらへ六郎の方から持ち出されていること、第二は、それに対抗して春日大社の神物の論理が提起されていること、第三には、訴訟の対象となつた田地の近隣の地主の集会が催され、その判断が公的権威をもつていたらしいこと等である。また、(5)にみえる章俊大法師は、貞応元年の維摩会堅義者章俊と同一人物か(三会定一記)。また、(3)と(5)に没官領の武家方の領主として登場する大鷹太郎は、承久記下にみえる大高六郎および同小太郎の一族であろうか。ぬき田の庄については未詳。(4)は法会の堅義者名を記したもの、法華会や維摩会関係の記録にはしばしば「二字」という名称をもつてよばれているものである。たとえば、興福寺所蔵「維摩会堅義記」(天文十年の記録を享保十年に写したもの)によれば、

一.二字認様事 常杉原二枚五六寸奥ヨリ

伝燈大法師位発範

天文十年十二月 日

年号三寸ハカリ引離ニニタリ二字認様興

胤日記ニ大ニ相替今度東院僧正殿尋申處彼  
院家前ミノ古本多シ此通之由體被仰畢

とあって、(4)と体裁はほぼ一致する。この二字は堅義名と問題短尺と三つそろえて探題へ提出されたものである。この二字については、維摩会のみならず、法華会でもこのように称されていたことは、東大寺図書館所蔵「法華会書物之扣」(142部-453号、宝永頃写)等にもみえることから知られる。したがって、法会の堅義に関して共通して作成された文書であると思われるが、(4)がどのような法会のものであるかは未詳である。また前に引用した「堅義記」が述べているように、室町時代後期には、この「二字」について、制度的に混乱した場合があったらしい。

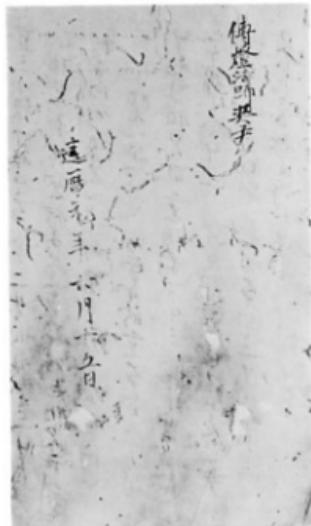
「堅義記」にも引用されている「興胤日記」(第16函-82号)によると、書式は

実名<sup>姓</sup>萬年一歲  
年号月日

となっている。また、この二字は名號ともよばれたらしく、東大寺図書館所蔵「維摩会記」(142部-465号、寛正五年写)によると

名號、二字トモ云、書様ハ、一重ニ米紙アリ、タテカ  
ミニハセス、合三枚

となる。二字については、各種法会の記録類を精査すれば、なお判明することも多いと思われるが、ここでは以上の注記にとどめておく。



某法会堅義者二字書出 (4)

次に、論義草(ロ)は、全二紙の続紙で前欠の断簡である。奥書には

建治三年五月十一日夜半移了

沙門臘口

とある。また端裏には別筆で

第一卷  
(左)  
料黃見黄

とあり、唯識論第一卷中の非黃見黄の問題にかかる論義草であることが知られる。また、「文殊院」単郭黒方印一果がある。紙背文書は(6)と(7)との二通である。(6)は田井庄所進注文案で、田井庄は大和国山辺郡所在の大乘院の庄園である。(7)は、前欠で、性善は「三会定一記」には延応元年より建治三年まで散見される。右中弁定藤は葉室定藤で、文永十二年十月八日より建治三年五月十八日まで右中弁に在任したことが知られる(飯倉晴武編

弁官補任)。

(鬼頭清明)

云々此付名問

(第五卷)

私領歟云。庄民答云。およたか殿御領者と

らて次郎房之所領也。是沒官領也六郎

殿領者是私領也。自本次郎房之領ヲ沒

官ニテ候へ六郎所領一切無没官義候云然、

付之六郎の申状弥藤不審かさなり候故

在地近隣者共々隨分尋候へトモ没官之由

一切不申候重々口入人弥藤二兄弟二人

委尋間候之處更々非没官領云々是、六

郎の申状既如水火、仍私ノ沙汰難事

未〔〕集会上件次第具披露候之處、

衆義云此事六郎所言虛言ナリト聞タリ、先買

物所ノ札ヲ立テ沙汰候ふへしと集会之使

者ニ承仕ヲ差下札ノ被立候」以前子細

大旨如此〔〕抑玄順房〔〕六季頭納

所軀也かやうの沙汰までへいろ〔〕ぬ人ニ

成敗之仁候故此文此へたひて候

これについて〔〕子細令申候者也、但札ヲ

集会ノおよやけ使下テ立候〔〕無左右私一

人之沙汰トシテぬくへき事ニハ不候、か

つうハ可有御計候也大方、大乱〔〕借

物ニ候其〔〕既成巨多候了、神物〔〕

なり〔〕事ハ武家、いかてかへいた

みおほしめされ〔〕はんや、あひかまへ

て神物うせぬやうの御は〔〕らいの候はん

「方」よりしかるへく候なり恐々謹言

九月 日

〔論義草〕(4)紙背文書

(第69回14号)

(6) 田井庄上分米等注文案

(續古事記)「行時所薦庄文案春日上分米數」

田井庄上分

米三十石宜旨斗定

油三斗

(7) 法印性譽請文并右中弁副狀

民部卿申神人群貢問事、兼仲

奉書院宣讓給了、參可令尋沙汰之由、可

令披露給候、恐々謹言

法印性譽

神人譴責事性譽法印請文

如此候、且可令申入給候、恐々謹言

十月十三日 右中弁并定藤

某申狀土代斯簡(3)





## 滋賀県近世社寺建築の調査

建造物研究室

從来からおこなわれている近世社寺緊急調査の一環として、今年度は滋賀県を担当した。滋賀県には国指定の建造物が国宝を含め220棟もあり、京都府・奈良県に次いで多いことでもわかるように、社寺数はもちろんのことその遺存度も高いことから、2ヶ年にわたって調査することになった。今年度の調査範囲は、県南部を中心にして一部琵琶湖沿いに長浜市などの6市15町にわたる。調査した数は、調書作製・写真撮影・平面実測とともに第2次調査が114件151棟。これに調書・写真のみの第1次調査46棟が加わる。以下おもに第2次調査をした建物についてその概要を述べる。

まず、神社本殿では圧倒的に流造が多く調査例の8割以上を占める。そのうち三間社はかなり特徴的で、ほとんどの場合、正面に1間ないし3間の向拝がつく。現在、重要文化財に指定されている建物をみても、材料が後補材に替っているものがあるものの、その8割が向拝をともなっており、中世からの伝統が近世になども終始引きつがれていることがわかる。したがって、松尾神社（甲南町・宝曆3年）や菅原神社（彦根市・宝曆3年）のような向拝のないものはむしろ異例である。同様に石山寺三十八所御現社（大津市・慶長7年）も工事にかかわった工匠系列の違いがあらわれたものと考えられる。同じ流造でも一間社の方にはさほどの特徴はない。それは建物自体の構成が単純で変化する余地が少ないと起因するものとみてよい。

流造以外では切妻造・入母屋造・春日造などがあるが、その数はいたって少ない。切妻造では流造同様いざれも向拝をつけていて、両者の関係が近接していることがうかがえ興味深い。

調査した建物は年代別では18世紀のものが最も多く、以下17・19世紀と続くが、19世紀のものは調査をかなり割愛したため、実数は新しいものほど多いはずである。17世紀のものは21棟を数え、遺存度は高い。またそれ以前に遡るものとして、三間社では伊岐支呂神社（草津市・慶長5年）が、一間社では雨神社（蒲生町・大永3年）他3棟が確認された。いざれも後世の補修が多少あるが貴重な遺跡といえよう。

境内建物としてほとんどの場合別棟の拝殿をもつ。御上神社にみると、おおむね入母屋造妻入りの形式をもち中世の伝承としてとらえることができる。調査した中では、大宝神社・宇和宮神社（ともに栗東町）が古く、16世紀の建立と考えられる。

一方、寺院建築では大型真宗本堂の存在が目立つ。真宗寺院は県下の寺院宗派別でも全体の51%を占めており、遺構の数も断然多い。重要文化財指定の大津別院・長浜別院に次ぐものとして福田寺（近江町・正徳元年）・円照寺（彦根市・宝曆元年）・弘誓寺（能登川町・宝曆3年）・福正寺（守山市・宝曆4年）・弘誓寺（五箇荘町・寛政8年）・大恩寺（守山市・文永6年）などが桁行20mを超えて注目される。なかでも福田寺は、外陣まわりはすべて角柱として密に配り古式をとどめている反面、内陣は円柱をもちいて当初から後門形式にするなど新しい傾向をも含み、立

登らせ柱の存在とともに大型真宗本堂の一形態を示している。

建立年代では蓮生寺（守山市・元和元年）が古い。屋根勾配緩く以後の真宗本堂とは異なる外観をもち、かつ内部では一部丸柱とするほかは角柱を忠実に一間毎に配り、また仏壇も内陣後方に三ツ並びのものに復原できることなどあきらかに古式を保ち、中世から近世への変遷過程を知る上で貴重な建物といえる。一部後世の改造はあるが棟札によって建立年代が明確であることも意義が高い。

真宗についてでは浄土宗本堂があげられる。18世纪に入ると、外陣を内陣両脇にも広げかつ大きな虹梁形飛貫を各柱間に渡す、内陣の正面三方に低い結界をまわす、内陣後方に四天柱を立て来迎壁を設けることなど類型化が進み画一的となるきらいがある。しかしそれ以前のものでは、例えば正福寺（近江八幡市・承応3年）にみると、内陣を中心後方におき、その左右の脇の間と横三室に間仕切った外陣とで構成する、いわば住宅風の雰囲気をとどめる平面であったことがわかる。

境内建物を群としてとらえた場合、瓦屋寺（八日市市・臨濟宗）や長寿院（彦根市・真言宗）が圧巻である。前者は、箕作山の中腹に占地し、本堂（正保2年）を中心に經藏・圓山堂・地蔵堂などが高く低く建ち並び、香山和尚中興の趣きを今に残すものであり、後者は、彦根城天守閣を西方にみはるかす景勝地に元禄時代の堂宇が集中し、まさに代々藩主の崇敬篤かった寺院としての風格をもつ。

今まで知られているように、近世の近江一円は五畿内同様、こと普請に関する一切については京都にあった「中井役所」の管轄下におかれていった。現に社寺対中井の往復文書を藏する社寺も多い。あわせて、棟札や銘文など建物の建立を証する資料が豊富なことも近世社寺建築の特色の一つである。これらの資料はただ単に建物の建立年次をきめるだけでなく、例えば地域に分かれて存在していた大工組などの造営組織を知るためにも、また建設に要した費用などから当時の社会経済を知るためにもはなはだ貴重なものであることはいうまでもない。今回の調査でも相当数収集できたことは幸いであった。これらをいかに分類整理するかが今後の課題の一つである。

(細見容三)

## 旧奈良町の町並調査(Ⅱ)

### 建造物研究室

奈良市が昭和57年度より開始した伝統的建造物群保存対策事業(国庫補助)としての旧奈良町の町並調査については、今年度も当研究室が県文化財保存課・県立民俗博物館と共同で実施した。調査の対象地区は57年度調査地区の東側に接し、清水通(柳生街道)を軸として、高畠町から旧市街地東端に至る東西約1.5キロメートル、南北約0.5キロメートルの範囲である。この地区の北側は荒池・瑜伽山から飛火野へかけての自然環境の良好な地域が広がり、南側は新しい市街地として住宅や公共施設の建設が進展する地域である。調査地区のうち西端部は57年度調査地区と同様一辺約120メートルの碁盤目状に街区の並ぶ地区、中央部の清水町附近はこのパターンがくづれて30~70メートル間隔で蛇行する二~四本の東西道路に町家が建ち並ぶ地区である。東端の高畠町附近は本来春日大社の社家が建ち並んだ地区で、その多くは現在もなお広い敷地を保持しており、大正以後は資産家や文化人の住む高級住宅街となっている。



調査地区および調査家屋

調査の方法は昨年度同様、1次調査・2次調査の二段階にわけておこなった。1次調査では、調査地区内の道路沿いに所在するすべての家屋(約1500棟)について、外観から建築年代・用途・景観的評価・材質工法・改造内容等について資料収集を行い、2次調査では、1次調査の過程で選択した35軒について実測調査をおこなった。

1次調査の結果、伝統的様式の町家が約半数を占めていることが判明したものの、明治時代以前に建てられた建物は、全体の四分の一弱となり、道の両側または片側に数軒程度ずつ固まって散在している分布状況であり、近世の町家が急速に失われつつあることが明らかになった。



斎田家断面図



青田家断面図

とはいって、街区割や敷地割は近世以来の形態を保持しているし、材質・工法もまた同様である。一方、町家の連続する清水通以西と、旧社家町の高畠町附近とを比較してみると、旧社家町地区は家屋の建築年代の古いものが少ないにも拘らず景観的な評価は高い。一軒の敷地が広い旧社家町であったという歴史的由来に加えて、所謂古都保存法による規制をも受けていることなどから、こうした評価の差が生じていることも判明した。

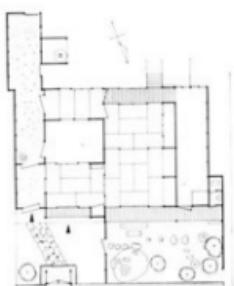
2次調査をおこなった家屋で特記すべき点としては、まず川之上町の斎田家があげられる。一列四室型のやや大規模な町家で、底部が二間弱（通常は半間程）と長く、棟高を上げて背面側へ拡張しているもの、当初部分は十八世紀中頃まで遡りうる古い町家である。福智院町今西家・中清水町八木家・同町青田家は、前二者が造酒、後者がかつて醤油醸造をおこなう大規模な町家で、いずれも幕末から明治初頭にかけて建てられている。整った外観や架構に幕末期の上質の奈良町の町家の特質をよく伝える。旧社家町地区にはかつての社家の建物が残っており、上高畠町藤間家・本楽師町太田家はいずれも18世紀末まで遡る建物である。社家の主屋は片側にトオリニワをもつ通常の町家に類似した平面であるが、ミセノマにあたる部屋の表側は式台構として、表向の玄関をもつ点に特徴がある。北天満町東家は瑜伽山天満宮の社家であるが、これもこのタイプの平面をもつ。

57・58両年度の調査を通じて、旧奈良町のかなり広い範囲にわたって伝統的な町家がなお遺存していることが明らかになった。また町家存立の基盤となっている街区割・敷地割・街区や

敷地内の建物の集会状態は伝統的な方式をよく守っている。

また、地区によって町の性格の異なる場合にも、各々が異なった環境の資質を保持している。歴史的環境を生かした奈良旧市街地の都市環境整備にあたっては、以上の諸点を勘案して、旧奈良町のできるだけ広い範囲を計画の対象とし、伝統的な建物の集中する北区及び個別の重要な伝統的建物を核としながら、伝統的建物を積極的に保存する地区、現代的デザインの建物を積極的に導入する地区などの段階的規制区分によって、歴史的に形成されてきた都市環境の秩序を維持してゆく方法を検討する必要性がある。

（山岸常人）



東家平面図（社家の1例）

## 奈良市農村集落・農家悉皆調査

### 建造物研究室

昭和58年度から2カ年計画で奈良市内の全農村、農家を概観する調査を始めた。農家については伝統的様式になるもの全戸につき形式分布と変遷をつかみ、価格についての格付けをし、とくに優れたものを市の文化財として保護する基礎資料を作ることが目的である。1日当り何十棟も見るので一戸当りは10分程度、時には外からの観察だけになってしまったが、58年度には約90の集落を廻り800余棟を調査した。

奈良市は東の山間部、平野部、西の丘陵地帯にわたり東西に長く、奈良町周辺と町の四方へ延びる街道を含む農村の立地条件は変化に富んでいる。また民家の先進地帯である近畿の中央から外郭にかかる位置にあり、地域的に重要、かつ興味の持たれるところである。

調査はまだ6割程度済んだに過ぎないが、中間報告として以下のような点を指摘できる。

(1) 集落には種々の型があるが、大別すると、街村的なもの、集落の輪郭が画然として密度高く閉鎖的なもの(主として平野部)、密度低く集落内外の境界がはっきりしないもの(山間部)がある。屋敷構も、多くの付属屋で囲まれた閉鎖的でコンパクトな型は平野部に多い。

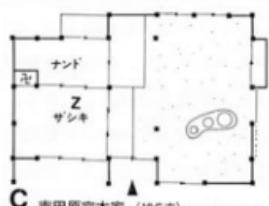
(2) 農家主屋の年代は古いものが少なく、18世紀後半が上限とみられる。明治期のものが圧倒的に多く下限は戦後に及ぶ。

(3) 屋根は草葺、入母屋または寄棟(入母屋が多い)から大和棟へ変るが、中間段階で切妻も小数ある。上手の座敷を落棟の瓦葺にする例は新しい家に多い。また、つし二階付の切妻造瓦屋(釜屋は大和棟同様落棟)は明治に現われる。一方、昭和になども入母屋造草葺が作られるなど、一つの時代に複数の形式が併存する。これは屋根以外の平面、構造についても同様である。

(4) 平面は近畿一円に分布する四間取(細部は異なる)のほか、三間取・二間取が2~3割あり、幕末においては四間取よりも二間取・三間取の方が一般的ではなかったかと想像される。二間取の上手に2室増築して四間取とした家もあり、二間取→四間取への発展がうかがわれる。

(5) 大和棟の出現は他地域より遅く、古風な突止溝が19世紀後半に見られるなど保守性が強い。

(吉田 哲)



四間・三間・二間取の例

# 日本の農家の系統的研究

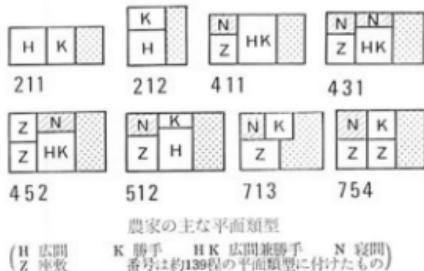
建造物研究室

日本の農家主屋には、図のように、基本的で性格の明らかな型がある。それぞれの基本型には部屋数を加えた類似の平面があり、基本型を核として形態的に関連した平面型の群が想定される。一つの群内では単純な型から複雑な型への発展が実証されることも多く、系統的なつながりも濃いが、形が似ているだけで発展の上では無関係のものも含まれている。群に若干の修正を加え、系統的関連のある型の集合に再編成したものを系統群と仮称し、近世民家の発展を系統群の変遷として概観すると次のようになる。

- (1) 近世民家の成立は地方により遅速はあるものの17世紀とみられている。各系統群の中心となる図の平面型はすべて17世紀には出現している。しかし、これらの平面型をとる家は上層に限られ、大部分の家は系統的特色に乏しい平面(床上1室、あるいは部屋の性格不明瞭な2室)であった。これら17世紀の小型の家は消滅し、小数の大型家のみを今日見るわけである。
- (2) 17世紀の分布状況は、近畿に713・754系統群(713・754型を含む)、関東に411・431(452型を含む)・512の系統群があり、その他では411が多いなかで四国の501(211型を含む)など地方的類型が点在していた。東北、九州の遺構数はきわめて少ない。
- (3) 18世紀は、前世紀の地方的特色を保ちつつ754系統群が各地に現われ、これの進出しない東北には431系統群が拡がってゆく。
- (4) 19世紀に入ると、754系統群は東北以外の各地に濃密に分布する。411系統群は全国的に少なくなるが、東北では431と共に主流となっている。
- (5) 19世紀には各系統群とも類型が増え、核となる基本型の比率は下がる。大型で複雑な平面が現われるが、反面、系統群の特色は薄れ、どの系統群に属するか判断できないようなものまでてくる。
- (6) 近世を通じてもっとも重要な系統群は411と754で、この両者の合計比率は各世紀とも50%を超える。両者は、系統群が徐々に衰退し他の系統群と共に754系統群へ収斂する過程をとる。
- (7) 視点を変え、民家としてもっとも特色的ある広間(日常生活の場であると同時に接客も行なわれる、民家独自の意匠のある部屋)を指標としてみると、広間のない素朴な家から広間のある家へ、そして広間が座敷にとつて変るという経過をたどる。

なお、この研究は既刊の民家関係調査報告書、修理工事報告書を基礎資料として用いている。

(吉田 靖)



## 法隆寺百萬塔の調査

平城宮跡発掘調査部

法隆寺百萬塔の調査も2カ年を経過し、塔身部の調査は「特等」から「甲上」「甲」へと進み、現在までに5200基を調査した。この間、大宝藏鏡収蔵の重要文化財指定品98基と十萬・一萬節塔を調査し、1984年5月には、東京国立博物館において、1988年に皇室に献納された百萬塔98基についても調査した。その結果、新たに次の点が判明した。(1)特等品1251基の内の9割以上にみられた補修痕跡が「甲上」以下の製品や重文指定品・収納物中には認められず、さらに分析の結果、補修上に塗られた白色顔料は、奈良時代当初の白土とは異なる炭酸カルシウム(貝殻糊)であることが判明した。したがって、補修は後世の仕事であり、その時期は法隆寺百萬塔の一部が外部に領された明治末年頃と推測される。(2)塔身部・相輪部とともに二ないし三分割して製作した組立塔の製品がある。(3)1930年に梱包された百萬塔のすべてを開封し、法隆寺に現存する百萬塔の数を集計した結果、出土品を含めた總点数は45,700余基となった。

百萬塔墨書銘については、これまでに塔身部1500余基を調査した。墨書銘は塔身部では基壇底面か第三層墨蓋上面の白色顔料(白土)下に記されており、調査には赤外線テレビを用いた。調査例全体の9割弱に墨書があり、その9割以上が底面墨書であった。墨書銘は「左景雲元年十一月一日八千万」「云二四月廿／右神秋万呂」のように一行ないし二行で箇略に記されており、「神護景雲二年六月二十九日、右、公子豈成」という内容を「云二六廿九／右豈成」と記すように、ほとんどが省略形の記載である。記載内容は①左・右の工房の別、②製作年月日、③製作工人名の三点からなり、最も短い記載では「廣」など人名の一部のみとなる。これまでの調査では、工房別の左・右の数はほぼ等しい。製作日では、神護景雲2(768)年の3月~6月の間に6割以上が集中している。工人名では、200名を超す人名が出てきており、氏姓ともに知られる者も50名近くに及んでいる。その一人の泰八千万呂の作例は、これまでに40例以上にのぼる。中には、「云二四十九／左五百足」「云二四廿三／左五百足」(写真)のように、同筆、近接した日付、同一工人名の墨書銘をともない、ヨクロの爪跡痕から同一のヨクロ台を用いて製作されたことのわかる例もある。

こうした調査によって、工人編成のあり方など百萬塔の製作工程が明らかとなり、この大事業の様相が復原できるものと思われる。

(松村忠司・佐藤一信)

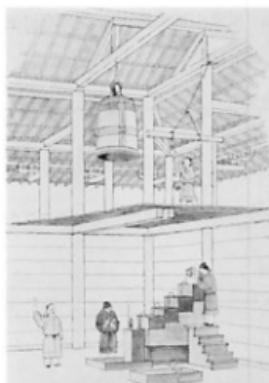
## 飛鳥資料館の特別展示

### 飛鳥資料館

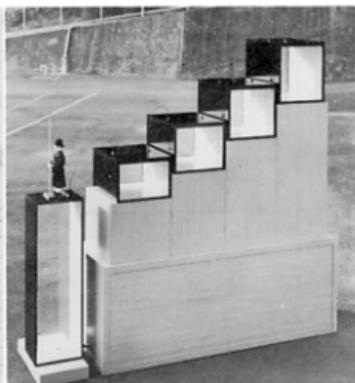
特別展示『渡来人の寺』　　怡隈寺と坂田寺は、飛鳥の代表的な渡来人である東漢氏と鞍作氏によって造営された。当研究所では、ここ数年来、これらの寺院の発掘調査を実施してきた。展示では、このたび村に返還された於美阿志神社十三重石塔婆埋納物（重要文化財）を中心に、これらの調査によって検出した瓦など発掘成果の一端を紹介し、あわせて、飛鳥における東漢氏、鞍作氏の動向の素描を試みた。とくに、1980年4月の発掘調査で検出した坂田寺仏堂須弥壇の鎮壇具については、仏堂の柱や須弥壇の模型の一部を館内につくり、鎮壇具の出土状況を再現した。

特別展示『飛鳥の水時計』　　『日本書紀』によると、齊明六（660）年、中大兄皇子は漏刻台をつくっている。1981年12月、この漏刻台とみられる遺構が飛鳥水落遺跡で発見された。この成果をもとに、関連諸科学や各界の協力を得、二つの模型が完成した。一つは、光ファイバーを用いて水の流れを表わした遺構模型（1/20）、他の一つは、実際に水を入れて時を計ることのできる水時計復原模型（実大）である。展示では、これらの模型のほか、復原した漆塗木箱、木毬、銅管、ラッパ状銅管、建物や木毬に使われた鉄釘、土器などの出土品も紹介した。また、はじめての試みとして、コンピュータ・グラフィックにより、水落遺跡の建物の復原、水時計の動き、水時計のシミュレーション、水時計の水槽の水位変化を映像化し、解説をつけて館内で放映し、さらに館内で30分ごとに、太鼓と鐘を鳴らして古代の時刻の呼称を放送した。なお、水時計復原模型では、有職人形司に依頼して、筒を持つ人形を新たに製作した。

このほか、水時計ができるだけ正確な時刻を示すようにするため、10月初旬から11月下旬という展示期間における気温変化の影響も考慮して、目盛の間隔を変えた数種類の筒も作つた。結局、展示終了間際では、30分単位の目盛で、展示当初にくらべると約2mm短い筒を用いる結果になつた。（小林謙一）



水時計建物内部の想像図



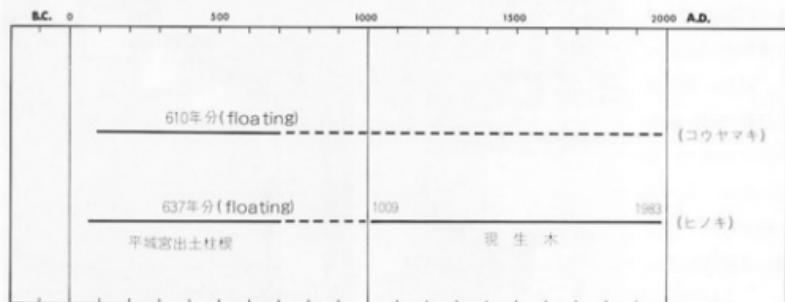
水時計復原模型

## 年輪年代学(4)

### 埋蔵文化財センター

当研究所が、年輪年代学の研究に取り組んで以来、4年間が経過する。本研究であつた樹種は多種類にのぼるが、なかでもヒノキとコウヤマキの2樹種については、開始当初から主眼をおき、調査を進めてきた。その結果、ヒノキ、コウヤマキは、本研究に適した樹種であることが判明した。ヒノキの試料は、現生木(天然材)、古建築部材、藤原宮跡・平城宮跡出土掘立柱の柱根、古墳時代の棺材等である。コウヤマキは、主に平城宮跡出土掘立柱の柱根、古墳時代・弥生時代の棺材等である。現在、ヒノキとコウヤマキの2樹種の標準年輪曲線の作成作業を進めると同時に、同一産地で作成した標準年輪曲線が、どの地域まで相関関係があるかをあわせて検討している。ここに、こうした結果の概略を報告する。

**現生木の標準年輪曲線**　試料は、長野県木曾郡(4カ所:42個体)、岐阜県恵那郡(2カ所:13個体)、三重県北牟婁郡(1カ所:6個体)、和歌山県高野山(1カ所:2個体)の総数63個体である。高野山で入手した試料は、天然林か人工林かは不明であるが、その他はいずれも天然林から伐採されたヒノキ材である。まず、同一産地で採取した試料間相互の相関関係は高く、同じような年輪パターンをもつことが判明した。次に、木曾ヒノキ(上松産)20本で作成した標準年輪曲線と他の産地のものとの相互相関は、距離が遠くなるにしたがって、次第に低くなるものの、約250km離れた三重県尾鷲産のヒノキ、和歌山県高野山のヒノキとも相関関係のあることが判明した。これによって、同一地域での標準年輪曲線でかなり広い地域がカバーできる見通しが得られた。現在、木曾ヒノキを中心に、古建築部材から得た年輪データーを加え、西暦1009年までの標準年輪曲線が完成している。またこれとは別に、木曾ヒノキ1点から西暦947年にたつする年輪曲線を得ている。次にのべる平城宮標準年輪曲線まであと数百年と空白部分がちぢまってきた。一方、現生木のコウヤマキは、和歌山県高野山から2点ほど入手したにすぎないが、ヒノキ同様、相互相関は有為であることを確認している。

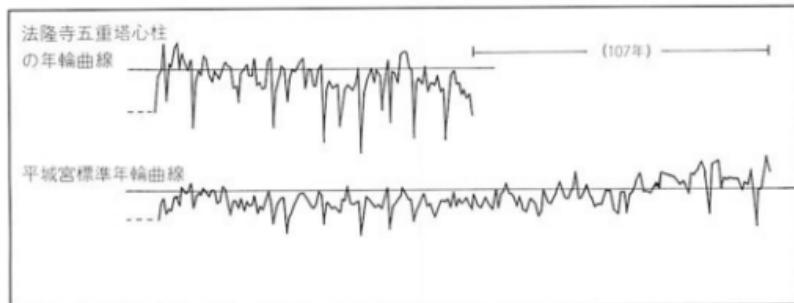


年輪曲線による年代確定範囲(1984年10月現在)

**遺跡出土木材の標準年輪曲線** 平城宮跡からはこれまでの発掘調査で500本以上の柱根が出土している。これらは、ほとんどすべてが8世紀あるいは9世紀初めに使用されたことの明らかなものであり、本研究に最適な試料である。この柱根の樹種は、ヒノキ材とコウヤマキ材であり、両者が混用されている。このうち、比較的遺存状態の良好なものから、ヒノキ材24本、コウヤマキ材60本を選定し、年輪幅の測定をおこなった。つぎに、柱根相互の年輪パターンの相関を検討した結果、両樹種とともに、数点を除き、相関はきわめて良いことを確認した。この結果をふまえて、相互相関の高い柱根を選定し、ヒノキとコウヤマキの標準年輪曲線の作成作業をおこなった。現在、古建築部材の年輪データーも加え、ヒノキ材20本で637年分、コウヤマキ材30本で610年分の年輪曲線を得ている。したがって、この2種類の年輪曲線の最先端にある部分は、2世紀にはいっているものと推定される。この年輪曲線を仮に平城宮標準年輪曲線と呼ぶことにする。しかし2つの年輪曲線は、現生木を中心として作成した標準年輪曲線とはなお未連絡であるため、正確な絶対年代はともに未確定である。つぎにこの曲線を用いて実際に応用した例を報告する。

平城宮標準年輪曲線と法隆寺五重塔心柱とのクロスデーターティング 法隆寺五重塔は、昭和16年から昭和27年にわたって解体修理された。このとき、心柱の下部の腐朽部分を切断し、根継ぎすることとなり、その際に一部が輪切りにされた。現在、京都大学木材研究所に保管されている。心柱は、八角形に整形されており、さしつたしが85cmある。年輪の測定は直交する4方向とし、この数値を平均して年輪曲線を作成した。これと、先に作成されている平城宮標準年輪曲線との年輪パターンを相互に比較検討した結果、心柱の最も外側の年輪は、平城宮標準年輪曲線の最終年輪(8世紀?)から107年前の年輪と重なった。ただし、心柱は原本から8角形に加工される時に、辺材部分が削り取られているため、この数字の差が、直ちに心柱の伐採年代を直接示すことにはならない。現在、現生木による標準年輪曲線とを連結する作業を進めており、遠からず両者をつなぐことができると予想している。わが国でも、年輪年代学による遺跡、建物等の年代判定が、いよいよ実用の段階に入る日も近いと思われる。

(光谷拓実)



年輪曲線のクロスデーターティング

## 一般カメラによる写真測量

埋 藏 文 化 財 センター

写真測量は、写真を計測したり、写真から図を描きおこす技術であり、その過程で大小様々な誤差を生ずる。その誤差を許容できる範囲内に取まるように、カメラ・図化機等の機器の構造と作業のシステムが設計されている。最近は電子計算機の発達と普及によって、誤差を数学的に処理することが考えられるようになった。一般的なカメラは、計測や図化を目的としているので、レンズの収差が大きい、露光時に感光膜面が正しく平面でない、焦点距離と光軸の中心が正確に判っていない、等の理由で写真測量には使ってはならない、というのが写真測量に従事するものの鉄則であった。その鉄則が数学的処理によって、破られた。

もし、発掘調査員が、普通のカメラで撮った遺構の写真を使って図化することが出来たら、実測に多大な時間を要する複雑な遺構や文化層が複数層重なっている場合にも、ひとまず写真を撮っておいて次の作業を進めることも出来る。そのために、市販のカメラを使って計測した場合どの程度の精度が期待できるかを確認することと、撮影のシステムを確立しておく必要がある。そこで、市販の一眼レフカメラ ( $f=35\text{mm}$  装着) の性能テストをおこなった。被写体が凹凸の少ないものなら、殆どどのカメラが平面位置の誤差は  $2\text{cm}$  以内に取まる。凹凸の大きい被写体の場合はオリンパスOM-1、コンタックスRTSが良い成績を示した。コンタックスRTSは、焦点距離が  $1/100\text{ mm}$  の精度で測ってあり、光軸の中心が写真上で判るようにフレームに指標を入れた機種が作られており、それを使えばさらに良い結果が期待される。

撮影の時にはカメラの光軸を被写体に直交させなければならない。即ち発掘遺構の撮影ならば、遺構面上にカメラが垂直に吊り下げられてはいけない。そのためには、カメラがいつでも直立になるようなジンバル装置付架台と、それを吊り下げる装置があることが望ましい。一眼レフなら、ワインダーにリモコンの受信機をつけても  $1.5\text{ kg}$  程度であるから、架台は、幅  $1\text{ cm}$  のアルミのL型又はコ字型の角材で作ればよい。但しジンバルは、カメラが常に垂直になるのは勿論、城の石垣・建造物のファサードなどの立面撮影用に水平に向かられるようにもしておくべきである。カメラを吊り下げる装置としては、テレビ局のマイクロフォンを吊り下げるマイクロホンブームにヒントを得て、新たに、はねつるべのようなカメラブームを開発した。軽量で組立て運搬が容易であることを主眼に設計した。この装置の短所は、ややコストが高いこと、あまり長い腕を作れないことである。

数学的処理の思想で作られた新鋭の解析図化機を使用すれば、カメラの光軸が被写体に垂直でなければならないという条件はなくなる。遺構に接して立てたヤグラの上から手持ちで撮影した写真からでも図化可能である。ただし、光軸と水平面とのなす角が小さいほど精度が悪くなるし、斜め写真になるため、死角が多くなり、よい図にはならない。出来るだけカメラを真下に向けるようにすることがよい精度につながる。

(木全敬哉)

## 遺跡探査法の開発（2）

### 埋蔵文化財センター

遺跡・遺構の探査法について、当研究所では、開発研究や応用例を、学報や年報等を通じて報告してきている。今回ここに紹介するのは、新たに実用化に成功した探査法で、定常波探査法と呼ぶものである。

定常波探査法は、ある一定の振動波を発生させて、それを地中へ送りこみ、振動波の伝播速度を求ることにより、土層を細分する方法である。振動波は、硬い層では速く、軟らかい層では遅く伝わる。また、振動の振幅の小さいものは浅い部分を通り、大きければ深い層まで達する。この方法では、遺構は他と異なる伝達速度の地層部分としてとらえられるのである。

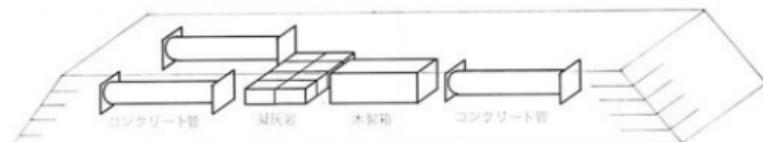
定常波探査において使用する振動波は弾性波の内でもレイリー波（Rayleigh）として区分されるものであるが、これを考古学的探査に応用した例は、まったく無かったので、まず、既知の対象物を利用して、基礎実験をおこなった。実験には、コンクリート管、凝灰岩、木製箱を埋めた実験場をつくり（下図）、それらを対象とした。その結果、たとえば、コンクリート管では、管は周囲の地層と比較して、伝播速度の速い部分すなわち硬い個所として、木製箱では、その位置は速度が遅い、という結果を得ることができた。

このような基礎実験によって、定常波探査法の原理的検討を経たのち、既知の遺構である、石組暗渠、濠、横穴式石室、横穴、版築土等を対象に、応用実験をした。そしてこの過程で、装置の設置技法やデータ解析時の留意点などの問題も明らかになった。この問題点は、応用例を増加させ、データの蓄積をはかることにより、解決できたので、定常波探査法を、新たな探査法として、未知の遺構探査に、採用するに至ったのである。

さきにも述べたように、この方法では、振動波を利用して地層の硬軟を識別する方法をとるので、探査対象としては、周囲と硬軟の差としてとらえられる横穴、濠、石組遺構などを有効性の高いものとしてあげることができる。横穴では、内部が空洞であったり軟らかな土が堆積している状態であれば、周囲との土質差は明瞭であり、濠内の軟らかな堆積土や石組遺構を構成する石材も、他と比較すれば、硬軟の差が著しいからである。

（西村 康）

参考 「地下遺構探査の新技術の開発」（『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』総括報告書 文部省科学研究所 特定研究「古文化財」総括班 昭和59年3月）



実験用埋設場

## 情報機器活用システムの開発研究

埋蔵文化財センター・歴史研究室

当研究所における標記の研究には、特定通信回線を通じて国立民族学博物館の大型計算機システムを利用しておこなっているものと、パソコンコンピュータシステムを利用しているものとがある。前者は、先年から開発している平城宮跡出土品データ検索活用システムと航空写真検索活用システム、および1983年度に大きく進展した古代史データ活用システムとである。今回はそのうちの後二者について開発進展状況の概略を報告する。

**古代史データ活用システム** 1983年度の事業として、木簡のデータの入力とプログラムの一部作成、およびその他の古代史文献史料の入力作業を進めた。

木簡の入力にあたっては、木簡記載の国郡里名や人名・年月日(年号)とともに、文字内容以外の遺跡名・発掘地点・調査次数・樹種・木取・寸法・形状等の項目も立てた。入力した木簡は、1983年度末までに報告書や概報等に公表された約1万点である。その結果、一字ごと、および複数文字からなる単語ごとに木簡の検索が可能となった。また、単語と単語との組み合せ、たとえば越前國と同時に中男作物と記したもの、あるいは白米と同時に五斗という数量を記したもののような検索も可能となった。画面へのディスプレイやプリントは、木簡1点ごとの場合と、文字史料の部分のみを一括しておこなう場合との二通りが可能である。現在までに文字史料部分の校正を終了したが、なお、いくつかの改善すべき部分を残している。たとえば、木簡には、同一文字であっても「國」「國」「國」などさまざまな表現があるので、「國」の字で検索しても「國」という記載例はでてこない。このような場合には、三文字すべての検索しなければならない。したがって、常用漢字による検索だけで、旧字体・異体字のすべてが表示されるようプログラムを改訂するといったことなどが今後必要である。

古代史文献史料の入力としては、延喜式、風土記、古事記、律、令(本文のみ)について実施した。これら古代史文献史料はいざれも編纂物であり史料として共通した性格をもっているので、延喜式での入力方法=ワークシートの作成方法は、他の史料にも共通して通用できるものと思われる。すなわち、延喜式についての試みは、古代を問わず編纂物としての文献史料の入力方式およびその後のプログラミングの基本型となるべき要素をもっている。今回おこなった延喜式の入力では、国史大系本によって、頁数、行数によって文字および用語の検索が可能なようにし、また同一行内での文字および用語の組み合せによる検索も可能となるようにした。また、ワークシート作成の作業能率を高めるため、一語ずつのわからしがきのチェックはおこなわなかったが、官職名、官司名、物品名、食品名、地名、人名等の分類をアルファベットで原文に指示し、その項目ごとの検索をも可能にした。この延喜式のデータ操作、プログラム作成は、木簡のそれの改良によって可能だが、なお、次年度の課題として残っている。今後はこのシステムを発展させ、古代史関係史料のすべてのデータベース化をめざしている。

NARS航空写真検索システム NABUNKEN AERIAL PHOTOGRAPH RETRIEVE SYSTEM (NARS) と名付けたこのシステムも、完成に向けての作業がようやく軌道に乗った。作業内容は次の3項目に大別できる。

(1) 16mmマイクロフィルムへの複写。23cm幅の航空写真ネガフィルムを、16mmマイクロフィルムに複写する。ボジの16mmフィルムはロール状で、平均4500駒を10cm×10cmのマガジンに収納する。プリップマークと呼ぶ検索のためのイメージマークを各1駒ごとに焼き込む。マイクロリーダーは、このプリップマークを数えて希望する駒を検索する。現在使用しているコダック社製IMT-100型マイクロリーダーの検索速度は一秒間に320駒である。マイクロフィルムの解像力は150~200本と強力で、INDEXとしての使用に充分耐える。保存用ロールと、ワーク用ロールを各1本作製し、費用は1本あたり約10万円である。

(2) 標定図作製、ワークシート作製。添付する標定図(以下、添付標定図と略称)と複写16mmを照合すると、この添付標定図がきわめて不備であることがわかった。フィルムのみあって標定図のないもの、標定図のみあってフィルムのないもの、すべての撮影コースを記入していないもの等、総合すると全体の約40%に不備が認められた。また、コンピュータ入力の際、標定図の傾き、縮尺、および写真的主点位置の座標をコンピュータに認識させるため、地形図の枠の座標を入力する必要がある。添付標定図のはほとんどはこの枠を欠くため、すべての標定図を作り換える必要が生じた。標定図作成にあたっては、マイクロリーダーに投影された航空写真を見ながら、5万分の1地形図に撮影点を記入する。各コースの始めと終りには矢印とプリップNo.を付す。共通の撮影諸元もあわせて記入する。また、共通項目などを入力順にリストアップしたワークシートも作製する。ワークシートには、地図のID、20万分の1地図名、件名、標定図ID、撮影年月日、撮影縮尺、感光剤種名、撮影会社名、保管No.、コース数、マガジンNo.、プリップNo.、フィルムサイズ、等を記入し、どの項目からでもランダムアクセス可能とする。

(3) コンピュータ入力、ホストコンピュータへの転送。当研究所保有のマイクロコンピュータ(神電器nf800)をターミナルとし、特定通信回線を用いて国立民族学博物館のホストコンピュータ(IBM-4341)に入力する。各データは一旦マイコンのディスクに蓄え、折を見てホストに転送する。ワークシートの各項目はターミナルのキーボードで入力し、撮影主点座標(緯度・経度)は、グラフィックタブレット(テクトロニクス社製4956)に標定図を貼付し、カーソルで入力する。入力プログラムは対話形式になっており、入力には専門知識を必要としない。入力の精度は、図上で±5秒(約140m)である。

今までの作業量は、マイクロフィルムの複写が約35万駒で全体の約半数、データ入力はそれの半数である。今後、増え続けるデータに対する作業体制の強化と予算の裏付けが望まれる。

なお、このシステムの開発には、1981・82年度に文部省科学研究費(試験研究)、83・84年度に同データベース刊行費の補助を受けた。

(伊東太作・鬼頭清明)

## 条里制研究会(第3回)

### 埋蔵文化財センター

この研究会は本年をもって一応終了する。今年度は、都域・地方官衙・微地形を主要テーマとして採り上げた。参加者は約170名。(昭和58年1月24・25日 平城宮跡資料館講堂)

長岡京と条里制

長岡京跡発掘調査研究所 中山 修一氏

延暦3(784)年の長岡京の条坊造営は三条第2小路(東西線)と左京二坊坊間小路(南北線)を基準にして、乙訓郡条里の上に設定され、京の施設後は、弘仁9(818)年はまだ条坊地割であったが、承和11(844)年頃、京城外に残る条里畦畔を延伸して、条里復原をした。

国府と条里地割

奈良国立文化財研究所 山中 敏史

国府域内の地割は、政庁と同方位のものと、異方位の場合があり、先行条里を踏襲して条坊地割がなされたとは言い難く、官衙配置等との関わりで、必要に応じて施工されたと考える。

国府周辺の条里は、国府設置と同一計画なし、それ以降に設定された可能性が高い。

条里プランの里について

追手門学院大学 金田 章裕氏

里の区画が、莊園の境界線や、村レベルの実質的単位として使用された時には、旧村界との整合率が高くなり、そうでない場合は、条里プランの定着著しい地域においても、旧村界との整合率は低くなる。里の区画は、条里呼称法上、坪を表示するために必要であったといえる。

朝鮮半島における方格地割

奈良国立文化財研究所 佐藤 興治

高句麗の平壤城は高麗尺500尺を1町とし、町内を4等分する。新羅王京慶州は高麗尺400尺、李朝の南原邑城は同500尺を、それぞれ1町とし、前者は地割から数次の施工が考えられ、左右京の存在等、中国都城の影響が強い。後者は2里10町を基にした地割で古代に遡り得る。

沖積盆地の地形配列・微地形と条里型土地割

日本大学 高木 勇夫氏

甲府盆地の条里型土地割は、散在的に分布し、亀岡盆地では盆地全域に分布する。かかる特徴は、背後の山地条件の違いによるもので、前者の場合、急傾斜扇状地末端部の泥流舌状地の存在、後者においては、段丘と上位氾濫原などの拡がりが重要な役割を果していると考える。

条里遺構の保存問題

文化庁 河原 純之氏

条里遺構と莊園を主とする広域水田遺跡について、現在の地下保存、部分保存、または条里の基本線保存等に加えて、代表的莊園等は、発掘を含めた現状記録の調査を早急におこなう必要があり、それには、考古学だけでなく、日本史や地理学の側の積極的な支援が望まれる。

まとめ 総括(狩野久)でも言及したが、本研究会の成果としては、地表の遺存地割即古代の条里遺構と解する歴史地理学的慣性に対し、考古学の立場から警鐘をならしたことであろう。個別地域的には、遺構の持続性が認められることもあり、絵図や航空写真等を利用しての研究が意義を失うものではない。しかしながら、発掘調査成果と、現条里遺構との相関性をきめ細かく究明する作業によって、歴史的真実により迫り得るといえよう。

(岩本次郎)

## 平城宮跡・藤原宮跡の整備

平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部・庶務部

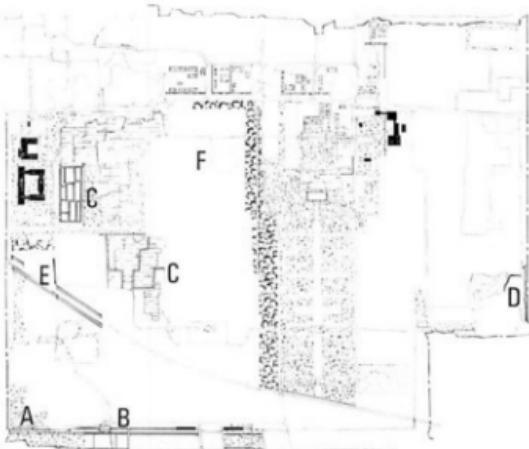
### 1. 平城宮跡の整備

1983年度に実施した宮跡整備は、平城宮の西南隅部での南面大垣復原整備、南辺部中央西部での外周縁蔭帯整備、平城宮跡資料館東部および佐伯門東南部での草園整備、東院東南隅部での東院整備、近鉄線沿いの修景整備および第一次大極殿院地区の整地などである。

**南面大垣の復原整備**　南面大垣の復原建設は、朱雀門両脇および東西の隅部4カ所を計画しており、昨年度までに朱雀門の両側約50mずつを整備している。そこで今年度は、周辺の環境整備の完了している宮の西南隅部分の復原建設をおこなった。大垣の寸法は、昨年と同様、大棟上端までの総高を5.63m、基底幅2.7mとし、総延長51mを復原した。

**南面大垣の軒瓦**　門・大垣地域の発掘調査によって出土した軒瓦は量的に少なく、また特定の型式に集中しない傾向を示す(『平城宮発掘調査報告Ⅳ』)。そのため、朱雀門両脇においては、比較的出土量が多くまた第一次大極殿地域において主要な組合せとなっている6284C-6664C型式を採用した。西南隅部では、出土頻度が次に多い6273B-6641C型式を選んだ。

**外周縁蔭帯整備**　宮跡南辺部において西端部から開始した外周縁蔭帯整備を、今年は、若犬養門跡を中心とした南辺中央西寄り約11,230m<sup>2</sup>について実施した。今年度施工区には、若犬養門跡(29×14m)、南面大垣(約187m)、堀地、二条大路(約270m)およびその両側溝・西一坊間大路が含まれている。若犬養門跡では、凝灰岩縁石により一段立ち上げて門の基壇規模を表示し、基壇内を張芝とした。この門跡には、現在、用水路2本が十文字に交差して流れしており、流路を変更することができないため、今回の整備ではこれらの用水路に基壇が4分された状態のままの表示をし、用水路にはグレーティング蓋を布設した。南面大垣については、凝灰岩切石を大垣の基底幅(2.7m)に並べ、その中に中木(サザンカ)を植栽し、位置を表示した。二条大路については、その幅員を38mとし、大路両側沿いにシダレヤナギを列植した。大路上は砂塵等の飛散を防ぐため張芝としたが、



平城宮跡整備位置図

若犬養門前58m間は、西一坊坊間大路の交差点を含め粒調砕石舗装をし、道路の霧氷気を出すようにした。門跡より東部（旧積水工場敷地）では国有地幅が狭いため、二条大路の北側溝南岸線より4～5m幅の表示にとどめ、北側の並木の植栽のみをおこなった（図中B）。

**草園整備** 宮跡西部の谷筋では草園による整備を計画しており、今年度は平城宮跡資料館東部（10,280m<sup>2</sup>）および佐伯門東南部（25,160m<sup>2</sup>）を整備した。平城宮跡資料

館東部では、レベル的に自然流下で水をためることはできず、池沼の造成が困難であるので、1972年に乾地性草木類を植栽し、仮整備を促進してきた。しかし、雑草の侵入、管理に要する人手や経費の不足のため、従来どおりの整備が困難となってきたので、芝生と樹木を中心とした整備に改変した。そして盛土上に旧畦畔を拡幅して砕石敷の苑路とし、旧水田当時の地割を示した。佐伯門東南部では、1981年度に造成したすぐ北側の池沼から高い水位を保った水路を設けて導水し、3つの大きな池をつくった。池水は順次流下するようにし、水深も最大45cm程度におさえた。池外周の堤は、粘土を締め固めて漏水を防ぐようにし、堤上面は砕石敷とし苑路に利用するようにした。なお、水をためることのできない箇所については、池沼外周の堤のレベルに合わせて盛土し、センダン、コナラ、ムクノキ、ヤナギ、等の落葉樹を中心として植栽した。

**東院整備** 平城宮跡博物館構想で早期の整備が計画された東院庭園地区は、一部の土地の買収ができず、計画実施を後年に送らざるを得なくなっている。しかも、買収地については、年数回の草刈りだけでは充分な管理ができず、雑草や害虫発生等で隣接地からの苦情も多い。そこで、境界沿いにコンクリート製U形溝を布設し、その内側に砕石舗装の管理用道路を造成し、雑草地と私有地間の分断を図った。今回整備した地区のうち東辺部では、買収地境界が東辺大垣、塙地外側の溝（東二坊坊間大路西側溝）上を走っているため、溝の西岸線と管理用道路西肩線とを一致させた。なお管理用道路内側は盛土して灌木を群植し、芝刈り等管理作業回数が軽減できるようにした。

**近鉄線沿いの修景整備** 宮内の環境整備の進展とともに、ところによっては宮内を横切る近鉄奈良線の軌道近くにまで整備地が及び、宮跡利用者による軌道横断等の危険性も生じてきた。とくに佐伯門東南部の草園整備など宮西部での整備地が軌道敷に近接する箇所が多くなったので、宮西辺から東へ約270mの間、軌道沿い両側を植栽によって修景整備した。植栽は、中央をサザンカの列植とし、その前後をヒラドツツジ、クチナシ、アセビ等の灌木の混植帶とした。



平城宮跡草園整備

なお、佐伯門南で近鉄線北側の旧資材置場を整理し、その東側に設けていた目隠し用の土塁を撤去し、土塁上にあった樹木を旧資材置場内に適宜植栽した。

**第一次大極殿院地区整地** 第一次大極殿院地区および朝堂院地区は、すでに相当部分の調査が完了している。この地域の環境整備については、朝堂院地区を除いて近々の計画はなく、調査終了後の埋戻しをおこなったままの状態である。しかし平城宮跡資料館と覆屋間の見学路や県道（通称一条通）を通る一般見学者から見ると、第一次大極殿院以南は荒地状であり、早期整備化の要望も多い。しかも春秋の平城宮跡特別公開時には、平城宮跡利用者の数は年々増加し、周辺道路はマイカー駐車で混雑し、定期バスの運行や地元住民の日常生活にも支障をきたし、地元住民・バス会社や警察から臨時駐車場の開設が強く要望されるようになった。そこで荒地景観を解消し、平城宮跡特別公開期間中の利用者が駐車できる場所として、県道からのアプローチを考慮し、第一次大極殿院地区約7,390m<sup>2</sup>を選んで整地した。表層は碎石舗装とし、約15m間隔でU形溝埋込みによる地中排水路を布設した。

**その他** 1982年度までに復原した南面大垣が、落書き等による損傷を受けたので、大垣を取り囲む形で背丈の低い樹木（イヌツゲ、トベラ、ヒラドツツジ）を植栽した。

	南面大垣	外周緑陰帯	草園整備	東院整備	近鉄線沿い修景	第一次大極殿院整地	大垣周辺植栽
規模 工費(千円)	51m 95,000	11,230m <sup>2</sup> 62,800	35,440m <sup>2</sup> 80,220	2,030m <sup>2</sup> 9,870	4,420m <sup>2</sup> 18,220	7,390m <sup>2</sup> 11,500	197m 3,950

## 2. 藤原宮跡の整備 (7)

1983年度の藤原宮跡の整備では、見学者用便所の建設、見学者広場の造成および案内板の設置をおこなった。

**見学者用便所の建設** 藤原宮跡は、飛鳥地方見学の半日あるいは1日コースに含まれている。最近、大極殿周辺の整備が進んだことによって、見学者は年々増加してきている。宮跡には、主にレンタサイクルを利用して訪れる見学者が多く、滞在時間も長くなる傾向にある。しかし、やっとたどりついた藤原宮跡には便益施設がなかったため、大極殿近辺の民家に迷惑をかけることも多く、地元住民から便益施設を設けるよう強く要望されていた。そこで大極殿近くに便所を建設することとした。その建設地の条件としては、浄化槽を埋設しても遺構破壊の心配がない既調査地であること、周辺水田や溜池に影響なく給排水ができる、景観的にも余り目立たない場所であることとした。検討の結果、柱穴等の遺構のない先行条坊の四条々間路と西一坊々間路の交差点上に場所を選定した。建物の平面規模は、8.4m×4.3m（面積36.12m<sup>2</sup>）で、



藤原宮跡見学者便所

高さはできるだけ低く押えて、4.32mとし、屋根は桟瓦葺きで切妻造の構造とした。外観は和風を強調し、外装を木造の白壁仕上げとした。なお便器数は、男性用大1穴・小4穴、女性用4穴とし、室内の壁はすべて色タイル貼りとした。

見学者広場の造成および案内板の設置 藤原宮跡では現在も毎年指定地の買収を継続しており、国有地面積は年々変化している。そのため宮跡を訪れる見学者は、水田跡の雑草地や耕作地の入り混じった現状に接することになり、宮跡の範囲や地割等を一見して理解することがむずかしい。しかも大極殿周辺の整備地面積は、広くなったとはいえ、全体からみるとまだ6.8%程度にすぎず、宮跡に到着しても大極殿への道もわかりにくい状態である。そこで見学者がよく利用する宮跡へのアプローチ道を選び、その道沿いの買収済地を見学者広場として仮整備することとした。見学者広場には、藤原宮跡の案内板を設置し、見学者が小休止できる場所として擬木製のベンチを設置した。また、周辺の景観を考慮して、外周を植栽帯で囲み内側を碎石敷とし、落ちていたふん匂気を持たせるようにした。案内板には台枠材を使用し、説明文の文字は教科

書体で機械彫りとし、現況地図に遺構配置図を重ねてステンレス板(70cm×70cm厚2mm)に腐食し、ラッカー塗りとし、その色彩で表示対象を区別した。案内板のデザインは、藤原宮跡を説明するものとして、大極殿北側の既存のものに合わせた。なお、案内板は、1981年度に造成した見学者広場に1基設置ただけで、本年度造成した広場への設置は、本年度以降に予定している。

(細見啓三・渡辺康史)



藤原宮跡整備位置図



見学者広場案内板

	見学者用便所	見学者用広場	案 内 板
規 模	36.12m <sup>2</sup>	6,550m <sup>2</sup>	1 基
工費(千円)	12,180	31,500	2,920

## 在外研修報告

1983年11月から12月にかけて2ヶ月間、オランダを中心に、文部省の在外研修員としてヨーロッパを訪問することができた。テーマは「写真測量の文化財への応用」である。

オランダは古くより写真測量に関して指導者の立場にある。私が40日間籍を置いた「航空測量のための国際トレーニングセンター」(ITC)も、1955年発足以来、数多くの写真測量の技術者を全世界に送り出している。1966年には名称を「国際航測・地球科学研究所」と変え、写真測量以外の分野にも輪を広げたが、長年親しまれた ITC の略称はそのまま受け継がれている。

研修のコースには大きく、写真測量・航空写真・地形図コース、天然資源調査コース、社会科学総合調査コース、の3コースがあり、それぞれのコースがさらに細分化され、全コースは実に40におよぶ。私の希望したコースは当然写真測量コースであるが、正規の履修期間は最短で6ヶ月、長いもので18ヶ月であるため、特に「航測およびリモートセンシング応用コース、スペシャル」というのを作っていた。勿論そのコースの生徒は私一人である。学生は若干名のアメリカ、西ドイツ、イタリー、日本人を除いては、ほとんどが開発途上国の人達で、300人以上の収容能力のある学生用のゲストハウスは各人種の博物館といった様相である。

ITCの教育施設は素晴らしい。様々なタイプの図化機、今はやりの解析図化機も揃っている。飛行機の内部さながらにこしらえた航空写真撮影士教育用のショミレーターもある。ナビゲーションスコープを覗くと、空中から地上を見ているように床下の写真が流れる。実際にも双発機を所有しており、実地実習もできる。私の受講した講義は遺跡の写真判読、航空写真を利用した都市計画など多岐に亘るが、なかでも、リモートセンシングの第一人者、ヘンペニアス教授の「リモセンと写真測量の離婚」論は面白い。「リモセンは、写真測量本来にはなんら寄与していない。ランドサット衛星の打ち上げで、たまたま写真測量の専門家が判読に加わっただけのことだ、2者が熱にうかれて結婚したようなのだ。ハネムーン時代も過ぎて10年、そろそろ性格の不一致という理由で離婚するべきである」。私も日頃、衛星写真によるリモセンが写真測量の一派というだけでなく、学会の主流派であることに疑問を感じていたので、リモートセンシングの専門家にしてこの言あり、我が意を得た思いであった。

講義の合間に見て、先年当所にもこられた、フローニンヘン大学のウォーターボルグ先生を訪ねた。フローニンヘンはオランダの北方に位置し、遺跡の密度が濃い地域である。古墳や住居跡の発掘現場や旧跡を先生の車で案内していただいた。遺跡ではないが、堤防に囲まれた広大な干拓地には目を見張った。その干拓地からオランダ黄金時代の沈没船がすでに300艘以上も発掘され、保存処理、展示がされている博物館も見学できた。そこでも遺構の実測に写真測量を導入しており、若い考古学者に技術的な質問を受けた。文化財のみならず、地上写真測量の分野では日本の方が明らかに進んでおり、ITCの教課コースにもそれは無い。その点を質問したところ、お前が講師になってコースを開いてくれという返事であった。

(伊東太作)

## 公開講演会発表要旨

7世紀における同范軒瓦について まず、比較的遠距離に位置する豊浦寺と隼上り窯、四天王寺と楠枝窯、法隆寺若草伽藍と北野廃寺（幡枝窯）相互の同范瓦の年代を述べる。隼上り窯・楠葉窯・幡枝窯では飛鳥Ⅰ後半の須恵器が出土するが、隼上り窯では飛鳥Ⅱの須恵器が圧倒的に多い。坂田寺の池SG100からは飛鳥Ⅱの須恵器と有子葉單弁軒丸瓦（坂田Ⅱ）が出土しているから、飛鳥Ⅰ後半の須恵器を出土する幡枝・楠葉・隼上り窯を7世紀初頭に位置づけることは困難で、やや年代を降らせる必要があるだろう。つぎに、大和盆地北部の近接する地の同范瓦は中臣氏との関連を想定させる。年代は豊浦寺や北野廃寺に近く、仏教を排斥する立場として書紀に描かれる中臣氏だが、早くから寺院を造立したのであろう。

（山崎信二）

高句麗の都城 高句麗第三番目の都城は平壌に置かれた。史料によると平壌においてはさらに「平壌城」から「長安城」へ遷都したという。近年の発掘で大規模な建築群が検出された安鶴宮遺跡は重要な問題を内包している。安鶴宮を初期の「平壌城」（427～586年）の都城遺跡とする報告書の見解とは異なり、その創建は7世紀後半を大幅には遅ないと私はみる。従って安鶴宮は後期の「長安城」（586～668年）に関連する遺跡であり、また初期の「平壌城」は安鶴宮の下層に求められる可能性がある。とはいへ創建から廃絶に至る遺跡自体の理解に困難な点も多く、高句麗都城の構造、変遷を論ずるには、瓦の年代をはじめ、なお基礎的な研究有待たねばならない。

（千田剛道）

飛鳥の氏寺——山田寺を中心に—— 飛鳥地域の氏寺の中で、山田寺がどのような諸特徴を有しているかを解明するため、山田寺の発掘成果と他の氏寺との比較検討を試みた。立地・伽藍配置・軒瓦等の諸要素を総合すると、飛鳥の氏寺は、官寺志向型と、それより形態などで見劣りするが個性的で独自性を持つ型とに分かれる。前者には、飛鳥寺型と山田寺のような類型があり、山田寺は飛鳥寺に次ぐ第一級の寺院として位置づけられる。山田寺で採用された瓦当文様や礎石の蓮華文様などの新しい要素には、唐・新羅の影響が考えられる。伽藍の変遷の分析にあたっては、回廊と他の堂塔との位置関係を重視した。

（岩木正二）

古代庭園の植栽について 庭園に植えられた植物は、庭園を構成する他の要素、地形、地割り、石組、建物などと同様に庭園景観を形作る重要な要素である。近年、古代庭園の発掘調査例が増えつつある。そうした庭園にどのような植物が好んで植えられていたかを検討するため「万葉集」と「懐風藻」にあらわされた庭園植物を抽出するとともに、古代庭園遺跡の池の堆積土中から発見された植物遺体、花粉などを分析した。それによると、マツ・ウメ・モモ・ヤナギ・サクランボ・モミジ・ツバキ・センダン・スマモ・ツツジなどが顕著であり、これらの樹種から奈良時代の庭園植栽の特色として、①高木が少なく、中・低木が多い、②常緑樹・針葉樹が比較的少なく、落葉広葉樹が多い、③全体的に見ると、現代でも庭園に植えられている植物がすでに奈良時代から用いられている、ことなどが指摘できる。

（高瀬要一）

## 平城宮出土金属製人形

平城宮跡発掘調査部

平城宮第154次調査で、宮東部における幹線水路S D3410から銅製の人形が出土した。この人形に類似した製品は、既に東三坊大路東側溝などから出土していたが、いずれも断片であったり変形していたために不明製品もしくは飾金具の一部として扱われてきた。考古第一調査室ではこの発見を機会に、平城宮出土金属製品の総点検をおこない、今までの出土品の中に銅製人形21点、鉄製人形3点が存在することを確認した。

銅製人形は、厚さ0.3mm前後に叩き延ばした銅薄板を、金鉄で幅1cm前後、長さ13.5cm前後の短冊形に切ってつくる。側辺の二ヶ所に左右から三角形の切込みをいれて頭部、胴部、脚部を分け、下端を逆V字形に切込んで脚を表現するが、木製人形に通有の手の切込みはない。少数ながら目、鼻、口をタガネで表現したものがあり、一部に銀箔を留める例もある。鉄製人形には銅製人形にみられた切込みがなく、厚さ2~3mmの短冊状鐵板にタガネによる刻線で目、鼻、口、手、脚を表現する。鉄製人形の最大のものは現長25.7cmあり、脚部を欠くところから本来は30cm近い製品とみられ、『延喜式』木工寮記載の長さ1尺の「鉄偶人」に相当するものと考えられる。『延喜式』によるとこの鉄偶人は金銀薄で飾られ、六月・十二月晦日の大祓や、天皇・中宮・東宮の「御頭、御麻」に数多く用いられている。今回発見の金属製人形の多くは銅製で、長さも1尺には及ばないが、宮内の幹線水路や宮の南面外濠である二条大路北側溝、入隅部の東面外濠である東一坊大路西側溝などから集中的に出土している点を考慮すると、宮城の南路でおこなわれた大祓や宮中での祓に用いられた可能性は高く、『延喜式』に記された儀式の内容が8世紀にまで遡りうる有力な証左の一つとなろう。

(松村恵司)



平城宮出土金属製人形（縮尺2:3）

## 調査研究彙報

### 建造物研究室

神戸市文化環境保存地区内歴史的建造物の保存修理 二ヶ年にわたり太山寺羅漢堂の修理指導をおこなった。工事中の調査で、建立年代は17世紀末頃に比定できること、もとは正面3間側面5間入母屋造妻入りの独立堂であったことなどが判明した。修理報告書既刊。  
(細見)

### 歴史研究室

東大寺文書調査 文化庁委嘱の東大寺文書調査。1974年から82年までに調査したものの中の若干の補遺と、重要文化財指定にともなう確認調査(文化庁美術工芸課と合同)。前年度につづき『東大寺文書目録』第六巻(編年索引と従来の指定品の目録)を公刊した。  
(鬼頭)

興福寺文書調査 昨年度につづき69・70・71箱の唯識・因明関係の論義草の調査を作成。69箱等に含まれる論義草の一部の紙背文書については、その一端を本年報に紹介。また第4箱にさかのぼって目録公刊用の原稿作成を進め、第22箱まで終了した。5月、9月、12月。  
(鬼頭)

薬師寺文書調査 東京大学史料編纂所との第4回共同調査。前年に引きつづき、第13箱以下の調査作成と、第11箱以下の写真撮影をおこなった。7月。  
(鬼頭)

西大寺文書調査 前年に引きつづき、第83箱より第89箱までの調査を作成した。そのほか、称徳天皇御山荘推定地の発掘調査との関連で、西大寺所蔵の西大寺絵図を調査した。  
(鬼頭)

その他の文書調査 石山寺(7月・8月)、醍醐寺(8月)、東京大学史料編纂所島津家文書(1月)の調査をおこなった。  
(鬼頭)

### 平城宮跡発掘調査部

複山城跡二の丸発掘調査 本年で3年目にあたり、大書院の西の式台から台所、局、奥向き御殿部分の調査をおこなった。礎石や東石はほとんど失われているが、岩盤をほり込んだ多数の小穴、建物周囲の溝、堀、台所のかまど、奥向き御殿の便所の跡などがみつかり、古図と併せてこの内御殿の配置と変遷をかなり明らかにできると思われる。  
(岡田・西村)

彦根城本丸御殿跡発掘調査 彦根市は特別史跡彦根城跡の本丸御殿跡に旧御殿の復原整備および市立博物館建設を計画し、事前の発掘調査にあたって当研究所が指導をおこなった。本年度は遺存状況確認のためのトレンチ調査で、59年度に全面調査を予定している。  
(宮本)

新潟県横瀧山廃寺の発掘 横瀧山の台地上ほぼ中央で建物の基壇を発見し、この基壇が木造基壇外装をもつことがわかった。検出したのは基壇のほぼ西半分と思われるが、削平のため基壇規模の確認までには至らなかった。磚瓦一点出土。  
(上野)

丹波国分寺跡の発掘 史跡丹波国分寺の整備にともなう確認調査。本年度は中門・回廊推定地の調査をおこない、塔心礎を通る東西線の南38mと50mの位置で2条の東西溝を検出。中門基壇とその南北の雨落溝と推定できる。この結果、昨年検出した基壇土の落ちは回廊基壇南縁にあたることが明らかとなった。7月~9月。  
(西)

**甲斐寺本廃寺の発掘(第2次)** 南門・中門推定地域と中心伽藍北方地域の調査をおこない、南門跡と中門跡の一部およびこれらをつなぐ参道を検出した。北方においては食堂・僧房などの遺構は検出できなかった。  
(森・清水)

**神野向遺跡の発掘** 常陸国鹿島郡郡衙推定地の調査。政庁の検出を目的に倉院の西南方約1500m<sup>2</sup>を発掘した。倉院区画大溝に近接した位置で、コ字状に配置された掘立柱建物や井戸、その東南で一列に並ぶ雜舎群などを検出。政庁であるかは未確定。10月～11月。  
(毛利光・松村)

#### 埋蔵文化財センター

**森将軍塚古墳** 今年度は後円部の発掘調査が実施され、調査・整備両面の指導をおこなった。調査面では、裾部において貼石帶とも呼べる遺構が検出され、また組合式箱形石棺など小型埋葬施設が予想以上に検出されたことや、後円部の主体部下層で内部石積がみつかったりしたため、埴丘調査は次年度に延長せざるをえなくなった。整備面では、二段墓壇をもつ竪穴式石室を16年ぶりに現出させ、型取りをした上でレプリカを作製した。当初何らかの低く平坦な覆いをつけて石室自体を公開する案も検討したが、松代地震クラスの災害のことも考慮し、埋め戻して保存することになった。  
(安原・木下)

**松本城二の丸跡** 昨年度末に長年調査団長として活躍された原嘉藤氏が急逝され、新体制のもとで濠、土塁の規模確認の発掘が続行された。一方整備面では、実施設計がまとまり、御殿跡の部屋割復原整備が実施された。今年度ではほぼ完了し、他に土蔵の修理と便所の新設も始まった。残るのは濠の復原と築地跡の復原であり、そのための発掘調査、整備実施設計は次年度も継続する。特に明治の土橋撤去後の濠水位の調整が問題となっている。  
(安原・宮本)

**小田原城の定常波探査** 小田原城の城米曲輪整備にともなう調査。曲輪築成前の旧地形をさぐるのを目的に探査。100m四方を10m間隔で測定。曲輪中央部が低く、湿地状であったこと、二条の小沢状の凹みが南西へ延びることを推定した。5月。  
(西村・山中・高瀬)

**大型出土木材の保存研究** 山田寺東回廊の建築部材の発見を機会に、大型の出土木材について、構築部材としての必要な強度を与え、過酷な展示・保管条件にも耐え得る保存法の開発研究を開始した。本研究のために大型の真空凍結乾燥機を導入。仕様は、試料室の大きさ、直径1.5m、長さ8m、試料凍結温度、最低-40°C。到達真空度0.1 Torr。京都大学と共に。  
(沢田)

**沖縄県那国トウグル浜遺跡出土石器類の調査** 本島北岸砂丘地に営まれた土器をともなわない八重山第一期の貝塚。空港拡張工事の事前調査。141点の石器類は、製作・使用・再利用状況から石器をめぐる生活の豊富な内容を示し、貴重である。9月。  
(松沢)

**「近畿地方出土木器の集成」研究会** 1983年2月9日、近畿各県の埋蔵文化財発掘技術者に呼びかけて、表記の研究会を発足した。その後、3月22日に第2回(於東大阪市立郷土博物館)、5月25日に第3回(於高槻市埋蔵文化財センター)、7月5日・11月28日に第4・5回(於奈良国立文化財研究所)で会合をもった現在、1984年度の刊行を目指し、『木器集成図録(近畿・歴史時代編)』の編集を進めているところである。  
(上原)

# 奈良国立文化財研究所要項

## I 事業概要

### 1 研究普及事業

#### 公開講演会

- (1) 1983年5月21日 第53回公開講演会  
「7世紀における同范軒瓦について」  
山崎 信二  
「高句麗の都城」  
千田 剛道
- (2) 1983年11月19日 第54回公開講演会  
「飛鳥の氏寺—山田寺を中心に」  
岩本 正二  
「古代庭園の植栽について」  
高瀬 要一

#### 現地説明会

- (1) 1983年6月18日 平城宮跡第149次発掘調査  
(平城京右京八条一坊十一坪) 異 淳一郎
- (2) 1983年7月2日 平城宮跡第150次発掘調査  
(第一次朝集殿推定地) 深沢 芳樹
- (3) 1983年7月16日 山田寺跡東回廊発掘調査現地見学会
- (4) 1983年9月10日 平城宮跡第152次発掘調査  
(第二次大極殿閣門・回廊地区) 内田 昭人

- (5) 1983年10月15日 石神遺跡発掘調査  
清水 真一
- (6) 1983年11月12日 藤原宮跡第37次発掘調査  
(西面中門) 菅原 正明
- (7) 1983年12月24日 平城宮跡第153次発掘調査  
(第二次大極殿東回廊地区) 松井 章
- (8) 1984年1月26・27日 称徳天皇山莊伝承地発掘調査現地見学会
- (9) 1984年3月24日 平城宮跡第154次発掘調査  
(内裏東方官衙地区) 松村 恵司
- 平城宮跡資料館・覆屋公開
- (1) 春季特別公開 1983年4月23日～5月5日  
見学者 14,245名
- 秋季特別公開 1983年10月22日～11月6日  
見学者 18,925名
- (2) 見学者数

区分	資料館	覆屋	計
1983年	65,322	46,515	111,837
累計	573,620	927,129	1,500,749

資料館は1970年度、覆屋は1968年度以降の累計

### 2 1983年文部省科学研究費補助金による研究

種 別	研 究 課 題	研究代表者	交 付 額
一 般 研 究 B	先史時代の漆製品に関する基礎的研究	工 楽 善 通	1,200千円
	古代埋蔵建築遺材の復原的研究	宮 本 長二郎	1,600
	古代における水産物の生産と使途に関する研究	狩 野 久	6,400
	古代武具の研究	猪 熊 兼 勝	1,300
	中世近世における建造物修理の技法に関する研究	岡 田 英 男	1,500
一 般 研 究 C	墨書き土器による律令機構末端組織の復原的研究	森 伸 夫	300
	古墳及び奈良・平安時代における土器製作技術の復原的研究	西 弘 海	600
	古代地方官衙遺跡の研究—郷関係官衙遺跡を中心として—	山 中 敏 史	1,400
獎 勵 研 究 A	北都九州地方における弥生時代後期土器の編年的研究	岩 水 省 三	500
	古代末・中世における焼塙窯の研究	岩 本 正 二	900
	弥生時代前期における木葉紋と流水紋の検討	深 澤 芳 树	800
	日本庭園における眺望行為の類型について	本 中 真	1,000
試 験 研 究 (I) 研 究 成 果 刊 行 費 (データ・ペース)	埋蔵文化財データ・ベースの開発研究	坪 井 清 足	6,400
	航空写真情報	坪 井 清 足	3,380
計	14件		27,280

### 3 飛鳥資料館の運営

- 展 示 第一展示室 常設展示  
第二展示室 特別展示「渡来人の寺」

(1983. 4. 22～1983. 5. 29)

特別展示「飛鳥の水時計」

(1983. 10. 5～1983. 11. 23)

## 普及

前年同様インフォメーションルームで観覧者の質問に応じている。また特別展示のカタログとして「渡来人の寺」及び「飛鳥の水時計」を刊行した。

入館者数 (1983. 4. 1~1984. 3. 31) 開館日数 315 日)

	普通観覧	団体観覧	有 料	無 料	合 計
一 般	46,244	29,863			
高・大	15,483	30,111			
小・中	16,180	66,463			
計	77,907	126,437			

## 模造製作

古法華 (兵庫県加西市)

## 4 埋蔵文化財センターの研修・指導

研修 埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

- (1) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (集落遺跡調査課程)  
1983年5月11日~5月24日 (参加者26名)
- (2) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等特別研修 (特殊調査技術課程)  
1983年6月17日~6月22日 (参加者27名)
- (3) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等一般研修

## (一般課程)

1983年7月25日~8月27日 (参加者23名)

- (4) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (遺跡測量課程)  
1983年9月16日~10月5日 (参加者16名)
- (5) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (遺跡保存整備課程)  
1983年10月13日~10月27日 (参加者28名)
- (6) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等特別研修 (埋蔵文化財基礎課程)  
1983年11月4日~11月9日 (参加者32名)
- (7) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (保存科学基礎課程)  
1983年11月16日~11月30日 (参加者16名)

- (8) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (中世近世遺跡調査課程)  
1983年12月6日~12月16日 (参加者30名)
- (9) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (環境考古課程)  
1984年1月18日~2月3日 (参加者19名)
- (10) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (保存科学応用課程)  
1984年2月16日~2月23日 (参加者19名)
- (11) 昭和58年度埋蔵文化財発掘技術者等専門研修 (発掘調査測定技術課程)  
1984年3月8日~3月22日 (参加者17名)
- (12) 研修員受入れ (一覧表)

氏 名	所 属	受入れ期間	受 入 れ 室	研修指導内容
保坂 康夫	山梨県埋文センター文化財主事	1983. 1. 17~ 1983. 2. 19	遺物処理研究室	鉄製品保存処理技術
山田 成洋	静岡県教委文化課指導主事	1983. 2. 14~ 1983. 2. 26	同 上	鉄製品木製品の保存処理
岩瀬 一夫 岩瀬 一孝 岩瀬 等	(財) 桐本町文化振興事業団職員	1983. 2. 23	同 上	木製品金属製品の保存処理
田代 清彦 田代 正人	同 上	1983. 3. 8	歴史研究室	木簡の処理方法
大橋 伸野	(財) 岩手県埋文センター	1983. 3. 10~ 1983. 3. 11	遺物処理研究室	遺構遺物の保存と管理方法
中西 正典	三重県教委外研修生(度会郡 玉城町立下外城田小学校教諭)	1983. 7. 1~ 1983. 7. 24	平城宮跡発掘調査部	発掘調査技術
中山 晓	同上(上野市立崇徳中学校教諭)	1983. 8. 1~ 1983. 10. 30	飛鳥藤原宮跡発掘調査 部	飛鳥藤原宮跡発掘調査
井藤 正文	同上(一志町立一志中学校教諭)	1983. 8. 1~ 1983. 10. 30	同 上	同 上
スーザンチアス ウインファン	米デラウェア大学 ウィントア博 物館保存科学校訪問研修	1983. 7. 9~ 1983. 8. 31	遺物処理研究室	保存科学実習
金炳虎	韓国文化財管理局文化財研究所 保存科学研究室化工技士	1983. 8. 1~ 1983. 9. 27	同 上	出土木材・遺構の保存処理

蔡 鳳 書	中国山東大学歴史学部助教授	1983. 10. 3～ 1983. 10. 29	集落遺跡研究室	発掘調査法
松 本 敏 三 考	瀬戸内海歴史民俗資料館職員	1983. 10. 6	遺物処理研究室	遺物保存処理
奈 真 美 緒	奈良市埋文センター技師	1983. 10. 17～ 1983. 12. 24	同 上	同 上
浦 坂 周 一	羅臼町教委事務員	1983. 11. 9～ 1983. 11. 18	遺物処理研究室	岩化木製品の保存処理
木 村 正 泰	(財)橋本県文化振興事業団職員	1984. 2. 24	平城宮跡発掘調査部	平城宮出土瓦について
木 中 大 橋 等人夫	(財)岩手県埋文センター主任専門調査員	1984. 3. 1	平城宮跡発掘調査部 飛鳥藤原宮跡発掘調査部	建築構造による上部構造の特定・山寺田回廊部材
国 生 尚 尚	岩手県立博物館資料管理係長	1984. 3. 15	埋文センター教務室	資料管理システムについて
高 橋 正 義	宮崎県総合博物館埋文センター主任	1984. 3. 22	情報資料室	埋蔵文化財の整理収蔵にともなう情報処理について
茂 山 譲	鹿児島県埋文センター主任	1984. 3. 25～ 1984. 3. 29	平城宮跡発掘調査部	遺跡遺物の写真撮影

### 発掘調査・整備・探査指導

(北海道) 松川法川北岸遺跡、(青森県) 垂柳遺跡、(岩手県) 毛越寺庭園、志波城跡、(宮城県) 陸奥国分寺跡、(秋田県) 払田柵跡、(福島県) 慧日寺跡地内篠一塙跡、和久上町遺跡、(茨城県) 七反田遺跡、神野向遺跡、虎塚古墳、長町遺跡、(栃木県) 下野薬師寺跡、下野国府跡、聖山公園遺跡、(群馬県) 三ツ寺遺跡、上野国分寺跡、鳥羽遺跡、宇通遺跡、(東京都) 前田耕地遺跡、(神奈川県) 小田原城跡城米曲輪、(新潟県) 横流山遺跡、(富山県) ジョウベのま遺跡、流通業務閉地21遺跡、(石川県) 真脇遺跡、(福井県) 朝倉氏遺跡、(山梨県) 寺本庵寺跡、(長野県) 森将軍塚古墳、松本城二の丸庭園、信濃國府跡、中島B遺跡、(静岡県) 横須賀城跡、柏谷横穴群、(愛知県) 吉胡貝塚、尼張国府跡、勝川庵寺跡、(三重県) 草山遺跡、(滋賀県) 西浜遺跡、石山貝塚、彦根城跡、(京都府) 鶴井遺跡、丹波国分寺跡、集隼女車塚古墳、太鼓山窯跡、蟹ヶ坂瓦窯跡、千代川・桑寺遺跡、松花堂跡慈照寺庭園、(大阪府) 大塚古墳、難波宮跡、海会寺跡、(兵庫県) 中山莊1号墳、辻井遺跡、三ツ塚院寺跡、丹波國大山莊、赤穂城本丸跡、山垣遺跡、櫻山城二の丸跡、處女塚古墳、広度庵寺跡、箕谷二号墳、(奈良県) 飛鳥水落遺跡、新沢千塚古墳、(和歌山県) 岩橋千塚古墳、箱谷古墳群、尾ノ崎遺跡、田屋遺跡、上野庵寺跡、(鳥取県) 因幡國守跡、(鳥根県) 大念寺古墳、山代郷正倉跡、朝日たたら跡、高畠遺跡、石見銀山遺跡、岡田山古墳、(岡山県) 旭川放水路第1築高地、美和山古墳、中宮1号墳、(広島県) 草戸千軒町遺跡、(山口県) 大内遺跡、須佐唐津窯跡、中ノ浜遺跡、長門深川古窯跡、延

行条里遺跡、(香川県) 讃岐国分寺跡、(愛媛県) 伊予国府跡、(福岡県) 大宰府跡、安房遣跡菜園場窯跡、鎌先前方後円墳、城内遺跡、珍敷塚古墳、牛頭古窯跡群、金隈遺跡、(佐賀県) 丸山古墳、(大分県) 伊藤田地区古代窯跡、(宮崎県) 土器田横穴、宮崎郡国都市遺跡、西都原古墳群、(鹿児島県) 薩摩国分寺跡、王子遺跡、橋牟礼川遺物包蔵地、(沖縄県) トウグル浜遺跡、今帰仁城埋蔵文化財ニュース刊行

- 第41号 陶器関係文献目録
- 第42号 埋蔵文化財関係報告書一覧
- 第43号 手持カメラによる写真測量
- 第44号 行政データ・埋蔵文化財関係記事一覧
- 第45号 遺構の保存科学
- 第46号 金属製造物の接着・補強材料

### 5 その他

#### 委員会等

##### 第10回飛鳥資料館運営協議会

1983年5月23日 於飛鳥資料館

##### 平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

1983年6月10日・11日 於平城宮跡資料館講堂  
朱里制研究会(第3回)

1984年1月24日・25日 於平城宮跡資料館講堂  
外國出張

町田 章 文部省在外研究員として華南地方における新石器時代遺跡の研究のため中華人民共和国へ出張

1983年4月8日～同年4月27日

伊東太作 文部省在外研究員として写真測量の文化財への応用研究のためオランダ、連合王国、フランス、シンガポール、ベルギーへ出張

1983年10月15日～同年12月11日

岡田英男 古代寺院発掘調査と建造物保存修理に関する技術交換のため大韓民国へ出張

1983年11月7日～同年11月14日

## 協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委託を受けて買収業務を担当しているが、1983年度の状況は下記の通り。

区分	面積	金額
1983年度	14,170.22m <sup>2</sup>	330,249,587円
国有地合計	270,781.02	5,598,085.197

## II 図書及び資料

図書 72,718冊

区分	種別	購入	寄贈	計
58年度	和漢書	1,576	3,988	5,564
	洋書	260	58	318
累計	和漢書	34,961	32,940	67,901
	洋書	4,122	695	4,817

写真 259,143点 (1983年度末現在)

## III 研究成果刊行物

## 1 1983年度刊行物

各 称	
史料 第26冊	東大寺文書目録第6巻
基準資料 第9冊	瓦編9
国録 第10冊	渡来人の寺—怡隈寺と坂田寺—
	第11冊 飛鳥の水時計
	第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで
報告書等	条里制の諸問題II
	飛鳥資料館案内(再版)
	平城宮出土軒瓦型式一覧(補遺篇)
	昭和67年度 平城宮跡発掘調査概報
	平城宮発掘調査出土木簡概報16
	遺跡整備資料III
	平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告
	平城京在京二条二坊十三坪の発掘調査
	平城京在京四条二坊一坪発掘調査報告
	飛鳥・藤原宮発掘調査概報13
	藤原宮出土木簡6

## 2 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師連慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
	第7冊 兴福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊 文化史論叢II
	第9冊 川原寺発掘調査報告
1960	第10冊 平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊 院家建築の研究
1962	第12冊 乃所安阿旁陀佐扶度 殿改造系庭園の立地的考察
	第13冊 レースと金龜舎利塔に関する研究
	第14冊 平城宮発掘調査報告II 官衙地域の調査
1963	第16冊 平城宮発掘調査報告III 内裏地域の調査
1965	第17冊 平城宮発掘調査報告IV 官衙地域の調査
	第18冊 小坂遠州の作事
1967	第19冊 藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊 名物製の成立
1971	第21冊 研究論集I
1973	第22冊 研究論集II
1974	第23冊 平城宮発掘調査報告V 平城京左京一 条三坊の調査
	第24冊 高山一町並調査報告一
1975	第25冊 平城京左京三條二坊
	第26冊 平城宮発掘調査報告VI
	第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告I
	第28冊 研究論集III
	第29冊 木曾奈良井一町並調査報告一
1976	第30冊 五条一町並調査の記録一
1977	第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告II
	第32冊 研究論集IV
	第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民 家調査報告
	第34冊 平城宮発掘調査報告VII
1978	第35冊 研究論集V
	第36冊 平城宮整備調査報告I
1979	第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告III
	第38冊 研究論集VI
1980	第39冊 平城宮発掘調査報告X
1981	第40冊 平城宮発掘調査報告XI

## 奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954	第1冊 南無阿彌陀仏作善集(複製)
1955	第2冊 西大寺叡尊伝記集成
1963	第3冊 仁和寺史料 寺誌編1
1964	第4冊 俊乗坊重源寺史料集成
1966	第5冊 平城宮本簡1 國版
1967	第6冊 仁和寺史料 寺誌編2
1969	第5冊 平城宮本簡1 解説(別刷)
1970	第7冊 唐招提寺史料1
1974	第8冊 平城宮本簡2 國版・解説
	第9冊 日本美術院形刻等修理記録I
1975	第10冊 日本美術院形刻等修理記録II
1976	第11冊 日本美術院形刻等修理記録III
1977	第12冊 藤原宮本簡1 國版・解説
	第13冊 日本美術院形刻等修理記録IV
1978	第14冊 日本美術院形刻等修理記録V
	第15冊 東大寺文書目録第1巻
1979	第16冊 日本美術院形刻等修理記録VI
	第17冊 平城宮本簡3 國版・解説
	第18冊 藤原宮本簡2 國版・解説
	第19冊 東大寺文書目録第2巻
1980	第20冊 日本美術院形刻等修理記録VII
	第21冊 東大寺文書目録第3巻
1981	第22冊 七大寺巡礼私記
	第23冊 東大寺文書目録第4巻
1982	第24冊 東大寺文書目録第5巻
	第25冊 平城宮出土墨書き土器集成I

## 奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973	第1冊 瓦編1 解説
1974	第2冊 瓦編2 解説
1975	第3冊 瓦編3
1976	第4冊 瓦編4
	第5冊 瓦編5
1978	第6冊 瓦編6
1979	第7冊 瓦編7
1980	第8冊 瓦編8

## 飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976	第1冊 飛鳥白鳳の在銘金剛仏
	第2冊 飛鳥白鳳の在銘金剛仏 銘文篇
1977	第3冊 日本古代の墓誌
1978	第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇
	第5冊 古代の誕生仏
1979	第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—
1980	第7冊 日本古代の廟尾
1981	第8冊 山田寺展
1982	第9冊 高松塚拾年

## IV 定員

区分	指定職	行政職	行政職	研究職	計
1983年度	1	22	5	67	95
1984年度	1	22	4	67	94

## V 予算(1983年度)

人 件 費	453,378千円
運 営 費	629,888
事 業 管 理	4,231
一 般 研 究	55,348
特 別 研 究	1,602
発 揭 調 査	397,063
宮跡 整備 管理	53,243
飛鳥資料館運営	46,557
埋蔵文化財センター運営	42,006
新庁舎維持管理等経費	29,838
施 設 費	330,466
施設 整備 費	25,118
平城宮跡等整備費	305,348
各所修繕費	10,985
計	1,424,717

## VI 施設

土 地 (当所所管) 27,375m<sup>2</sup>本 庁 舎 8,860m<sup>2</sup> 飛鳥資料館 17,092m<sup>2</sup>飛鳥資料館宿舎 1,343m<sup>2</sup> 郡山宿舎 80m<sup>2</sup>(文化庁所管) 1,313,492m<sup>2</sup>平城宮跡地区 1,037,670m<sup>2</sup>藤原宮跡地区 270,781m<sup>2</sup>飛鳥稻瀬宮殿跡地 5,041m<sup>2</sup>

## 建 築 物 (1)

区分	本庁舎	平成	藤原	飛鳥	藤原	宮跡	計
事務室	568	138	116	90			912
研究室	1,419	252	274	77			2,022
資料室	1,021		36	36			1,093
会議室	338	64	53	42			497
講堂		384		89			473
展示室		576		648			1,224
写真室	79	256	61	64			460
復元展示室		1,686					1,686
車	84	200	204	94			582
倉庫	123	4,945	2,087	480			7,635
修理工場	1,416						1,416
その他	1,745	2,131	251	1,062	36	5,225	
計	6,793	10,632	3,082	2,682			36,23,225

## 建物(2)

重要文化財旧米谷家住宅	213m <sup>2</sup>
郡山宿舎(ふくやしゆく)	153m <sup>2</sup>
飛鳥資料館宿舎	225m <sup>2</sup>
施設総計	23,816m <sup>2</sup>

## 主要工事

(1) 施設整備費	
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺物倉庫新設工事	千円 5,118
奈良国立文化財研究所複屋改修工事 (建設省季任工事)	20,000
(2) 平城宮跡地等整備費	
平城宮跡環境整備工事	3,900
" " 昭和58年度第Ⅰ期工事	35,000
" " " 第Ⅱ期工事	118,000
" " " 第Ⅲ期工事	33,000
平城宮南面大垣復原工事	95,000
平城宮跡地形調査工事	1,930
(3) 各所修繕	
平城宮跡資料館屋根塗装工事	5,950

## VII 人事異動

(1983年4月1日～1984年3月31日)

4月1日 庶務部会計課長に昇任

松本 保之	松本 保之
庶務部庶務課警務員長に昇任	森田 光治
山梨大学庶務課長に転任	三森 武雄
東北大学文学部助教授に転任	今泉 隆雄
文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官に転任	加藤 光彦
国立三瓶青年の家庭務課に転任	津村 広志
平城宮跡発掘調査部主任研究官に転任	高瀬 要一
庶務部庶務課長に配置換	浜山 保美
歴史研究室長に配置換	鬼頭 清明
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室に配置換	山崎 信二
藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室に配置換	立木 修
埋蔵文化財センター研究指導部集落遺	

跡研究室に配置換 上原 真人

辞職 木寅 忠雄

平城宮跡発掘調査部史料調査室に採用 橋本 義則

寺崎 保広

事務補佐員(飛鳥藤原宮跡発掘調査部) 大西 洋子

に採用 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任 亀井 伸雄

10月1日 埋蔵文化財センター研究指導部発掘技術研究室長に昇任 西村 康

11月1日 庶務部庶務課庶務係長に昇任 田部 信重

大阪大学溶接工学研究所共同利用掛長 藤原 賢二

に転任 1月1日 平城宮跡発掘調査部史料調査室に採用 鮎野 和己

2月1日 辞職 藤田 広幸

3月1日 辞職 藤田千賀枝

3月31日 辞職 亀井 伸雄

## VIII 組織規定

文部省組織令 抜萃

昭和59年政令第127号

昭和59年7月1日全部改正

## 第108条

2 前項に定めるものほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立文化財研究所(前後略)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

文部省設置法施行規則 抜萃

昭和28年1月13日文部省令第2号

追加昭和43年6月15日文部省令第20号

昭和45年4月17日文部省令第11号

昭和45年4月12日文部省令第6号

昭和49年4月11日文部省令第10号

昭和50年4月2日文部省令第13号

昭和51年5月10日文部省令第16号

昭和52年4月18日文部省令第10号

昭和53年4月5日文部省令第19号

昭和53年9月9日文部省令第33号

昭和55年4月5日文部省令第14号

昭和55年6月25日文部省令第23号

昭和58年10月1日文部省令第25号

昭和59年7月1日文部省令第37号

## 第5章 文化庁の施設等機関

## 第4節 国立文化財研究所

**第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。**

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

**第2款 奈良国立文化財研究所**

(所長)

**第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。****2 所長は所務を掌理する。**

(内部組織)

**第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。****2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び理蔵文化財センターを置く。**

(庶務部の分課及び事務)

**第125条 庶務部に、次の二課を置く。**

一 庶務課

二 会計課

**2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。**

一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関する事務。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五 この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関する事務。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

**3 会計課においては、次の事務をつかさどる。**

一 予算に関する事務を処理すること。

二 経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処

理すること。

**四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。****五 庁内の取締りに関する事務。**

(建造物研究室等の事務)

**第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。****2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。**

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

**第128条 平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。****2 前項の各室においては、平城宮跡に関し、次項から第六項までに定める事務を処理するほかその発掘を行う。****3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。****4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。****5 計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。****6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。**

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務)

**第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。****2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し、次項から第五項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。****3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。****4 遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。**

5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

(飛鳥資料館)

第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に關し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の觀覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

(飛鳥資料館の館長)

第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理する。

(飛鳥資料館の二室及び事務)

第132条 飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。

2 庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。

- 一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。
- 二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。
- 三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

(埋蔵文化財センター)

第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。

- 一 埋蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。
- 二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行ふこと。
- 三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。

四 埋蔵文化財に關する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。

(埋蔵文化財センターの長)

第134条 埋蔵文化センターに長を置く。

2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

(埋蔵文化財センターの内部組織)

第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。

(教務室の事務)

第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

(研究指導部の六室及び事務)

第137条 研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に屬するものを除く）をつかさどる。

3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に屬するものを除く）をつかさどる。

4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

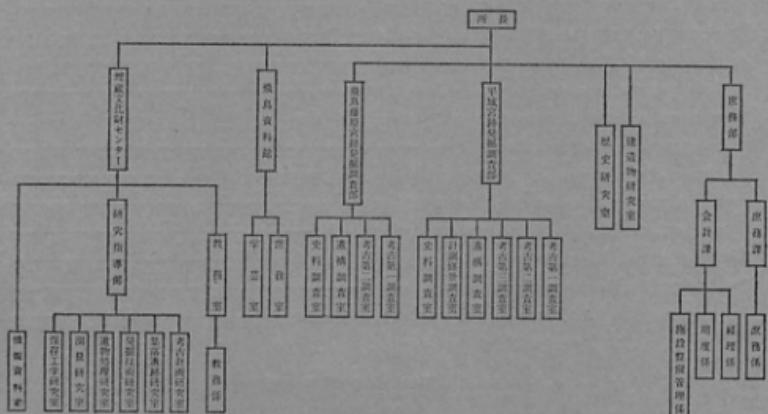
6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

(情報資料室の事務)

第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

職員 (1984年7月1日現在)



ANNUAL BULLETIN  
OF  
NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES  
RESEARCH INSTITUTE  
1984  
CONTENTS

	Page
Preface .....	1
Excavation of the East Corridor, Yamada-dera Temple .....	2
Excavation of the Asuka Area .....	6
Excavation of the Ancient Fujiwara Palace Site and City Site .....	11
Investigation of the Shakyamuni Image Pedestal, Asuka-dera Temple .....	18
Investigation of the Stone Base of Spire, Jorin-ji Temple .....	20
Excavation of the Heijo Palace Site and City Site .....	21
Excavation of the Ancient Buddhist Temples and Shinto shrines in Nara .....	32
Wooden Writing Tablets excavated in the Heijo Palace Site .....	34
Excavation of Horyu-ji Temple .....	37
Investigation of Medieval Documents on the Revers of "Rongiso" Preserved ion Kofukurji Temple .....	38
Investigation of the Buddhist Temple and Shinto Shrine Buildings in Edo Period, Shiga Pref. ....	42
Survey of the Nara-Machi (Ole Town "Nara") .....	44
Survey of the Farmhouse in Nara City .....	46
A Typological Study of the Farmhouse in Japan .....	47
Investigation of "Hyakumanto" (Miniature Wooden Pagodas) preserved in Horyu-ji Temple .....	48
Special Exhibition of Asuka Historical Museum .....	49
A Preliminary Study on Dendrochronology (4) .....	50
Photogrammetry by the Non-metric Camera .....	52
Prospecting Method by the Standing Wave .....	53
A Development Study of the Data Base System .....	54
Symposium on the Conservation of "Jori-sei", Ancient Demarcation of Arable Land (3) .....	56
Physical Layout of the Heijo Palace Site and Fujiwara Palace Site .....	57
Brief Reports on the Research Tours in Europe .....	61
Open Lectures Held by the Institute during 1983 .....	62
Metallic Sacred Figurines excavated in the Heijo Palace Site .....	63
Other Specific Researches and Surveys .....	64
Organization and Activities of the Institute .....	66

Published by  
Nara National Cultural Properties Research Institute  
Nara, 1984

ANNUAL BULLETIN  
OF  
NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES  
RESEARCH INSTITUTE

1984

CONTENTS

	Page
Preface .....	1
Excavation of the East Corridor, <i>Yamada-dera</i> Temple.....	2
Excavation in the Asuka Area .....	6
Excavation of the Ancient Fujiwara Palace Site and City Site.....	11
Investigation of the <i>Sākyamuni</i> Image Pedestal, <i>Asuka-dera</i> Temple.....	18
Investigation of the Stone Base of Spire, <i>Jōrin-ji</i> Temple .....	20
Excavation of the Heijo Palace Site and City Site .....	21
Excavation of the Ancient Buddhist Temples and Shintō Shrines in Nara.....	32
Wooden Writing Tablets excavated in the Heijo Palace Site .....	34
Excavation of <i>Hōryū-ji</i> Temple .....	37
Investigation of Medieval Documents on the Reverse of “ <i>Rongisō</i> ” preserved in <i>Kōfuku-ji</i> Temple .....	38
Investigation of the Buddhist Temple and Shintō Shrine Buildings in Edo Period, Shiga Pref.....	42
Survey of the <i>Nara-Machi</i> (Old Town “Nara”).....	44
Survey of the Farmhouse in Nara City .....	46
A Typological Study of the Farmhouse in Japan.....	47
Investigation of “ <i>Hyakumantō</i> ” (Miniature Wooden Pagodas) preserved in <i>Hōryū-ji</i> Temple.....	48
Special Exhibition of Asuka Historical Museum .....	49
A Preliminary Study on Dendrochronology (4).....	50
Photogrammetry by the Non-metric Camera .....	52
Prospecting Method by the Standing Wave .....	53
A Development Study of the Data Base System .....	54
Symposium on the Conservation of “ <i>Jōri-sci</i> ”, Ancient Demarcation of Arable Land (3) .....	56
Physical Layout of the Heijo Palace Site and Fujiwara Palace Site .....	57
Brief Reports on the Research Tours in Europe .....	61
Open Lectures Held by the Institute during 1983 .....	62
Metallic Sacred Figurines excavated in the Heijo Palace Site .....	63
Other Specific Researches and Surveys .....	64
Organization and Activities of the Institute .....	66

Published by

Nara National Cultural Properties Research Institute

Nara, 1984